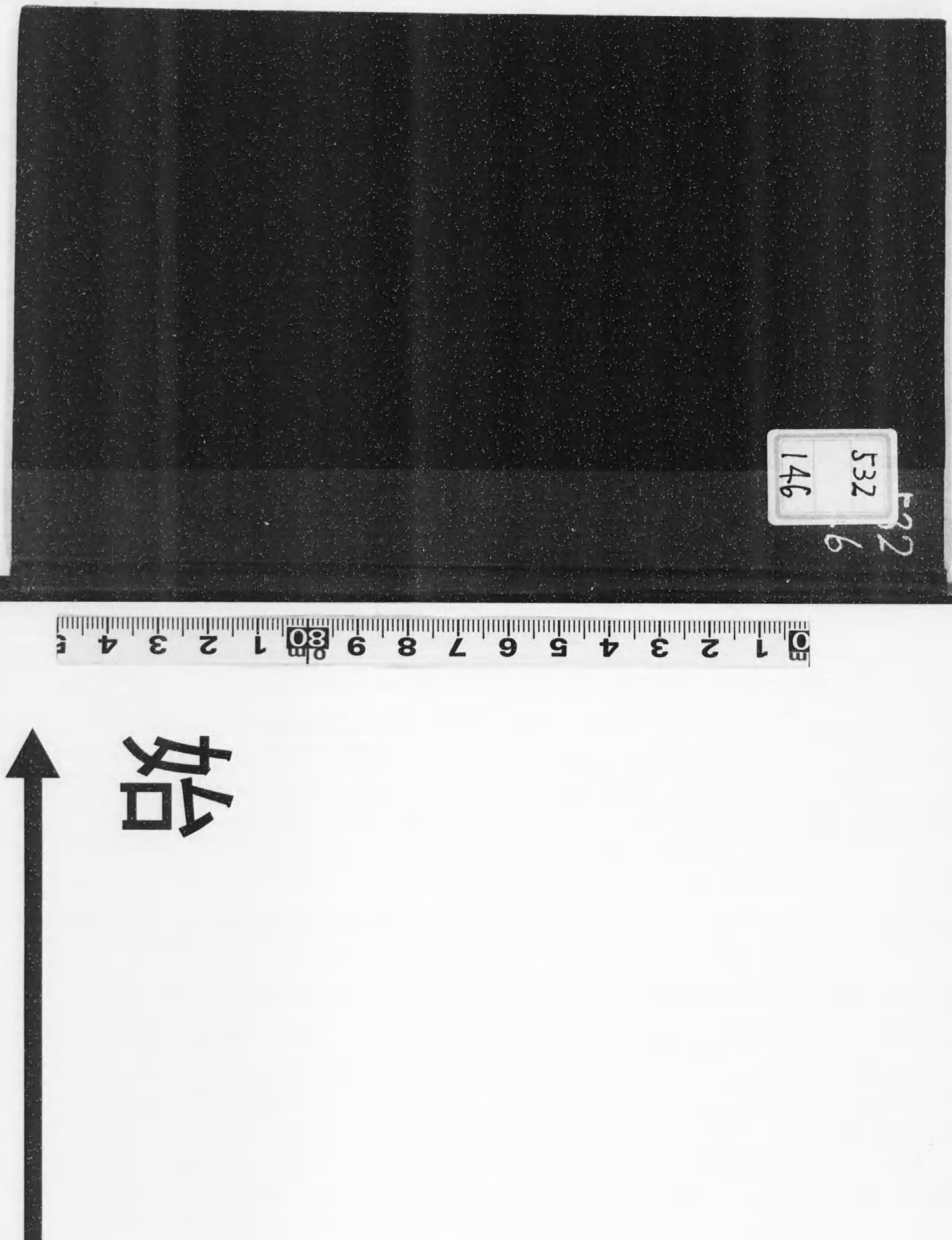
532
146
522
6
40

コ-135
か

山鹿素行

齋藤弔花著

原田博文堂

大正
14.6.13
内交

僕從
學文
所其
省也

先生自警

夙興夜寐事父母誨子弟睦親族養僕從
接賓客貴志士矜無能行有餘力則學文
各我所志而其實不厚只在名聞故所其
爲不致盡其極是我尤所可着力自省也

戊申仲秋　乃本命典謹言

532-146

山鹿素行

齋藤弔花著

一、出生と同胞

焰々たる磐梯山の紅蓮は萬古宇宙成生の昔を語り、蒼々たる猪苗代の湖水は森羅萬象の影を宿す邊り、會津六十萬石の城下に於て稀代の兵學者山鹿流の軍學創設者德川初期學界の慧星我が素行山鹿先生は呱々の聲を擧げぬ。時しも元和八年八月二十六日にてありき。應仁の亂を振り出しに亂麻の如かりし天下六十餘州も漸く德川幕府によつて定まるの瑞徵臻れりと雖も、こもすれば戰國の餘殃血腥き殺伐なる鍔の音所在に聞えき。

素行の父六右衛門高道は當時會津城主蒲生忠鄕侯の老臣町野左近將監幸和に身を寄せて、才能を認められ、食祿二百五十石を給せられ、家臣の如くに遇せられたり。初め彼は地位を求めて伊勢龜山

の城主關長門守一政に仕へ祿二百五十石を食めり。後一政の移封と共に伯州に移る。然るに僚士某と意見の衝突に因して六右衛門は某を殺害して會津に脱走し、町野左近將監に身を寄せたるなりき。町野は高道の逸材たるを知悉せるの故を以て彼を城主蒲生忠郷に推擧せんものと大に心膽を碎けり。於茲乎、町野は先づ其の艶麗稀なる侍女岡備後の守娘を高道に送つて其の妾となさしめき。而して此の女腹に生れたるは素行其人なり。岡氏は後に高道の後妻となれる賢夫人なり。

素行が精悍の氣と徹底的思想と破邪顯正せずんば止まざるの心意とは斯の會津の峻烈清澄なる山川と水明と將た又其の父母より享受せる賜なりといふべし。

彼には其の同胞として、一人の異母兄と三人の異母姉と一人の同母弟ありき。異母兄は總左衛門と呼び、蒲生氏の嗣絶へて斷絶するや、町野氏の幕府の百人組頭として仕を變ゆるに從つて部下の與力となれり。異母姉三人のうち長姉は三木某に嫁し、次姉は象松七兵衛と呼べる幕府麾下の士人に嫁せり。第三姉亦徒士某に嫁して各後ありと傳ふ。同母弟を平馬と呼び、後に肥州侯松浦家に仕へて其の家老職に上れり。

二、山鹿家の祖先

山鹿家は其の家譜に見ゆる如くに、遠祖は田原藤太秀郷の實弟藤田原次秀遠に出づ。而して藤次秀遠は筑前山鹿城の城主たりしより、山鹿の地名を以て其の姓氏とするに至れりといへり。（山鹿は山鹿岬と稱し神功皇后の三韓征伐に際し軍船を率ゐて出發遊ばされたる日本外征史上の由緒を有するの地なり）今素行自筆の日記所載の家譜によつて討ぬれば左の如し。

山鹿家は藤原の出にして、其の家紋は違ひ『鷹の羽』なり。而して後、橘の紋を用ひしなり。

『家傳に云く、藤原秀郷（左大臣魚名五男藤原成豊を生む男也）に弟某といふものあり、秀郷字は藤太、弟の某字は藤次、天慶年中に鎭西の奉行たり（秀郷武藏守に任ぜられ、以て關左を監す）山鹿岬に居る（山鹿岬は往時神功帝の船を繫ぐの地也）遂に山鹿城を築き、世々筑前守と爲つて此の地に在り、子孫山鹿を以て氏と爲す（世々秀を以て字と爲し藤次を以て名と爲す。）壽永元年八月、平族西海に落魄す、山鹿秀遠（平家紀を見るに、兵は藤次九州第一の精兵）兵士三千を帥ひて、安德帝を山鹿城に護る。（秀遠より秀郷の弟某に迫ぶまで、系譜紛失して分明ならず）

菊池隆直（二郎）原田種直（少弼）忽ち反し、平氏遂に逃る。秀遠安德帝を奉じて讃州八島に到る。苟に內裏を營む。此時九州四國の群將悉く平氏に背く、唯秀遠力を盡して處々に馳ふ。帝大に其の功を稱美し、鎭西大將軍に任ず、軍事皆秀遠に決す、元曆元年三月壇浦の役に、秀遠舟師五百艘を以て先鋒たり、松浦黨三百艘を以て、二陣と爲す。平族三帥と爲して、秀遠精練控捲五百人を選び、五百艘を長と爲し、約を定めて源氏を夾射す。源師利あらず、此に於てか秀遠阿波成良（民部大輔）と、胥議して帝の船を中にし、秀遠成良舟師數百艘を以て、將に其の左右に翼して、源軍を裏み擊たんとす。成良忽ち志を源氏に通じ、謀既に泄る。平族悉く海洋に沈沒し、或は戰死し、或は生虜。秀遠徹服し潛行して勢州に逃る。（伊賀伊勢は元と平氏の食地）平盛國に隨ふ（平資盛皆勢州鈴鹿郡久我庄に貶せらる。資盛歸洛す、西の洋に沒してより其子盛國北條時政を憑んで勢州に在り）建仁四年盛國の子實忠に勢州を賜ひ、關氏に改む、（或は云く、小松維盛、僞て水に入るまねして吉野に在り、遂に勢州に逃る、秀遠從ふ）久して秀遠勢州に歿し、子孫或は筑前に歸り（一に云く、秀遠の子孫、肥後に住し亦山鹿氏を稱す）或は勢州に在り足利家の時秀遠の子孫、筑前に在り代々山鹿筑前守と稱す是也）其の勢州に在る者世々關氏と婚を爲す秀遠より貞實（千助）に迨ぶまで、代々の系譜燒失して分明ならず。』と錄す。貞實（千助）は素行の祖父市助の兄にして勇武絕倫也。武勇を以て天下に鳴りしかかる祖先の血を享けたる素行が天下泰平の世に生れたりしは幸か不幸か、彼れの行くべきの一途は兵學の他あらざりしなり。蓋し素行が我邦空前の大兵學者とし德川幕府三世紀間に於ける最も偉大なる人物の一人に數へらるる所以のものは其の遺傳と性向と時代と境遇の依つて然らしむるなりき。

三、命名と父の轉業

西奥の盆地會津城下は脈々たる靑巒蒼綠の色漸く褪せて樹木の梢も一と葉二た葉と黃ばみかけたる舊曆八月廿六日の夜、猪苗代の藍淵片破月の湖面を照し、大空の彥星小星の影も底ひ深き湖水に一つ一つ數へつべき頃、一士人の奥座敷に呱々の聲洩れ聞へぬ。これぞ本編の主人公素行山鹿先生の初聲にてありき。

父六右衛門は一女中の

『坊様、御目出度く御誕生で御座ります』
といふ知らせに、滿面嬉悅の色を湛へて、
『男子か、それは何よりぢや、奥は安泰か』
『ハイ、奥様御達者、殊の外の御安産で御座いました』
『ソーカ、山鹿の家もこれから繁昌ぢや』
と、行儀よく辭儀して出て行く女中を見送りながらいへり。
六右衛門は獨り語ちて
『此の子は母の胎内にゐる時から、其の容子が異つてゐた。八月廿六日といへば秋霜も近き一點曇りなき澄み渡つた秋天高き頃ぢや。マア、此の子の前途は公明正大の氣を宿すのぢや。大事に育てなくてはならぬ』
といつて我が子の前途に多大の望を囑して喜べり。
七夜の命名日に當つて父六右衛門は此の嬰兒に『左太郎』と命名しぬ。而して後再び文三郎と改めたり。蓋し父の心は太平の天下に在りて『文』に親ましめんとの意なり。生母岡氏亦よく良妻賢母

たるの資質あり。
左太郎(文三郎)生れて甫めて三歳、即ち寛永元年、會津侯蒲生家の嗣絶へて同家の斷絶を見るに至りぬ。六右衛門の恩人町野左近將監幸和の會津を出でゝ江戸幕府に仕へて旗下の士となるに及び六右衛門從つて江戸に移る。此の時已に六右衛門主取仕官の念慮を斷ち、他に糊口の途を需めんとしぬ。蓋し六右衛門の意、主取りに緣薄きを思へばなり。於茲乎、六右衛門千思萬考の後、自ら剃髮して『修立庵』と號し醫を其の稼業とせり。
立庵は尋常平凡の武士にあらず、嘗に武道に堪能なるのみならず、至つて仁心深く、禮節を守るに頗る厚かりき。貧困の病者に會へば少しも勞費を吝まずして極力之を救恤し、亦他人に對しては懇切叮嚀にして曾て其の約を違へたることなし。故に貧者よりは父の如くに慕はれ、知友朋輩よりは信任頗る厚かりき。唯だ其の一徹にして一歩も曲げざる頑直の精神は往々人をして不遜の思ひを懷かしめぬ。併も其の子女に教養に至つては天下稀に見る熱心にして、日夜に父祖の忠烈義勇を念とし、我が山鹿家より天下後生に名を謠はるゝの人士を出さんことに潛心努力せり。

四、嚴父の教育

文三郎甫めて六歳、父より素讀を敎へられ、其の强記なる流石の父六右衛門を驚嘆せしめぬ。生母岡氏亦幼兒文三郎に萬葉集今古集の和歌を誦し更に源氏物語など時折々に讀み聞かしめぬ。文三郎八歳、既に四書(大學中庸論語、孟子)五經(詩經、書經、易經、春秋、禮記)七書(孫子、吳子、司馬法、慰繚子、三略、六韜、大宗問對)はいふに及ばず、詩文の類數種まで破讀して往々老成人をして舌を卷かしむることありき。彼れが初めて父六右衛門に大學の素讀を敎はりし時父六右衛門は

『文三、此の大學といふ書物は昔の聖人の殘された書であるぞ、これを讀めば上は天子樣から下は庶民に至るまでの一人間の一道が明かに示されてある。決しておろそかにはならぬ。又學問の要諦が一切此の書に載せられてある。これをよく御讀み、サア敎へて上げやう』

といつて手を取るやうにして學問の緒口を開いた。文三郎は、

『では、これを讀みますれば今古を通じての人間の道がわかりますので御座りますか。すると私共でも偉い人になれるのですね。父上。』

『さうぢや、此の書の中に明二明德一といふ句があるが、此れが大學の中心であり又學問の中樞である。これを身に行ふことが學問の第一義ぢや』

『左樣で御座りますか、父上、それでは、其の明二明德一にしますれば人間萬事がはつきりといたしまして、偉い人になれるのですね』

『さうとも、ウム、それが仲々六ケ敷いのぢや。ぢやが、これは古への人々の蹈んだ途であるから今の人だつて出來ぬといふわけぢやない。俺達も若い時分から武藝に身を固めて殆ど學問をする餘裕がなかつたので、こんな木强漢で終るのぢや。もう時代も變つて來た。武を忘れてはならないが、太平の時代には學問の修業を怠つてはならぬ。お前もこれから、此の太平の御代で名を揚げることに心懸けなくてはならぬぞ』

『ハイ、かしこまりました。父上の御敎訓は夢忘れはいたしません。』

と、文三郎は八歳の子供としては實に大成人の志望を有する空恐ろしき迄に發達せる兒童にあるなり。將來文三郎が贖世の大兵學者たるの素地は其の父六右衛門の膝下に在つて開發せられたるなりき。孫、吳、三、六の讀破了得、八歳の兒童にして既に然り、文三郎が將來素行先生として我邦の

學界に一大波瀾を起すの端は此の時既に業に胚胎せられたるなり。

五、賢母の教訓

或時、生母岡氏が庭前の梅花も開いて、馥郁たる香氣を放つて春も長閑なる温かき日向よき椽側にて文三郎を相手に四方八方の話の中に遠祖蒲生秀郷、秀遠の武勇物語をなせるが、母は

『文三郎、大きくなれば其方は何になられるのか』

と訊くと文三郎は可愛らしく悧々しき面を母に向けて

『母上、私、亂世で御座りますれば遠祖秀遠秀郷のやうな武勇の勇將になります。なれど、先刻父上も仰せられました。今は太平の世、武は忘れはいたしませぬが、文を以て世に立ち、家名を揚げようと存じます』

『それはよくいはしやつた。武士が太平の世に武を忘れることは其の職を忘れたといふもの、なれど太平の世には文事を以て世を治めるなれば、お前の心懸は洵に結構ですぞや。それでは何にか

父上から今日は何を教へて戴いたのか。』

『ハイ、今日は七書の中の六韜の初めを』

『では兵學であらう』

『左樣で御座ります。私、七書を孫子から吳子、吳子から司馬法、慰繚子、夫れから三略を學びましたが、仲々面白くて〳〵、一生懸命に讀んで居ります。』

『夫れは結構ぢやのう。』

『ハイ、今日父上から承りますれば、七書も大宗問對で終るから、これ丈けやれゝば近い内には林羅山先生に御たのみ申して其の門下生に入れてやらふといはれましたで御座ります。』

『お父上も此の頃は仲々お忙がしが、學問をして名を揚げるには羅山先生のやうな名の聞へた大學者に就かなくてはなりませぬ。お父上はさう仰られましたか』

『左樣で御座ります。それは父上の仰せで御座ます』

『四書、五經、七書を讀めば一と通りは學問をしたことにはなるが、その學問を尙ほ〳〵よく研くには羅山先生のやうな名のある大學者に就かなくては深くはなれない。でもまだ大先生に就いた

ゞけでは駄目で御座る。それを身に實行して、新しく自分で工夫する所がなくては、死學である
ぞよ。』

『ハイ、よくわかりました。父上もいつも、さう仰せられます』

かく睦まじく母子對談中一羽の黄鳥梅枝に來つて『ホー、ホケキョー』と啼鳴すれば母は

『文三郎、彼のうちのお庭の梅は雪や氷の下から美い花を開て此の溫い春に會ふて鶯を迎へて、如何にも梅の心棒强い德を語はしてゐるやうです。人間の出精も彼の梅のやうなもので御座るぞよ』

『左樣で御座ります。私父上より學びましたる書物の中には人間の心棒第一のことが敎へて御座りまする。母上の御敎訓夢忘れはいたしませぬ』

と、かく話し會へるは屢なりき。其後約一ケ月、文三郎讀書に餘念なかりしが、父の聲にて『文三郎』々々といふ聲聞へ來りぬ。文三郎は『ハイ』と答へ、急ぎ座を起つて父の居間に行けり。

『父上、何御用で御座りまする』

『のう、文三郎、先達から稻葉丹後守の家臣塚田杢助殿の紹介を以て、一代の大儒林羅山先生の門に其方を入門させようと願つてあつたが、願が協つたによつて明日羅山先生其方を御引見くださるものこと、如何ぢや』

『ハイ、願ふてもないこと、父上難有存じます』

といよ〳〵九歲の文三郎は林門の一生に加へらるゝことゝなれり。

六、羅山の門に入る

寬永七年の春も稍長けて『花見る人の長刀』と謠はれし太平の江戸は、打つゞく戰亂の餘威やうやう衰へて、血に餓えたる武士は、やがて、血を怖るゝこと及のやうに成りぬ。この頃、儒官として打囃されし林羅山の門を訪ひたるは、圓めたる頭を薙り立ての靑々したる髮際、由緣ありげの侍なりき。八九歲と見ゆる童を打伴れて、玄關より

『賴もう。』

と底力ある凛々しき聲をかけたり。

學問部屋にて、論語の素讀に餘念なかりし聲ははたと止みて、刻み足に玄關に現はれたる壯佼は

手を支かえたり。

『先生は御在宅かの、山鹿玄庵參上いたしたこお傳へ下されい。』

『畏まりました。』

こ奥の方へ退りしがやがて引返へし、客を案内して離れの一間に通しぬ。主人羅山は一代の碩學なり。客玄庵も一廉の武士の末なり。寒喧を叙るや、二人の面には打解けて春風の渡るが如くなりき

『しばらく御無沙汰いたして居りまする中に、御庭の櫻拜見の機を失ひました。が落花の風情も又一入でござりまするな。』

こ玄庵はまづ口を切りて

『豫ねて御願申せし豚兒文三郎事、御叱りを受けたう存じまする。』

『オ、賢息文三郎殿は其方かの。』

『お見識りをかれまして。』

こ言語も大人び、容子も落着き、すべて明晰こ、物聽もなう、少年の眼は屹こ老先生の方を打見戍りぬ。

玄庵は言語を添えて、

『野育ちの儘のほゝけ放題、尤も、某、業餘、四書の素讀を授けましたが、可成りに讀みも下りまする。行末長く御引立蒙りますれば、本人の仕合せにござりまする。』

『中々恰悧氣ぢや、何歳に成れたかの。』

『九歳にござりまする。』

こ文三郎は直ちに答えて、その瞳は火の如く主人の面に注ぎぬ。

文三郎(後素行)は、羅山林道春が當代の大儒なりこの評判を耳にせり。その容貌、其態度、さま〳〵の想像を畫きながら、初めて其人に接したりし時、嚴しきが中に優しく、峻しきが中に溫やかに、たしかに一代の儒宗たる人こなりは認めたれど、流石に、何處こなく訓詁の師たる窮屈なる風も見えぬ。されど、この人を今日よりは師こ恃みて、己が才學を磨かんこいふ大なる希望は其眉宇の間に溢れたりき。

文三郎は、さま〳〵の空想を抱き乍ら默然こして、父玄庵の後に小さくなりて控えるたり。玄庵は能辯なり。

『某の口から申上ぐるは如何樣でござりますれど豚兒文三郎事、幼なき折柄より學問を只管好みだゝを揑て、人困らせの折も繪本など與へますれば、直に泣休まする、木の杭端などにて、地上に武者、馬など描き、大學敎へまする頃より、一時の間も書物を手より離さず。性來の嗜みと見えまする。諸侯への奉公、我等弓矢の家ふつゝより厭氣さしたれど、豚兒の行先まで閨に埋れさすは可哀想好きこそ物の上手とか申せば、本人を膝下に呼寄せまして『其方一廉の學者に成り、家を興し、父母を顯はす心はなきか。其志堅く、金鐵とあらば、林先生御門下にお賴み申して遣す』と云聞かせましたるに『屹度父上の御恩忘れず、先生の御名汚さず、學問の光を表はしまする』と小供ながら決心の程も見えましたれば、豫ねて御無理申上げましたる次第、鳶の子は矢張鳶、瓦は碎けば土にはござりますれど、御叱り蒙り、一人と相成りますれば、この上の喜びはござりませぬ。』

と言葉の端々、子自慢の親馬鹿は、山鹿六左衛門高道にて、會津に聞えし蒲生忠鄕が麾下、町野左近將監の右腕と恃まれし程の勇士にも免れぬなりけり。

一々首肯きて、聞訖りたる主人道春はポン〳〵と手を拍ち、童に命じて、一册子を取寄せ、文三郎の前に置き、手づから見臺を取りて、

『文三郎殿、其方稀なる志、父上より承りて我等も嬉しう思はるゝ。此本は其方の知らるゝ論語の無點唐本、ちと六かしかろうが、聲高く、我等の前にて素讀して聞かせられよ。』

卒爾として、文三郎は此不意の試驗を天下の名儒によりて行はれんとする也。肅然として、座せる彼は、双手を袴の上に丁と置き、如何なる條か、唯命の儘と從容として淵よりも靜かなりき。

『史記世家曰く、孔子名は丘、字は仲尼、父は叔梁訖、母は顏氏、魯の襄公、二十二年、庚戌の歲十一月庚子を以つて生る。』

と文三郎は、道春の披き示せる論語序說の劈頭よりすら〳〵らと少しも澁滯する處なく

『詩書禮樂を修め、弟子彌々衆し。』

まで、息も繼ず讀み下したるを、耳を欹てゝ聞き終れる道春は、

『可矣、可矣。』

と聲かけて、

『見事ぢや、白文をそれ程にすら〳〵と讀めるもの少年にては珍らしいが、その讀み方に、多少の非難もある、それは、我等、其都度々々訂して進ぜる。』

こと平生門生には、峻酷なりこの評判の道春も、文三郎に對しては、心より靜かに、穏かに賞め稱えて御褒美にこて、菓子などを與へぬ。

『さりながら、古の諺に神童苗にして秀でずといふ事がある。十歳で神童、二十歳で才子、三十過ぎればたゞの人となる例は少くない、其方行先長く、立身出世は縹緻次第、唯今は一筋の學問餘念あつてはならぬ。其又學問修業、成るの難きはいふまでも無く、成つての後も、世の非難を受けず人の誹り、妬みに遭はず、まことに人の道、儒家の法を立てゝ、人迷はせず、自から踏み迷はぬことがまた難かしい。學問以外の學問これ第一の處世、それ等の事、折に觸れ事に觸れて、我等、心づいたこと申す積り。』

親切面に現はれたり。

玄庵の喜びは譬へんに物なかりき。文三郎の慧發、利口、俄かに、大先生の前に引出されて、論語白文の序を突付けられて、ビクともせず、悠々として餘裕ある微笑を漂よはせて、些しも物慮せざる狀を見たる玄庵は、やつと胸撫でしぬ。

文三郎の口は、屹と一の字句に結ばれ、その爛々たる眼の光は紙背に徹せんばかりなりき。章句の點註にやかましき道春の讀律には適はざる節は少なからざりしも、其讀み下す文句の句切りには、明かにその文字の意義、直ちに、腹の底まで嚙みこなれたる狀には、一日の師たる道春をして斯兒必ず名を成すべしこの希望を繫がしめき。

後年、學界の大立者、時代の理想兒、兵學の大宗にして、兼ねて文學の士なる山鹿甚五左衛門の文の林の峯入りは、斯して最初より名儒の出世の緒は開かれたり。

さりながら、其佶倔なる訓詁の貝殼につゝまれたる道春の杞憂は、期せずして素行が一生の運命を暗示したるが如きものなりき。人生の謎を味ひながら、父に伴はれて、林先生の家を出で、聖堂の森黑きお茶の水に出でたる頃、殘りの春の朧月夜は水に似て滑らかに往來に流れて、大小二個の影を照しぬ。

七、稀代の俊才文三郎

文三郎の弟子入は、林塾にこりては、一の大なる誇なりき。入門の初よりして、道春をして斯兒

後世怖るべしと讃嘆せしめたれば、他の門生は、かほどの寧馨兒、いかなる面持したる少年ならむと、爭ひ競ひて、之と交を結び、九歳の少年なる文三郎は、忽ち林塾の評判となれり。

四書は瞬く間に文三郎の讀習する所となりぬ。一たびその眼を通したる文は、再び師導を仰がずすら〳〵と讀み了りて、一字一句、一言一語、其旨を心得て誤らず、十歳にして、塾の初學者に向て、代稽古して、少しも躓なきに至りたれば、道春は、至る處に、文三郎の天才を讃稱えぬ。

春秋二回夢の如く過ぎ文三郎は十一歳となりぬ。この頃、既に經書は素より子類も大抵讀破して林門下の秀才、山鹿文三郎の名は、諸侯の間にも傳へられたり。其子は、無類の利發なり、一たび文三郎を見たるもの、いづれも、口を極めて其秀才を褒めざるはあらざりき。子煩惱の父高道は、其兒の名譽を、自分の名譽の如くに到る處に吹聽して喜べり。而して其言葉尻には、必ず『子自慢と笑はれな、我等も老いたるかな。』と附加では置かざりき。

高道の玄庵は、一日、日當りよき椽に座して、頻りに草根木皮をひねくり居たるに、折柄、頼むゝ〳〵と玄關先に訪ふものあり。

『ェ、面倒ッ又急病人かな。』

と呟きつゝ玄關に出づれば、這は什麽に、服裝嚴めしく、朱鞘の大刀を腰に帶せる一人の侍端然として待ち居たり。

『オ、私、林家よりの代理、是非先生お目にかゝりて申上度儀御座りますれど、生憎、昨夜來所勞私代理として差向けられました、委細はこれに。』

と文箱指出せば恭しく押戴き、文箱を披きし玄庵の眼は驚愕に輝きて、いくたびも〳〵同じ文の面を見戍りぬ。

玄庵は、急はしげに、返し文を認めて堅く封じて、使ひの侍に渡しぬ。

『御使、御苦勞に存じまする、仔細は文中に認め置きましたれば、萬事先生御思召次第と玄庵申居つたと御傳下されい。』

と又元の座に戻るや、葛根樂皮を其場に打捨、急はしげに女房を呼び、

『一寸出る。仕度ぢや。』

常になき慌しさ。かゝることは、玄庵の曾つて其家人に見せざる處なりき。

『ホ、、何うかなされましたか、貴郎今まで御中飯の御仕度出來ましたと幾たび申上げても、夢

中で何事か考へ込んで六かしい顔、振向きも遊ばしませず、火の附いた樣に御外出、何か急用でも起りましたか。」

「イヤ、これは我ながら可笑い。何、譯を話さう。おぬし、文三郎は豪い。」

と息をはづませ、

「なれども尙幼少のこと、萬が一失敗でもあつては、先生に對して申譯がない。これから止めに行く。少年高科に上るは第一の不幸、何を申すも十一歲の文三郎、諸侯の前に、經書の講義など、あまりといへば、大膽過ぎる。よく〳〵當人の胸の中叩かいでは、心元ない。」

「なれども先生がお許し遊ばしましたる上は、强ち、文三郎、失敗ごともございますまい。性來の勝氣、大名方の御前に出ましても決して退は取るまいと存じまする。」

「ふむ。おぬしも左樣思はるゝか。なれば嬉しい。林先生に弟子入の其日、論語白文、すら〳〵と讀んで退けた。聲一つ顏はさず、凛としてやつてのけた。親馬鹿で、子供を案じ過ぎるかは知らねど、今後は又、例も無い、堀尾山城守御邸に召されて、これをと押付けられた時にはチトは悸乎とせう。まだ早い。子供の辭にちと危ない！。」

「先生お使へ何と仰せられました。」

「それは先生思召次第、未熟の少年、山城守殿御前には、先生お名前辱めるやうなことあつては恐入りまするが、先生の御眼鏡にて、御門末汚さぬことございますれば、我等はこの上もなき喜でございまする。と斯う云つた。いづれにしても林先生、直々お目にかゝり、粗忽無いやうに入念第一ぢや。」

「文三郎が山城守殿樣お邸に召出されて、御講書申しまするか。何よりの面目にございまする。」

「面目はこの上ない……が、我等はまた面目過ぎて、文三郎、失敗すれば、家の恥、先生の面汚し、出來過ぎて慢心しては、本人の身の爲め惡くども善くはない。同門の妬、それも五月蠅い。」

と大小受取るや、子煩惱の彼は、半ば喜び、半ば憂ひ、而し、何となくそわ〳〵と氣も落付かず、何時しか足は、林家の門前にありき。

林道春と相對せる山鹿玄庵の顏には、憂の色と喜びの色と相半ばせり。

道春は膝を進め

「文三郎殿の事、夙に堀尾山城守御家臣楫斐伊豆殿の來塾の折、世にも稀なる神童、經書理義に

明らかに、辯舌も爽か、物覺えも傑れて可い。入塾後二年塾中の誰彼が尊敬、時々我等に代りて代稽古、少しも差支ないまでの見事さこの話を聞かれ、是非其兒の顏見たいこある。お心易い事輪講の席に臨まれ、其樣子篤こ御覽下さいこ、朔日の講書の折、伊豆ごの請待申した。その節文三郎殿に『山谷集』讀ませたこころ、我等も點の打ち處もない上出來、伊豆ごの只管感服せられて、是非山城守ごの御前に紹介せ申したい。我等の眼よりは、親御差措いて申すも異なれご、まだ弱輩、萬一の事も慮りて一應は辭退申したれご達てこて承引ない。乃で文三郎殿、膝下に引寄せ胸の中を叩いて見た。中々に確乎こ大丈夫こ見込んで。さらば、賢を愛し、士を重んぜらるゝ山城守ごのにお目通りは、この兒、行末の爲めにも可い。我等伴れて山城守邸へ參るこにいたした。異存はござるまい。』

こ、この話なり。

『先生のお見込にて、お顏穢しませぬこの事にござりますれば、我等これ一代の譽にござりまする。唯、いかさま幼少、高慢な顏して同輩に威張る氣風でも出來ましては、相濟みませぬ。』

道春は手を振り

『いや〳〵その儀は斟酌無用、文三郎殿幼年乍ら、才氣こ申し、氣象こ申し、堂々たる大人の風を具へ、權貴の前にも少しも屈せず、同輩には謙譲、見るからに快よき少年、いやはや山鹿ごのはよい兒持たれた。』

こ、只管褒むるの外なかりき。

八、山城守の御前講義

堀尾山城守邸内には、此少年儒者を迎ふる用意に抜目なかりき。書院には、掛麥伊豆を上座に、居並ぶ士流綺羅星の如く、其正面には、山城守、威儀整然こ控えたり。文三郎は、道春に伴はれて定めの席に就くや、一同の視線は等しくこの少年の上に注がれぬ。

打見る童子、十一歳にしては二三歳もませたり。麻の上下凛々しく、先づ山城守に會釋して、見臺の前に坐せり。

講書は中庸右十三章をまづ朗々こ谷川の水の清き聲にて素誦し、次で、いこ詳かに講義に移りき。

『君子は其位に素して行ひ、其外を願はず。富貴に素しては、富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては、患難に行ふ……其意は物、自然に處しては誤らず、惑はず、虚心にして事に衝るの義にござりまする。』

その意義の明晰透徹せるは、たとへば玻璃を通して物を見るが如きものなりき。

この一節終るや、山城守の膝は自づと進みて

『見事々々、一字一句、忽かならぬ解釋、直ちに之を當世に當て篏て、論破する所は、其意既に普通學儒の外にある。山鹿文三郎殿とやら、我等更らに一節、其許得意の論語承りたい。』

道春は、進みて、傍らの論語を取りて、公冶長第五は、この少年の前に披かれたり。例によりて、彼は水も淀まず、讀下して、其紙背に徹する眼光、人の胸を射貫くべき論法、一座の人々を驚かしぬ。

論講終るや、林道春は山城守の希望に任せて、この一座の聽衆の爲めに、論語大要を述べ、最後にいと強き調子にて

『これなる山鹿文三郎事、お見掛けの少年にござりますれど、山鹿玄庵嫡子、讀書の天禀、世に類稀なる器量、行末の爲め、御見識り置き願ひまする。何を申すも少年禮に嫻はず、萬失禮の段、平に御容し願上まする。』

師の弟子を愛することの深きは、道春の一言に表はれき。

この寧馨兒は、忽ち山城守邸中の評判となりぬ。年こそ弱少なれ、巍然たる彼の面魂、爽然たる其音調、理非折明の流暢清快なる、天晴なる氣品は、殊に、山城守の心を動かしぬ。

一座を魅するが如き鬼才、文三郎が御前を退きしは黄昏の頃なりき。

この席に侍せるは、伊豆一人なり。山城守は伊豆に向ひ、

『山鹿文三郎は流石に玄庵の嫡子だけあつて、精神も慥か、文藝の道にも丹念な。その言辭の明晰、殊に起居振舞、落付いて氣魄もある。取つて十一歳には見えぬ。邸の若者、經書の師範に召抱えたいと思ふが其方の意見は如何ぢや。』

『文三郎、才能お薦め申した某、幸ひに御意に召しましたるは、何よりの事、御仰せの通り、精神修養もあり、學問利發林先生に承れば、門弟第一の顔才、一を聞いて十を知るとは彼の事、唯餘りの利口、將來の事も却つて案じられまする。士分御取立の儀御先生は異儀がござりますまいなれ

ご、玄庵は世にすねもの、其一徹、却つて御意悖るこゝがムりますれば、恐縮千萬にござりまする。』

『いや其儀は苦しうない。あの器量少年にしては見上げたもの、ならば、我等手許にて其立身見たいが我等の望、本人不足こあれば詮ない事、まして、其父の考へもあらう。無理に勸めぬが可い但、世に稀なる少年ぢや。指導もし一點を誤らば、却つて藝が身を損ねる。こゝ第一大切な處ぢや。』

山城守は、自からこの少年指導の任に方り文三郎の才こ學こ智こを素直に而かも發達せしめんこの親切は言葉の外に溢れたり。

『その御思召、伊豆、只管感佩いたしましてござりまする。直樣、林先生許、直々傳言、御邸內にあの好少年の颯爽潑溂なる姿を見たいものにござりまする。』

少年は知らず、自家の運命の新たなる開拓が山城守の奥深き間より劃てられつゝありこは。けに夢にも知らで、今日も南天の實に冬の日の赤々こ照る窓の下に『貞觀政要』を繙き居るなりき。

山城守の家老掛斐伊豆の熱心なる推薦に依りて、文三郎の出身の緒は開けんこするなり。林道春の家を訪れたる伊豆は、劈頭、山鹿文三郎召抱の相談を仕掛けたりき。

其要旨は、山城守が、この少年學者を優遇するの情に敦く、これを堀尾山城が大羽翼の陰に抱擁して、飽まで其天才を發揮せしめんこするの意に深く、是非、先生より、文三郎召抱の相談纏めたしこいふにありき。其祿高二百石、自由は其望むまゝ。研學の爲め林道春許往來の途も許されたりこ聞き訖りて道春の眉は少し顰みたりしが、蔽ふ由もなく、自慢の色は、面に浮びたりき。

『文三郎身にこりて過分の儀に存じまする。なれごも、未だ未熟の一書生、折角のお取立に背く樣では、何共申譯無き次第、且は、研學最中の身、仕官の儀は如何こ存じますれご、我等敎親に取りてはこよなき譽、本人の望みもござりませうし、又、父玄庵の思惑もござりますれば右御請の義は一兩日待たせられたうござりまする。』

『それは御最の事、幼少ながら、氣魄精神、世の常に優れたる文三郎殿、小祿に勤くの志のありやなしや。且つは又、父山鹿氏の氣象も知れる我等、十分其邊叩かれ、愈々主取りの覺悟出來たれば、及ばずながら、この伊豆、萬事の御執成はいたしまする。』

『今に始めぬ貴殿の御芳志、我等、山鹿父に代りまして厚く御禮申上まする。折角の御芳情、一刻も早く文三郎に傳へまする。』

と文三郎を招き、更めて、伊豆を紹介す。道春は老の眼に律義の涙を泛べ

『文三郎殿、其方の才學、山城守樣お眼鏡に叶ひ、天晴の武士として學儒として行末までお後見下さるとの事、有難い仕合ぢや、世にも羨ましい天下の名主を得たる其方學問の德を忘れず、一生懸命に研學怠つてはならぬ、此處なる伊豆どの、始終其方の爲めには、蔭になり、日向になり、御力添ひ下さる。更めて、其方へのお心入れ、直々承つてお禮申されい。』

『有難う存じまする。御芳志、肝に銘じて忘却いたしませぬ。』

『イヤ、お禮痛入る。唯我等、其許の學才見込んでの媒介役、老人の務でござるわハ、、、

『其方、掛斐伊豆殿御推擧に依り、山城守樣御家人となる氣はないか。』

伊豆は瞬もせず、凝乎と文三郎の顏を見つめぬ。

九、祿二百石を辭す

山鹿文三郎、二百石にて、堀尾山城守召抱の事は、かくの如くして運ばれたれども、父立庵は、林道春が推量の通り、果して、辭退せり。其理由は、單に小祿に束縛さるゝは、愛兒の前途を妨げらるゝのみに非ずして、實は文三郎、幼弱、唯少しばかり、讀書の道、人に勝れたれば迚、直ちに之を擢用され、廣く、稠座の中に、高慢面して、經書の講義などなし、伸ぶべきの芽を、土に埋れしめんことは、彼の父として欲せざることなり。

林先生の熱心なる勸誘も、伊豆の心こめたる周旋も、其効なく、依然として、文三郎は林塾の一書生として、平然として群生の間に交りて、輪講の長者をもて自から慰め、時には書生部屋に肱押腕角力、智識に於てのみならず、腕力に於ても、塾中に頭角を顯はしぬ。

武功で天下を取りし、戰國の餘波は殘りて、なほ殺伐なる氣風は東照公治世中に日の本六十餘州を呑風春花、長閑なる華樂の世界と化し得ざりき。されば東照公、文事を以つて、荒ぶる世の流れを融和し、太平の基を定めんとするの念の急にして、時の儒門、林羅山を京都より召寄せ、幕府の學政を司らしめき。二代將軍秀忠公の世盛りには、羅山は班白の鬢面を、講堂に表し、流石に當代の閥老なる威嚴はありとせられき。文三郎は、この老儒の蔭に其蠶々參天の勢を養ひ來りぬ。十四才の頃、文三郎の天才は益圓熟し、大納言飛鳥井雅宣公、召してこの神童を見んとの懇望あり。當

時の事、其『配所殘筆』にあり。

『十四才の頃、詩文共に達者に仕候故、傳奏飛鳥井大納言殿、聞召され、召寄せられ、即座に詩を作り候て懸御目候處、大納言殿和歌を御詠吟にて和歌被下候、烏丸大納言殿、聞召され、即座に章句を被成下、慮外ながら我等も即座に對を仕候、志業の時分殊更即座の事に御座候間、只今見申候ては笑草成儀に候へ共各御感不淺候、云々。』

其の時の光景は、まこゝに見るが如からずや。風流なる飛鳥井大納言は、英姿颯爽たる少年詩人ゝ相對して心の限ぎりの好情を傾けられぬ。文三郎は即題を得るや、すら〳〵ゝ毫を揮つて、作詩を試みたるに、大納言は、其遒勁なる筆跡を殊の外愛でゝ、

『其許、作文、詩賦の能あるのみでなく其文字の典雅、雄健、成人も及ばぬ出來天晴々々。』ゝ手を拍つて感賞し、更らに文三郎に向ひ、

『其許文藝は人に勝れて、寸龍既に呑牛の氣ありぢやが、抑も治世の要道は文に偏せず、武に偏せず、文武兩道、たゝへば鳥の双翼、車の兩輪の如くなくてはならぬ。其心得ござらうの。』

『文を以て武を廢すれば、花ありて實なきが如く、武獨り蔓つて文なければ、花なき蘭のやうゞ害こそあれ、世の要になるべしゝも覺えませぬ。その覺悟、日頃より心得ましてござりまする。』

これ實に十四歳の少年の口より出でたる言葉ゝ覺えぬまで、確然ゝして而かも正々たりき。

文三郎の周圍は、早くも權門の厚庇によりて、出身の緒は開かれたれども、父立庵は容易に之に應ぜざりき。十一歳にして二百石取りの小儒者たる運命を召れたる文三郎は、十四歳にして、詩歌の友を、飛鳥井大納言、烏丸大納言に得たれども、冷然ゝして何等の求むゝこころ無かりき。父は飽まで其子を矯めて、一代の名儒たらしめんゝこの外餘念なかりしがごゝし。

六歳にして、初めて經書を授けられたる頑童文三郎は、既に八九歳の頃、儒人の子ゝして學ぶべき一人前の文學を修め了り四書五經七書、詩文の書大方は讀み了れりゝいへり。文三郎後、素行の名天下に高きに及んで、其述記に

『我等事、以前より異朝の書物を好み、日夜勤めて、近來新渡の書物は不存、十ヶ年以前まで異朝より渡りし書物大方不殘念一覽候。』

ゝいへるに徵しても、彼が、少年の嗜好の後年まで變らざりしゝ見るに足るべし。

其一生は直條徑行、其言說は公明正大自から知れるを知れりゝする彼の眞面目なる態度はこの歎

かざる自信の底にあらはれき。十ケ年以前まで渡來せる書物を彼は刻苦して、讀破せり。六十四年の生涯の中、この丹誠は衰へざりし也。

その大學の講莚を公開したるは十五歳の頃なり、彼の背後の黑法師たる道春の後援も、この時、全く撤去せられて、愛らしき小儒者、山鹿文三郎の口より、聖人の道を說くべき日は來れり。

『山鹿文三郎といふ小僧ッ子、僅かに林先生の寵兒といふ丈けに、諸公の前に、平仄、律呂調はぬ詩や歌を臆面なく作つた丈けで、小供には不似合ひは、一寸コマシャクレて出來てゐるといふのがお慰みの朱儒藝を、褒められては何處までもつけ上つて、先生面して見臺の前に坐らうといふ不心得、一つ、揶揄つてやれ。』

といふ調子で、ヒヤカシ半分の質の悪い連中が、兎も角、わい〳〵と少年儒者の門に集まれり。後の素行たる山鹿文三郎の講義振りは、如何、その眼中に天下の儒無し。彼は肅然として、聽衆の前にありき。大學講義は、其學閥を破つて、革命の點火たるべき第一聲なりき。

附記、作者曾つて事に依つて井上博士を訪ふ、博士當日、午後、山鹿祭の爲めに牛込榎町宗三寺に詣で、素行先生の傳を演說すべしとの事也、此日、乃木將軍、亦其來會者の一人にして進んで祭文を朗讀せられたり、其文に曰く

明治四十年十二月二十九日陸軍大將乃木希典謹ミ誠ヲ致シテ贈正四位素行山鹿先生ノ靈ヲ祭ル先生德一世ニ高ク識古今ニ踰エ學問該博議論卓拔夙ニ國體ノ精華ヲ發揮シ中外ノ別ヲ明ニシ名分ヲ正シ士道ヲ說キ志經綸ニ存シ才文武ヲ兼ネ而シテ不幸世ニ遇ハス轗軻困躓終ニ偉大ノ抱負ヲ實用ニ施ス能ハスシテ逝ケリ惜ムベキカナ然レトモ先生ノ學德當世ヲ籠罩シ業ヲ受ケ益ヲ請フ者前後數千人ノ多キニ上リ且先生既ニ沒シテ其兵學盛ニ行ハレ遺著永ク存シ風ヲ聞キテ興起スルモノ亦少シトセス曩キニ先生ノ遺著畏クモ乙夜ノ覽ニ達シ今又特ニ正四位ヲ贈ラセ給ヘリ　嗚呼　聖慮宏大其學德ノ世道人心ニ裨益アルヲ叡聞アラセラレ優恩先哲ニ及フ洵ニ昭代ノ盛事ト稱シ奉ルヘシ希典幼時師父ノ敎ニ從ヒ先生ノ遺著ヲ讀ミ窃ニ高風ヲ欽シ仰キ以テ武士ノ典型トナサンコトヲ期セシニ不肖殘軀聖明ニ遭遇シ涓埃ノ勞ナクシテ叨リニ寵眷ヲ荷フモノ實ニ先生ノ遺訓ヲ服膺スルノ賜モノト謂ハサルヲ得ス今昔ヲ俯仰シテ感慨殊ニ切ナリ茲ニ花一朶香一炷ヲ奠シ先生ノ靈ヲ祭ル尙クハ之ヲ饗ケヨ

一〇、強記豪膽の少年

山鹿文三郎、十五歳の少年、林塾の俊才、江戸中の學者を前に控えて、立派に物の本の講釋をするといふ評判は、又冷嘲惡罵の聲を壓して、彼の講義の前に集まる人の中にも、一喝の下、彼の天狗鼻を取挫かんと構えたる人々も少からざりき。彼はまづ、學問の要意、博學の必要を說きて曰く

『古今の人物甚かはり、異域本朝のことわざ最異なれども、德天地に等しきあり、才萬物の及ぶあり、其用捨は我にあつて、其事跡は書物に殘つてある、故に博く古今の書物を閱し、事物の用を辨ずることが必要である、併し或は記誦して、古今の事を覺え誦んじ、是を以つて世に誇らんとする衒學者流は取に足らぬ或ひは詩文を弄んで、詩章を事とし、これを以て『學』の至れるものとするものがある、いづれも大丈夫の學問ではない。一ケの老博士、三尺の書生が筆硯を事とし、舌耕備筆して人の脚下に跼まるは、大丈夫の本意といふべからざれば、如何なるをか學文といふといへば古の聖人の道を以つて本と仕り、賢人君子の行をたすけとし、古今時代の變化人物の理を辨へ、其を埿し、其智を琢くを目的とする。』

とまづ長廣舌は、花の如き可憐の唇より蒲腔の氣焰を吐き來つて

『後世に至つて、書物を利己の便とし、記章詩章を弄んでしきりに當世の人物を輕蔑にし、己をたかぶり、人を嘲るの媒と爲すが如きは、これを名づけて死學身を傷つくるといふべしである。腐儒俗學者の聖人の道を誤用して、却つて世間の笑物と爲るのは用意厚生利用の道に迂なるからぢや我等學問には、記誦詩章のカラ威張は取らぬ、直ちに手を伸べて、海中に珊瑚を求むる如く、聖人立德の眞髓を探るにある。大學一卷、區々、詩章のことは扨置き、直ちに其本體を攫み一言一章、悉く我等存在の助とせねばならぬ、聖人の敎は常に新し、いかに孔聖が道の新なるを欲せられたかは大學の『湯の盤銘』の引節にある。湯の盤の銘に曰く、『苟くも日に新ならば、日々に新なり又日に新なり』とある。康誥に曰く、新民を作すといふ。民の新なることを說かれた『詩に曰く、周舊邦といへども、其命これ新なり』とある。舊衣を纏ふものは其表舊といへども、人間靈妙の心氣、五內に流溢して、一刻も止まらぬ新しい命を包んでゐる。我等生きたる人間は生きたる學問をせねばならぬ。然るに、前申した如く、近來學者の弊風は訓詁詞章の間に齷齪して、文學以外の新しい命を見出すことをせぬ。これ其本を捨て、末に奔るものである。』

滔々として大河の決する如き彼の議論は、自づから一家の風を爲して、氣焰正に當るべからず。一座は、寂として人なき有樣なりき、何か事あれ、直ちに一本參らんと待構へたる、頑固黨の訓詁詞章衒學流の猪小才共、文三郎の凛々しき態度、壯快なる言論に對して、唯呆然たるばかりなりき

忽ち一座の一隅より、

『山鹿殿、イヤさ、山鹿先生、御自慢しばらく止させい!!。』

その聲は不平と、憤激と冷嘲を突いて狼の如く響きぬ。

一座の寂寞を破つて破鐘の如き聲にて靜かなる講筵を妨げんとするは果して何者ぞ。

涼しき鳩のやうなる眼を擧げて、其方を凝視たる文三郎の目の前に雪突くばかりなる大の男の衝つ立ちゐたる、並のものならば、十五歳の少年の膽も阻み、氣も落ちぬべし。文三郎は冷然として再び講義を續けんとする。

『待たれい。人も無けなる其自慢、大學の章句を趁ふて、一字一字の新註解釋もなし大摑みに、今の儒者學者を罵るとは甚だ以て不屈千萬、訓詁點讀にやかましい林先生の塾生の身分として、青表紙やつと披げる術覺へたか覺へぬ身にして、その大言は片腹痛い、今の世に名ある學者先生數尠

ふない。近い例が今官學の棟梁、林先生を差措き、大人先生と蹤も、迂濶と口辷らさぬ當世の罵言甚だ聽苦しい。其黄ろい嘴で、君子聖人の道、アハ、、、、隨分世の中を馬鹿にした仕業御身、生れて僅かに十五年。その眼その耳、まだ〳〵世間なぞを知る年ではござらぬ。自慢臭い儒者氣取は止して、これからちと世間修業めされい!。』

言葉巧なに之を罵しらんとするなり。果は、つか〳〵と見臺の前に進みて、手を伸べて、今し、大學傳の二章に移らんとする文三郎より、書物を奪はんとす。狼藉、その惡態、唯木石の如く見詰居りし文三郎の腕は、斜に、小さき腕の伸ふるかと見れば、

『あゝ痛々々、御身何せらる?。』

哀れ、彼の鬚武者、六尺の大の男は、雀に抑へられたる鷹とも見るべく、小さき文三郎に捕へられたる手を振れど、藻搾けど中々に敵ふべくも見えざりけり。

『詩に曰く邦畿千里、惟れ民の止まる所詩に曰く絹蠻たる黄鳥丘隅に止まる。』

と聲清らかにまづ素讀して講義を續けんとするなりけり。

その自若たる態度、その應揚なる有樣、而かも彼餓暴者は片腕を文三郎に抑へられて、輾轉する

滑稽の樣、一たび文三郎の强記能辯に魅せられたる聽衆は、二たび彼の沈着、剛毅に驚きて目を圓うして、只管その爲すまゝを見つめ居たりき。

文三郎は此不意の邪魔物の爲めに、氣乘りせる講義を妨げられたるを憤りたれど、少しも色にあらはさず、從容として日課を終りぬ。

最初は冷笑と、輕蔑とを以て、此少年儒者を嘲殺せんと企みたる聽衆のいづれも、彼の辯舌、智力の人に優れ、その態度武術のまた人に勝りたるに敬服し、咳だにせで聽惚れ居たりき。

彼は、片手に高く『大學』を捧げ拜して一同の敬禮を受け、扨、例の鬚武者に向ひ

『貴殿、何と心得あるか、我等、少年、口巾たく聖人の道を講釋するが、揩うて我等に拳を加へられやうとあるか、講義中は文三郎軀のでなく、聖人の前に立ちて、聖人の書を講ずる間は、恐れながら孔聖の御代言、その前に狼藉あるは、貴殿の事、人格にも關する義、打見たる處貴殿は剛力殊には我等の長者、その長者は、後生に敎えらるゝを、我等は謹んで拜聽する、その剛者が腕を揮はるゝは扨武士の法には無い。それとも我等儒生の行爲を御非難ある貴殿方の敎には、其樣の義、本領とせらるゝかは知らぬ。併し貴殿、腕が承知せぬとあつて、吹けば飛ぶやうな年齡行かぬ我等を打擲し、亂暴狼藉をせうといはるゝならば、今は文三郎は、唯私の山鹿文三郎。何時にても、御敎えを乞ひまする。』

『いやこれは恐入つた。全く我等の粗忽、講莚を騷がした罪は重々恐入る。御免下されい。』

と大の男は疊の上に頭を擦付けんばかりに平伏して

『實は今度山鹿文三郎といふ少年、江戸の眞中に人も無けに、大口叩く、何しろ十五歳の小童、何程の事があらう、我等腕骨に一挫ぎ、泣面かゝしてやるも一興と、阿呆が足らいで、飛出した處先生には、唯に文學修養の長者なるのみでない。並優れたる武藝の御嗜味、我等、粗忽の罪、平に宥され、今後先生、門下として、長く御指導を仰ぎたいものにござりまする。』

さきの程の元氣も全く消果て、痺れたる腕を撫り乍ら、人の手前も忘れ果てたる、體に似合はぬ不見識なる奴なり。

尾畑勘兵衛は、兵學家として當代の立者なりき。門下數百、皆錚々の士なり。勘兵衛は、兵書の講義を了りて、悠々として、庭に面せる紅梅を見つめ居たり。鶯は籬に止まりて麗日を浴びて、快げに囀り居たりき。一人あり。林道春殿封の一書を齎らしていふ。

『只今、この狀持參の若者、先生におめにかゝりたいと參上いたしました。』

文箱の紐を解くや、快げに彼は文面を讀下せり、その意味は左の如くなりき。

山鹿文三郎事、小塾の書生、本年十五歳の少年なれども、夙に經書に通じ、十一歳にして、高貴の前に講義を爲し、一廉の傑物と飛鳥井大納言、烏丸殿などにも覺めでたし、然るに武事にも心懸淺からず、御高名慕ひて、是非兵學の蘊奥を究めたしこの希望也。仰ぎ願くは今後は門下としてお目にかけ下されい。』この文言なり。

『山鹿……うむ。』

と勘兵衛は、思案せしが、

『諸々、其若者、此へ通せ!。』

かくまでに勘兵衛の快げなる面して初對面の書生を見たることなかりき。

取次のものは、不審に思ひつゝ

『は、畏まりました。』

爰はまた靜かなる庭に一しきり、鶯は嬰々の音を洩せり。

導かれて、勘兵衛面前に現はれたる山鹿文三郎身の丈高からず、低からず、其顏の輪廓を偉大ならしむる烱々たる眼光は、まづ、電の如きこれも底光する勘兵衛の眼と相對せり。

悠然として、彼は、次の間に平伏して、初對面の挨拶を爲しぬ。

勘兵衛は、物柔らかに

『山鹿文三郎殿、近う寄れい。』

『中々、恐れ入りまする。』

『苦しうない、承れば其方幼少の頃より學問を好まれ、林の塾頭を勤めらるゝと豫々、聞及んだ道春先生御添書、たしかに拜見。兵學修行の志、何より結構。』

と、手づから、座を拂ひ、麾るて文三郎を膝下に近づけ、

『我等に就て學問を修めらるゝこの事、其志は嬉しいが、第一、其方御兩親あるかの。』

『父山庵玄庵事、深川に醫業營みまする。』
『其父上は其方に何と仰せられた。武家で天下を取れとの意あるかの』
冷峻の語中、なほ脉々として春風の如きものあり。
勘兵衛は膝を進め、凛々しき少年の面を見入りしが、文三郎の引きしまつたる唇よりは、太き力ある聲にて
『父玄庵、申しまするには、仕官して高祿を貪るよりは、窮處して身を修め、業を建て、人としての氣位、精神を錬ること最も肝要の儀じやと、始終戒め草にござりまする。何事も、父の心に任せ、思を盡して孝養をいたしますること第一と心得まする。』
『可矣、可矣。』
と勘兵衛の太き眉は動きて
『其心得第一、其方、林先生より承る處、中々の學者、年に似合はぬ思慮才覺ありとの事。我等案じたは、世に才はちけたこましやくれほど、要ないものは無い。その類で其方在らば、我等直ちに入門謝絶の心得であつた。我等、兵學の根本は、人道を先にする。いかに學問才藝あつても、孝

心なきものは、案山子同然ぢや。孝は百行の本といふ。親に孝なるものは、則ち君に忠。忠義の志あるものは私福の念に淡い。聖人の教を垂れたまふたこころは、この心の誠の道開くにある。孝經第一章の語、其方踊じてお出ぢやの。身體肌膚これを父母に亢く、苟くも毀傷せざるは孝の始なり名を立て家を興す孝の終也とある。生學問の知つたか振り、孝道の重んずべきを蔑ろにする眞似學者は我等の取らざる處ぢや。今其方の服裝、態度、見るからに、世の常の少年とは異つて居る。何より嬉しい。聞けば、詩歌の道にも堪能、四書一經の釋義、一見識あつて、腐儒迂生の輩の俗論を破して骨を刺す趣ありと、平生に、飛鳥井殿、大の其方贔屓、夙に其方の大名聞及んでゐる我等、其の溫和な風采見て、案外の事、而かも、世間より持囃された人に似ぬ親大事の心懸、その謙虚の德の上に武藝の神宿る。其高い精神に、學問の光は在る。』
と勘兵衛は、唯々文三郎を稱讃えて餘念なし。
『其御教訓肝に銘じて忘れませぬ。唯々御情ある御教の許に、兵學の一班を窺ひ知りたい望、叶へてござりませうなれば文三郎一生の譽にござりまする。』

一二、孝子文三郎

玄庵は道春先生許訪れて、醉ふて春寒の庭を木戸口より入らんこせり。内には燈射して人の睦まじく語らふ聲、今日しも道春先生許にて散々褒められて、我子の行末につきさまゞに空想を描き歸り來りし玄庵は、まづ聽耳立てゝ暫時は身動きもなさゞりき。

彼は其子が十一歳にして、山城守ごの召抱高二百石、それを弊履の如く拋たしめし彼は、その小祿に、少年の行末を束縛せれんことを惜て、儼然こして、この相談を斥けたる也。苗にして秀でざりし人の例は少なからざれども、卿の悴のみは近頃の發達驚くべきものありこ道春先生は、口を極めて賞讃あり。大器、沈着にして、毫も傲の影も見えねば、卿は唯萬一を警めて、抑へよ!、抑へよ!!。こばかり仰せあり。今日も世に聞えたる當代兵學者尾畑勘兵衛の門に入るべき望み叶ひて、林先生の熱心なる御口添ひ、如何なりけむ。こ案じたれど、つい〳〵道樂の笊碁に日は暮れて、夕餉の酒の熱痛に、したゝか面を染て、歸り來れば、文三郎の小さき影は障子に映りて、何やら打語る樣のいかにも優し。

『あゝ樂になつた。おかげですつかり肩の凝が下つた。御身疲れて在う。湯も沸た。父樣、病家より頂戴のお菓子一つ喰たが可い。』

『否、私、少しも疲れはいたしませぬ。母樣こそ、さうお氣をお用ひ爲されてはいくらお採申しても何の役にもなりませぬ。』

『なれども、御身、今日は尾畑先生こやらにお目にかゝり、氣分疲れて在う。殊にこの間より大學集註、四晩も徹夜、又烏丸樣御前に孟子講釋、彼やこれやの心役ひに、其方の顏に窶も見ゆる。今日はゆつくり休むが可い。』

『お母樣。』

こ文三郎は屹こ云ひ放ちて、

『私少しも疲れて居りませぬ、今日も尾畑先生仰せには、人間萬事孝を以つて始まる、孝は百行の基ぢや。孝心なきものは百藝に通じても何の役にも立たぬこ左樣仰せにござりました。林塾の四方田こ申す同學、始終私に向ひ、山鹿は幸福ぢや。孝行する親を持つ果報者ぢやこ左樣申しました。』

玄庵は、椽側に佇みて息を呑み、文三郎の物語に恍惚として我を忘れて佇み居たりき。

『母は、御身の其言葉聞く丈にて滿足する。さ、父上お歸り間もあるまい。火鉢の火消してはならぬ。』

『いや、其火私起しまする。』

と文三郎は起ちて、火鉢の灰を搔起し、

『火は赫々と起つて居りまする。さ、横にお成りなされませ。お足を採りまする。』

『否々、其方の心だけで、此身は輕く肩も忘れた樣に治つた。そして文三郎、其尾畑先生の話、其方得心行つたかの。』

『はい、最の仰せ、唯々、我等の心掛け疎かでござりまする。』

と文三郎は、强るて再び母の後に廻りて、肩を撫でながら

『尾畑先生のお話には、江州とやらに、近頃豪い先生がござりまする、中江與右衛門先生と仰有りまして、この間、尾畑先生、都へお上りの折、西江州の小川村とやらへお尋ねでござりました。お話聞かせられましたが、其中江先生は、世にも稀らしい學者で在しまする。それよりも、先生の親孝行は、世の範、鑑でござりまする。』

『中江與右衛門先生、藤樹先生のこと、隱れもない、其方、其豪い先生の物語聞いて益に成ることあつたかの。』

『益に成るどころではございませぬ。何うかして中江先生を學びたうござりまする。』

『中江先生の親孝行學びたいか。文三郎其方は、可いどころに氣が付いた。』

と不意に障子を開きて現はれたるは父の玄庵なるに、二人は驚ろき

『まア所天、何う遊ばしました。足音もなう、俄かに大きなお聲で、文三郎も吃驚いたしました。』

『あハ、、、、好い話の腰を折るではないが、外で凝乎と聞いてゐると、二人して睦じやかに話す樣子、我は、最う嬉しくて堪らず、我にもあらで、聲が出た。聲が出たと思ふと、この身が、これ、かうして、障子の中へ入つてゐた。おかけで、雪駄を脱ぐのも忘れ居たわい。』

『それでは父樣、外にて、さつきの話お聞きでござりましか。』

『オ、皆聞た其方は中々感心な雀ぢや。』

『オ、雀！。』

と眼を圓うする妻を尻目にかけ

『雀ぢや。その小雀の素、捷い。壯健で物飾りもない、快好い雀ぢや。本讀む術を片時も忘れはならぬ。雀百まで踊忘れぬ、玄庵も、若い時は、仲々の豪傑、アハ、、、、歌の調子も流石はぢや……一つ聞かしてやらうかの。』

玄庵の眼はトロンとして、顏は火のやうなりき。茹章魚のやうなる手をぶらりと不恰好に下げて

『何しろ嬉しい、オ、文三郎、尾畑殿、剛い侍かの。』

と上機嫌なり。

一三、兵法の皆得を受く

文三郎も廿歳を迎へぬ。正月の儀式は、嚴かに、尾畑家に行はれぬ。文三郎入門後、四年を過ぎたれば、今は見違へるばかりに大きくなりて、起居振舞も全く大人びて見えき。

正月の吉例、門弟子はずらりと居並びたる中に、殊に目立ちて凛々しき文三郎は、肅然として、上座に構え居たり。

型に依り、文三郎は、其師、尾畑先生高弟北條氏長の講義に引續きて、いと流暢なる江戸辯もて一節を講じ了り。其義利の辨に就きて、得意の雄辯を揮へり。

『大丈夫存心の工夫は唯義利の間を辨ずるにあるのみ。君子小人の差別、王道覇者の異論すべて義と利との間にある。いかなるを義といはんとならば、內に省みて羞づるところ無く、事に處して自から慊る之を義といひ、いかなるを利と云はんか、內慾を縱まゝにして、外其安逸に從ふ、これを利といふ。古今の間、學者道に入るの始末、唯義利の辨を詳にするにある』

彼は滔々君子の道を論じて、會心のところに到るごとに、卓を拍つて放論せり。其熱心と其誠意は一言一句の中に溢れたりき。

門弟子共は、唯々、彼の快辯に魅せられたる如く、默然として沈聽し居たりき。

正面には、尾畑先生、指先にて、長き頤鬚を撫しながら、瞬きもせず眺入りしが、果ては肩を怒らし、拳を固めて、

『ふむ、可矣。』

と、四下を憚らず、高聲に力瘤を入れ居たりき。

『この日、文三郎に取りては、實に忘るべからざる記念を印しぬ。十八歳の春、皆傳免狀を授けられたる文三郎は、また此日、勘兵衛よりの印可を授けられたり、異例を以つて副狀を附せらる。

『於文而感其能勤、於武而歎其能修、噫有文事者、必有武備、古人云我又云。』

これ全くの異例也、文三郎の得意想ふべきなり。

表はいかめしき尾畑勘兵衛、講書始めの式も濟みて、門弟一同に盞を分ち、勘兵衛も、日頃好まぬ乍ら、今日は、大盃に盈々と數杯を受け、瞼上既に蕩然たる春を泛べて、上機嫌にて離れの書齋に歸り來れり。

七五三飾れる兵書は汗牛充棟とも評すべき程、背後の壁に積成せる中に、四十を一つ二つ過ぎたらんと覺しき婀娜なる女房の、約しやかに、美しき十八の娘と相對して、樂しけに打語ひ居たりしが、主人の入り來りしに、話ははたと途やみて、手を支えて、之を迎へぬ。

『今日は何より目出度い。殊に今日は、山鹿文三郎印可の免狀祝ひに、私等も醉た。山鹿玄庵ど

の、參られた筈、茲へお通し申すが可い。』

『山鹿樣、先刻より、新年の御祝儀申上度いこの仰せにござりまする。』

『直ぐ此方へ。それから靜、其方も、此處でお屠蘇の御相伴ぢや。』

『妾？。』

と、花羞かしき少女は、ぱつとばかり、顏を染たり。

『其方も居て、山鹿の皆傳免狀のお祝申すが可い。』

女房は起て、山鹿玄庵を導き來りぬ。玄庵はつるりと光れる美しき圓顱を撫でながら

『ヤ、これは、先生、お目出度うござりまする。』

『此方より、御許、目出度い正月、文三郎殿も出精、我等も嬉しうて、これ、これぢや。』

と面を指さしぬ。

『オ、山鹿氏、これなるは、我等娘、靜枝と申す不束者。以後御懇意に願ます。』

『これは〳〵、初めてお目にかゝる。御悧發らしい、文三郎事、いろ〳〵お世話かけまする。某は文三郎父、始終お邸に參上仕るが、おこと樣には、お目にかゝる機もなくて打過ぎました、これ

から又、この節、度々お邪魔いたしまする。お見識り置かれまして。』

『妾こそ、文三郎樣に、いろ〳〵お世話に預りまする。』

『オ、山鹿氏、それは文三郎殿、敎子同樣、この頃おかげで論語白文、覺束なくも文字丈けは辿り讀まする。』

ここれこまた子煩惱の玄庵に當らぬ子自慢なり。

文三郎は、無理に强られたる一杯の酒に眉の根まで染めて、眩ゆげに入り來るを、勘兵衞は、小招きして

『文三郎殿、さア、此席へ。』

こ自からに隣て、文三郎を召寄せたり。

文三郎は長入りて、下座に平伏し

『先生お蔭持ちまして、分外の譽にござりまする。この上こも、一心專念、業を勵み、屹度大成いたしまする。』

『オ、其一言、中々に嬉しい、假令ば、其方の今日、我等兵法皆傳は、行末の一階梯、これから

が山又山の人情の峠を上り下りして、始めて、今日の光が出る。我等の分限、我等の年齡、我等の望みには、これ頂上の奧儀、其方に授けるものは、この外には無けれこ、其方の心がけ次第にて、其方の智慧、才覺、學問の力が添ふて、我等の手ほこきが、幾層倍の深さを增すも知れぬ。我等の兵法は尾畑家の奧傳、それすら、其方知らるゝ數百卷の秘奧は、中々に親ひ易からや。唯頭髮を白うして、やつこ得心した丈のここ、其方はその我等の机の上の學問を會得して、實地に役に立てねばならぬ。之を言ふは易く、之を行ふは難し。言に信あり、行に理あり、正々堂々の道を行き、奇々變幻の妙を盡すが兵法の轉化、極趣こ申すもの、其深さ、廣さは、之を測るもの、綱の長さに依る。其方の立派な心掛一つで、運用の途はさま〳〵立つ。』

こ息はづまして說き立てゝ

『山鹿氏、左樣ではこざらぬか、我等この筆法で、門弟を育てる、徒らに我等の型の中に箝めて了ふここは好まぬ。人は皆一つ一つの大きな靈の指揮に從ひ、學得したものに光を與へ、力を加へねばならぬ。我等は敎ゆる。なれこも、强ゐて我等の學問寸分違はぬ樣に、印判捺したやうなものゝみを育てる心はない。それでは死學ぢや。あハゝゝゝ。その事文三郎殿には釋迦に說法、さア、

お祝ひの印ぢや、今日は一つ過して醉ふが可い。」

教はるゝなれども強るて、我型に入るとを欲せず。こは、流石に一代の兵學家尾畑勘兵衛なり。彼の教育は、内啓の教育也。文三郎、この開放的教育を受け、心のまゝに伸びんとする儘に、其才藝を伸しめたること、まことに理あるかな、立庵は、まづ心より、勘兵衛の好意を感謝せり。

『段々の御心添へ、我等肝に銘じて忘れませぬ。豚兒の生命。これまとの犬豚、磨けば迚、玉となるものにはござらねど尾畑先生、人一倍の御めぐみの露に、輝く光は我等家門の譽、身の矜にござりまする。』

文三郎に向ひ

『其御盞、盈々とお受せい。その中に籠れる深い御情けの程、一滴も洩さず、心の底に泌入れて忘れるのではない。』

『畏まりました。』

と彼は大盞を呷と干して、

『先生に御返盃申上げまする。』

『美事々々。その氣魄が喜ばしい。學問修業の大切さは、氣魂にある。我等先刻申したは兵學の事なれ共、文學にしても同じ道理、訓詁解釋、先人の足跡ばかり辿る意氣地ない學者ばかりの世の中、其方、其胸の底に、しつかりと詰め込んだ修業の力を、花のやうに美しく華美やかに、世間に表はさねばならぬ。』

と當時の學風に懲焉ぬ勘兵衛は、自から、其兵學の根柢をも、天才出でゝ打碎けよ。其打碎けし貝の中より眞珠を見出せよ。と云ひ、更らに進んで文三郎が活眼活世を見るの道を教えたり。

文三郎は醉の廻り來つて、爛々と輝く面に燃んばかりの眼差の中に、一道の精氣虹の如く閃めかして

『御教えの數々、必ず文三郎一生の守として、必ず先生御薫陶の光を見せでは措きませぬ。』

少年ながら、其確乎たる自信は、一言一句の中に溢れたり。

靜枝も今や盛の花の艶なる、見るからに、艶冶人を魅せんとす。

『お事、今日は目出度い。山鹿文三郎殿皆傳印可の祝琴の調を一つお聞せ申せ。』

『……。』

はつとばかりに靜枝の面は茜さして、座にも堪ざらん狀なる。

浮世は、女にはすべて惡魔なり、其寄る年浪は、其美しき貌を殺んとし、其激しき競爭は、其心性を食盡さんとす。

されど乙女は神の寵兒なり。綠滴るばかりの鬢髮、その花の如き豐頰雲の眉、ここに、世にも稀なる姿美しき母と、端嚴精正なる父を持ちたる靜枝の艶やかさは、見るからに、人の魂を奪はんとす。

その白魚の指の觸るゝところ、十三絃悉く搖いで、高調人を醉すらむ。山鹿玄庵は、

『それ〳〵、我等、是非所望。』

と膝を進めぬ。

文三郎は唯面眩ゆなり。何となく生溫かき空氣は、其周圍をめぐりぬ。花の室に座したらん心地して、頭の底に、重々しき雲滿ちたり。かゝる窮屈なる思を爲したることなし。折もあらば、この座より滑り脫けんと欲せしなり。

『私、これでお暇いたしまする。』

と丁寧に手を支えて、罷下らうとするを勘兵衛は、

『いや〳〵。』

と手を打振り

『遁げるは卑怯ぢや。文三郎殿、其方の御祝に靜が、一調を奏るといふ。其志受けて貰ひたい。』

『でも、無頂法者。折角の御調も、聾同然の私の耳には、勿體ないばかりにござりまする。』

『否々、其方禮樂諸藝に通じ、文武兩道の達人、樂調に就ても、造詣深いとは、塾中の評判、靜の素人藝、其方の耳には五月蠅からうが、何も義理、彼の志ぢや。迷惑は察する。』

と厭味も子思ひ、弟子思ふ勘兵衛の好人格を表はして餘ありき。

强られて文三郎は座に就きぬ。强られて、靜枝は琴の前に坐しぬ。其後には、眉の跡、靑々と匂はんばかりの母の、爪袋の紐を手づから解つ。此の睦まじき光景、文三郎も親類格なり。玄庵と、勘兵衛の胸の中には、同じく、人知れず春風春雨、一道の默契はありき。靜枝も正に雨に惱める花に似たりき。母は、その背より、娘の頰に流るゝ一糸をもすべて蕩くる眼の底より逸せざらんとせり。文三郎のみは默然として、心は今日印可の愉快を思ひ出し、眼は床の寒梅に注ぎて、萬たけき

女のあるを知らざる狀なり。

一四、塾友の暴行

『山鹿殿！文三郎殿！。』

と後より聲をかくるものありき。文三郎は、今しも尾畑先生の新年祝宴果てゝ、裏庭を散歩せるなりき。離には、琴の音して、その美しき調は、谷の小川にさゝやく水の花を潛るが如く聞ゆ。

庭の梅花は、早や蕾を發し、苔むせる庭に今日は、殊更麗かなる日光華やかに射したり。微醉の心地よしとは、上戸のいふところ、惡醉に堪ざらん狀なる文三郎は、吹く風に頰を冷し、酒の香の一刻も早くさめよかしと祈りき。聲かけられたる方を見れば、同學の尾形啓之進といへる青年なりき。

文三郎とは同じ尾畑流兵學の弟子なれども、財ある儘に華美なる服裝して、伊達を同友に誇る外何等取るところなき輩なれば、文三郎は、顏を覺え居るばかりにて深き交際はなかりき。

慇々しく言葉かけられ、彼は不審に思ひながら

『不意に聲かけられたので、何事かと驚きました。何か御用でもござりまするか。』

と言葉は、例によりて慇懃なり。

『あはゝ、。左樣むきに成られては困る、實は少々折入つて御相談申したい儀のあつて……。』

『何の事かは存じませねど、我等微力の及ぶ事なれば、御遠慮なく仰せられい。』

『それがし、少し……なれど、我等の願ひと申すは、別に何の事でもない。貴殿に一つお伴合願ひ度いと存じまして。』

『お相伴とは？。』

『今宵神田明神までお付合ひ願ひたい……別の儀ではなけれど、實は我等伯母たるもの、神田明神内に住居へるが、御事に是非一つ願ひ度き用事あると申しまする。』

『これは不思議、我等に御事の伯母上用事。心得ぬ義にござる。』

『いや。それは、左程の事ではござりませぬ。御事の顏一つ貸し下されば、それで用濟む。我等切なる願ひ、友達甲斐にお聞き屆下されい。』

このつ引させぬ、應對振なり。

啓之進は、熱心なり。いかにしても文三郎の力を藉らねば、我上の一大事、他の門弟子の力にては、到底も解きかぬる事の出來たれば、文三郎を煩はして、詫して貰はんことを求めたれば、文三郎は

『かゝる用事に、我等未熟ものゝ差出口、先生、始終お戒めある事。其許の事、其許自身にて御處置なされい。』

「なれども、我等には、心易き仲の事なれば、仲々に聞入れくれませぬ。是非に其許情に縋らねばならぬ。』

と達ての事に文三郎は、神田明神へ行くことを約束したり。

啓之進は、只管に喜びて、幾たびも、安く頭を下げて立去れる後、文三郎は思案の胸を抱きぬ。日頃心易からぬ男の、あの狀は宛がら我と十年の知己の感あり。不思議なれども、我等の力を要すとあれば、同塾の誼なり。と示さるゝ時刻を圖りて、明神境内に到れば、

『山鹿殿、文三郎殿。』

その聲は、啓之進なり。

『お待たせいたしました。』

『いや某こそ、其許に無禮顧上げ相濟みませぬ。』

『伯母上のお住居へ御案内下されい。』

『其伯母と申すは、それあの先の……。』

と社の森蔭を指して

『あの燈のかげなれども、其前に此處にて少し御意得たい義ござつて。』

と聲は顫へり。

文三郎は何心なく、啓之進の顏を見詰め居たり。その擧動いかにも不審なり。

『我等、其許の御賴みに依つて此處まで參つたのは、伯母上へお詫の義でござるとの事ではなきや。他に何か我等に申さるゝ事ござるか。』

『いや、極めて内證に、實は極々内證に……。』

文三郎は、秘密を惡むこと蛇蝎の如し。

『内證?。我等内證事大嫌ひ、先生始終の御教へ、人間は、何事も公明正大、殊に男子の言行は天地と同じく正明でなくてはならぬ。其許は婦女子もいはぬ事口にして恥かしいとは思はれぬか。』

その聲は凛として手は早や刀の束にかゝれり。

『其譯、我等本心より申上げる、必ず笑つて下さるな。』

と啓之進は訥りながら、

『實は、其許、こゝまで御足勞願つた譯と申すは、甚だ申悪い儀なれど、其實は先生……にかゝる事聞えては、我等一生の疵、先生の目玉が恐ろしい。』

『其許の話、一切我等には通ぜぬ。先生の眼玉が恐ろしいの、一生の疵のと、左樣の義、我等には一向分らぬ。』

『あゝ、其許は解りが悪いな。』

と啓之進は頭を掻き乍ら、

『笑つて下さるな。實は、其、我等靜枝殿と戀中でござる。』

『何と云はるゝ。』

と文三郎は、思はず聲を高め

『靜枝殿と……。冗談にも程がある。先生御息女、靜枝殿と戀中とは?。』

『いや。其樣驚かるゝ程もない。靜枝どのは何にも御存知ない。我等の方が、つまり、戀慕でござる悪からず々々。』

『左樣な事、我等は聞く耳持ちませぬ。山鹿文三郎は、尾畑流兵法の指南を先生に受け、孔孟の道によりて友を求むる外心得居らぬ。其許、伯母上宅へとは偽、我等を此處に導き、穢らはしい相談相手にせうとある。其心底の卑しさ、苟くも對手は師匠の大事の娘、それを其許が何うのかうのと其樣な相談は、我等面目にかけて受けぬ。これにて御免蒙る。』

とすた〳〵と立去らんとする後より、ばた〳〵と黒き人の影、突然文三郎の咽喉首を締め上げんとするを、彼はくるりと身を翻へしさま、心得たりと、左右に開き、屹と見やれば、月は木の間を照し、失敗たりと彼方に遁げゆく二三人。其容子、顏貌皆見覺ある塾の書生共也。文三郎の面には憤の色火の如く上りて、瞬きもせで、其後影を見送りぬ。啓之進は、遁場を失ひ、文三郎の袂に縋りて打顫ひ居たり。

文三郎は、屹と瞳を、啓之進の方に轉じ、

『其許の其卑劣賤小、見る影もない、其落魄た心が、寂しい面の上に滿ちてある。其影を踏まずといはれた師道を辿る身に不似合の、愛娘御に無道の戀柔れ果た尾畑勘兵衛殿面瀆し。殊に同門の甲乙呼び集め、不意に乘じて、我等を擊うとは日頃先生の御教訓に對して申譯無き義、何者の狼籍何の意趣あつての我等への迫害、斯る未練至極の行爲、甚だ以て心得ぬ。』

と緊乎と睨まへたる眼光の炯々として電の如し。

啓之進は、さま〴〵に云ひ詫び且謝しぬ。

『御教訓一々最も至極、我等の不心得、先生に知れましては、忽ち破門、それ丈けはお許しを願上まする。』

と蟲の地に伏したる狀なり。

『あは、、、。我等これを深く責むる心は無い。其許の精神、かゝる女々しき事婦人に迷ふて、其痴態、今、世は太平、士道漸く地に落ちんとする時、尾畑先生一門天下の氣風を振起すべき覺悟無くて心を放ち、精神を疲らし、思ひを無用の事に勞する抔は、全く世の廢ものゝ考へ、殊に其許

等、打集ひ、打群て、到る處に狼籍働かるゝは以ての外の義ぢや。』

と誡しめ

『さて、これで用はない、一刻も早く塾に歸つて、腸の洗濯でもするが可い。』

『畏入ました。』

と後をも見ずに駈出す姿を、さも賤しげに見送り、悠然として立去らんとす。月光漸く冴て、滿地の霜に點々たる梅花の影、瘦軀長身の若者が、凛たる姿を浮べたる、畫にせまほしき景色なり。

文三郎の盛名は、當時既に諸侯の間に擴れり。其隆々たる盛譽は、青年儒生の間に、奸羨の種となりき。彼が美しき靜枝を娶らんは、更らに〳〵、同儒生の嫉妬を買ひたり。文三郎の心は一途に向ひて、他を顧る遑だになけれども、人さま〴〵の評判は、早くも、彼が尾畑家兵法の後嗣者として嘖々たる聲譽を荷ひ居たりき。啓之進は、文三郎の手より靜枝を奪はんとし、之が一味の輩は、文三郎の名譽に、一棒を加へんと欲せしなりき。

一五、伯母祖心尼の教訓

江戸は牛込榎町の濟松寺の門前に、禮服いかめしき山鹿文三郎來かゝりぬ。

『ヤ、山鹿の御子息、しばらく御疎遠しい。』

と箒拋捨てゝ驅け寄りしは、寺男の杢兵衛爺なり。

『爺さんも不相變達者、何より結構。』

と文三郎は、輕く會釋して過ぎんとするを

『ホ、其許の顏を見ると、懷しい。涙が出る。オツト正月匆々から、緣起でも無い。聞けば御許學問なら、兵學なら、日本一の林道春樣、尾畑勘兵衛樣、又北條樣御直授、すつかり呑み込み、今では豪い江戸中の評判、山鹿玄庵樣よい子息持たれた。と、その噂は大したものぢや。御隱主樣にも、例も、我等捉まへそのお喜び、御許、會津から、御母上の懷に抱かれてお出での頃からの馴染善い評判聞く度びに、我子の出世の樣に嬉しい。何は扨、今日はお正月、我等もお蔭で達者、ところで、喜んで下されませ、山鹿の若樣、幹がまた一つ孩兒を拵へて、この爺、早や三人の孫を持ちまする。その孫の可愛さ。眼の中へ入るも痛くは無い。といふ程のもの、兄孫の太郎坊、御許とは仲善友達、我等拵えて竹馬、ついこの間まで、庫裡の一隅に殘してござります。』

『オ、其竹馬、其方の孫の用に立うの。』

『御許矢張、昔の事、忘れなく、偶には顏を見せるものホ、その美しい大小、身丈も立派なお侍となられた。その可愛い顏、早く御隱居にお見せなされ、ドレ私、お案內申しまする。』

と、杢爺は、イソ〳〵と駈入れば、今し年始客受に忙がしかりし濟松寺の祖心尼

『これは、また、其方來る來るこの前知せばりかにて、暮には、逢ふ折無しで過した。今朝、深川(玄庵)よりの便に、今日は其方に逢へるこの事、樂んで待つてゐた。其方、寒相な顏して、風邪感ては成りませぬ。』

と眞心からの取做、文三郎の手を取らんばかりなる祖心尼の歡待に、文三郎は懷しさに擧顏ひ、

『小子こそ、伯母上御機嫌伺ふ折のみ、心に隱けて居りました。まづ以つてお障りも無う。』

と優しき瞳は、早や涙の露を泛べぬ。

春日の局が、德川初政の名物女なりしことは人の知る處なれども、祖心尼の事蹟は世に廣く知ら

れず、この人、後の春日の局とも申すべき賢婦人にして、二、三代將軍に歴仕して、深く用ゐられ三代將軍家光公に仕へて忠誠を致せしかば、公は太く祖心尼の人と爲りを愛したまひ、牛込榎町に一寺を建立し、祖心尼の餘生を送る庵住と定めたるなりき。

今、山鹿文三郎が、年始の御慶に罷越したるこの榎町濟松寺は則ちそれなり。

寺廣からねど、瀟洒、庭には泉石多く、松韻風壁まことに、得難き閑寂の境なり。

この祖心尼こそ、山鹿文三郎の淚き身寄にて、篤學にして、才器あり、世の常の婦人に似ぬ雄々しき氣象に富み、女ながらも、武藝の嗜みもあり。暇あるまゝに、唐倭の文の中より、修養の語などを抽き寫して、文三郎の爲めに讀み聞かせなどし、彼が父に伴はれて江戸に來れる三四歳の頃より、わが子の如くに愛しみ育てたり。

されば、後には日本一の兵學者、山鹿素行先生の初學は、重にこの賢婦人の膝下にて授けられ、彼が運命の扉も、この婦人の手に開かれたること少なからざりき。まことに、人各々、天授の啓發者あり。素行先生、一代の志業、數百年の後に輝ける高き識見度量、學問も實にこれらの靜かなる淨刹の影に、世を住み佗びたる老婦人の口より、その絲口は開かれたるなり。

文三郎、道春先生入門の當時、時々、この寺の椽に坐して、凜々として、武士道を、この尼君より聞かされたるなるべし。書院の下、さま〳〵の浮世語に、將軍家の暮向き、大小名の心持ち、なども泌々と聞かされたるなるべし。

げにこの氣高き一尼僧こそ、文三郎には世にも尊き學びの親なれ、愛の神佛にぞありける。

『其方、尾畑流兵法印可取られたとの事何より目出度い。その喜びの印に、この伯母より其方に上げる物がある。』

と祖心尼は起つて次の間に。文三郎は端然として床の掛軸に對せり。床には、何人の筆ならむ、頰髯蓬々たる大達摩の大なる眼して文三郎を眞向より睨み居たり。

祖心尼の取出したるは一卷の書なりき。

『其方文武の心掛深く、聖賢の道を林先生に、兵學は、尾畑先生、北條殿に。廣瀨坦齋先生より和學をそれ〴〵世に得難き名師のお口づからの御教授相受け、殊には日の本國體の根ともいふべき神道を高野光宥師の御薫育、四方より文を練り、藝を學び、今は一籠の學者とも成られた。年齡こそ弱けれ、其方の才學江戸中の評判に上り、早くも將軍家大奥にも聞えたれば、其方の人となりの

如何など、お直々の御下問。この伯母の身の果報とも光とも思はるゝ。されば、其方今日の身は、山鹿文三郎一身ではない。其行爲振に依つては、外、將軍家御知遇を辱しめ、延ゐて、諸先生お顏に干はる義也、山鹿家一家の榮辱其方の肩に繫つてある。其心得大切忘れてはなりませぬ。』

『御心添ふうでざりまする。御教示の御旨、誓つて忘却いたしませぬ。』

『その心得の一つにもならうと思うて、我等日頃毎朝一首づゝ暗誦した『日本忠訓』進ぜる。我等の頭には入つた。其方の胸にも泌み入る樣な誠めもあらう。』

と美しき筆蹟にて書きつけし『日本忠訓』は心こめたる伯母上祖心尼の手より、好望なる未來の兵學者、山鹿素行の手に渡されたり。

『藤原鎌足曰く、吾唯一の神道は、あめつちをも書籍とし、日月をもて證明とす、是すなはち純一無雜の密事なり、かるがゆへに儒釋道の三つのおしへをかなめともちゆべからざるものなり。然れども唯一の潤色として神代の光華とし、ひろく三敎の祖學をそんじ、專ら吾國の淵源をきわめんものはまたなにの爲かあらんや。』

鎌足公の宏辭碩學、早くも二敎合同の理想を有せしなり。文三郎の若き頭の中にこの勞頭第一の敎訓こそ、まことに彼が一生の掉世的氣象を培はしたるなれ。

彼が兵學の初師は尾畑勘兵衛なり。中にも尾畑流兵學の俊者、北條安房守氏長は、最も親炙したる彼の先輩なりき。そも〳〵山鹿流兵學の始祖は、鈴木日向重辰にして、かの有名なる山本勘助晴幸は實に日向が直傳の敎を奉じたる一人なりき。早川彌三右衛門幸豐其次を嗣ぎ、尾畑勘兵衛憲景に至つて大成し、北條安房は、其最後の傳統者なりき。山鹿素行(文三郎後素行)一たび、其學統を承くるに及んでや、枯淡理屈に偏せし兵學は俄かに生氣百倍したり。

一六、山鹿家祖先の忠烈

元服後の文三郎は、見違ふばかり凛々しく男らしく美しさを加へぬ。名も山鹿甚五左衛門と改め文武兩道の達人として、世に持て囃さるゝ大達者なりけれども、祖心尼にとりては、まことに可愛ゆき甥として、眼の中に入るとも痛かるまじき狀なり。

文三郎の甚五左衛門は、『日本忠訓』息も繼がず讀み終り、

「何より結構の御事、わけて伯母上御丹誠を味ひ、古聖賢の教を堅く守りまする。今日は伯母上御健勝の體を拜しまつり、新年のお慶びに、私、尾畑流印可の儀も申上げ、心も生々といたしましてござりまする。」

「山鹿の名を揚げ、家を興すは其方御先祖に對しての第一の勤ぢや。山鹿家系圖に就き、父上より夙に聞及ばれたか。天慶の亂、平將門を征伐し勇名隱れない俵藤太秀郷の御實弟藤原藤次と申すが、山鹿家の先祖、申すも畏きことながら、將門、叡山より、皇居を見下し、俄かに謀反を企て、猿島に假宮をつくりて、一天萬乘の皇位を覆し奉らんとの陰謀を倒したる大忠節、後の世の語り艸其弟に當るゝ藤次と申すは、筑前の山鹿に住はれ山鹿城に據て、世々筑前守として世に傳へられた武道の本家、綿々として幾代か打續き山鹿秀遠と申さるゝが山鹿家中興の祖とある。其方、其秀遠ごのゝ事詳しく存じ居らるゝか。妾、何時の前に、其方に話しはせなんだかの。」

「山鹿秀遠ごのゝ御事、尾畑先生より時折伺ひました。なれども、伯母上御口より承るは初にめでござりまする。」

「山鹿城の正門から、潮の樣に押寄せた兵が吶喊の聲、曉の風にばた〳〵鳴る旗の音、雪と擬ふ源氏の白旗、榮華の夢も、覺むれば、寒き秋の木の葉の、一時の春榮求むるに由なき哀れの有樣、福原城は一燼の灰と成つて、今は身を寄する甲斐もなく、西へ西へと流竄の身を卿つ平氏の落武者共、中には玉とも守りまつるべき御幼帝、世なればや、何も知し召さで、きのふもけふも浪枕、定めなき世のまに〳〵、勿體なくも御苦慘を嘗めさせるらん其御慘さ。その折、三千の精兵を率るて安德の御帝を山鹿城にお迎申し、群がる源氏の輩を迎へ戰ふた山鹿秀遠こそ、見上げた立派な男振であつた。」

祖心尼の話は中々に盡くべくもあらざりき。

「秀遠殿、武者振の勇ましさは、其折の事誌した物の本見るも中々の心地可い。世も末、陸に海に、枯羽打振る哀れな平家の一門を脅負つて戰ふたが、何分多勢に無勢、散々に打敗られ、安德の帝には敢ない御最期、平家の郎黨は散々の目に遇つて、散々ばら〳〵、最後まで蹈止まつて、したゝか源氏の兵を惱ました秀遠殿も、武運の盡と、山鹿の砦に取收むるやうもないのを見て、今はこれまでと悠々と陣を退れた。秀遠殿は伊勢にて天壽を果された。されば其後の山鹿家は、五十鈴川清き山田のほとりより流れて世々の武名を輝かし、山鹿貞實と申すはこれまた稀代の勇士、其方父

上玄庵ごのは、貞實殿の孫、其方はつまり、得難き此方の將、山鹿貞實殿尊父祖に持たれたなれご今の世は、槍、長刀、人を見れば血を見では止まぬ戰國ご違ひ、文武兩道鳥の翼に似て、仁義道德の光なくては世に立つべき譽はない。將軍家御家敎、東照公御垂訓、明らかに其旨記されてある。世に亂世の英雄たるは易けれご、治世の豪傑ごなるごが難かしい。槍、長刀を筆に更へ、經典を以つて、天下を救ふは、武士の快事ぢや。玄鹿ごのも世に優れた侍、學問なら、武藝なら、珍らしい發明修業、會津侯のお召出を蒙りて、全く用ゐられ、これが戰國ならば天晴れ一城の主、今はその剛骨、權威に屈せず、富貴に侫らず、主持ちを避けて、今では世を捨てた振の町醫者。なれご、其方の親ごして山鹿家の重寶。その敎を守り、其方も立派な侍に成りて、家名を繼がねばなりませぬ。」

祖心尼の甚五左に對する啓發は例に依りて諄々ごして倦まざる說敎にてありき。甚五左衛門、既に二十歳を超えたり。素より凡庸の器に非らねば、人の前に立てば天晴なる師風を爲すべき也。而かも家庭に於ては、依然たる一の溫順平和なる童なりき。

甚五左の父玄庵の曲折ある生涯は、彼が爐邊の茶話にも頻りに說聞かされたりき、平和なる山鹿家の晩餐の席には、透徹る冷しき聲もて、何事か高らかに論ぜるを、いご樂しけに、盞を甜めながら、落着拂ひたる調子にて彼是ご批評を加へ、時には、輕き皮肉をさへ投て、愛兒に揶揄ふ、父の玄庵も、取るまじきは年也。何時しかその剛壯愉快なる勇者の果にも世の常の人に見るべき愚痴も交りて聞かれき。

文三郎の甚五左が、祖心尼の賜はりし屠蘇に醉ひて、家に歸りしは冬の日の沈むに早く、庭の風颯々ごして奧間は、早や燈の點されて伴待には見馴れぬ若徒の甚五左衛門に會釋しぬ。客は誰ぞ、甚五左衛門は樋庭に通りて、その父の書齋ご定められたる六疊に入れば、閉め切りたる室に溢るゝばかりの水仙花の匂ひ高し。

一七、紀州侯の懇望

客ご玄庵ごの談話は、果して如何なる秘密なりしか。もごより甚五左衛門は解らず。彼は父の書齋に座し自から短檠を執り、手をのべて机上の莊子を開き、飛び讀みに默讀し居りしが、椽側を人

の歩む氣配すると思へば、外より母の聲は、例の美しく澄みたる中に、落着ありき。

『甚五左お歸りやつたか。』

『はい、唯今。』

と甚五左衛門は席を滑りて、

『唯今御挨拶に參る筈にござりましたが、父上御客間には、お客らしく、態と此處で隱れて居りました。』

『オ、其御客？。其お客がの、其方が歸りお待兼ねぢや。父上も今か今かとお尋ね。サ、早く奥へ御挨拶―。』

と手を取らんばかりなり。

甚五左衛門は母の手に引かれて、客座敷に出づれば父の聲は勵しく、例の武つけき調子にて

『甚五左、このお客樣な、紀伊大納言殿御家人、小栗仁右衛門どのと仰有る。其方身上に就き、種々と御配慮厚く御禮申上ぐるが可い。』

『忝なう存じまする。私事山鹿玄庵悴甚五左衛門と申すもの、何歟と御世話に預りまする事、此

上ながら御見識置かれまして。』

と甚五左の行屆きたる態度をつく〴〵と打見やり、

『これは御挨拶痛み入る。某は御主人御紹介の小栗仁右衛門。いや、年ばかり、枯野の薄、鬢も髪もお見掛けの此狀、御憐察下されい。御許には益々御盛んの事何より重疊、實は使者の趣き、先到來、父上に御内談と申すよりは、打口說いて居たところぢや。なれども、父上も仰せらるゝ。御許の胸も承らいでは、何共決しかぬる事。それ故、長座首を長ふして御許御歸宅相待申しました。濟松寺の御坊へ御年始とか。定めて祖心尼もお喜びの事にござりませうな。』

『伯母上には、永年御養育を蒙りましたこと故、何歟につけて御懷しうは存じますれど、ついつい、疎遠に打過ぎました。久し振りの事と殊々、世間話に暮ましてござりまする。』

『一生の波風を、婦人の身に凌ぎ了せて德川家無二の重寶と珍重がられる程の方を伯母に持たれた御許の手には、出世の鍵が渡されてある。その前途には、希望の光輝やいてある。世には、人に羨まるゝ智惠才覺あり乍ら、一向に人に識られず、たとへば深山櫻の賞るものも無し、鶯の春も行くに早く、散るも咲くも、世と關はらぬが多い。其儀に於て、甚五左衛門は稀な幸福でござる。』

こと自分の用事其方退けの、お世辭も隨分骨の折るゝ事なり。

小栗仁左衛門は容を改め

『今、太平の世こいへ、治に居て亂を忘れぬは、古今武士道の大切、殊に紀伊大納言殿、御心懸

藩中足輕に至るまで、經書を敎へて聖人の道を明らかにし、武藝を勵まして、萬一の退を取らせぬ

覺悟されば、其道の達人を招きて、師範こし一世の氣風を矯さうこの御熱心、滿都隱れもない御許

御盛名を慕はれ、七十人扶持、御近習、素より及ぶかぎりの御厚待申上げ度、達而御承引下さる樣

先刻より父上玄庵どのに御願申してゐるこころ御許、鵬志千里の雲を摶つ御望みは萬々呑込み居る

なれども男子知已の爲めに暫らくの大志を枉げらるゝことも世の習ひ。』

こ眞心面に現はれたり。

甚五左衛門は、默然こして聞き居たりき。紀伊大納言の師範役、七十人扶持。御近習、これ等青

年學者をそゝる如き小栗仁右衛門、其聲は、甚五左衛門の心の上面を、斷れ雲の走せるが如くに去

來したり。仁右衛門は、紀伊公招致を以て知已の感こなし。男子須らく、之に酬ゆるの道を立つべ

しこ慫慂せり。十五歲にして、經書の講義を諸侯の前に試み、天下の儒者を見臺の前に廻して、從

容こして、經史を諳じて憚らざりし彼の眼中には、素より紀伊公の權威も、七十人扶持の誘惑も、

ほこんど、何等の好餌には非ざる也

甚五左の沈默せるに、小栗仁右衛門は少しく焦ちて

『先刻も申上ぐる通り、御身伯母上は將軍家の御寵遇、濟松寺建立のこども、大憲公御思召こあ

る。その立派な出身の綱を持たれる身の上、立身出世は望みの通りながら、紀伊公の御懇情は、例

外の御沙汰、公、士に下り、賢を遇したまふの深きに對して、御身行末を托さるゝこと一生の御爲

めに惡かれこは存ぜぬ。こゝな、御考へ廻らされたい。』

甚五左衛門の眉は昂り、きこ締めたる唇は動きて

『小栗殿。』

こ其聲は、火を噴く山より怒れる炎の立上るに似たりき。

『紀伊公御招き、眞平御免蒙りまする。』

仁右衛門は眼を圓ふして甚五左の顏を見つめぬ。傍にありし玄庵も拳を時に、身をのり出して、

口を尖らし

『何こいふ。其方。小栗殿懇々の仰せに背きて、紀伊公の御懇情を辱かしめる意な。』

『いかにも。』

こ甚五左は屹然たり。

あまりに甚五左の激しき聲色に、好意ある仁右衛門をば色を變へしめたり、玄庵も之に投ずべき緩和の詞を見出さゞりき。

『甚五左、其方、何か思ひ違ひではなきか、小栗殿御志の程、粗末にしてはならぬ。紀伊公思召の程世の常を越え、破格の御優遇ぢや。我等常々、其方に申聞けた通り、千石以下にては、仕祿の道につくな。これ、祿の高下を彼是申すのではない。餓えたる雀も、一倉の米を一時に空には出來ぬ。武士の主を擇ぶは、寧ろ其祿に非ずして、其人にある。なれど、餓鬼侍の一時凌ぎ、何の見識もなう、招かるゝまゝに、之に就き、自然賣身の節度を誤まるは、一生の不爲、思ふこと職卑しき爲めに爲すに拘はられ、志小なる爲め、學問武藝人の玩弄物に成る、其例少うない、こゝを我等、平生、其方に戒めた。なれども、今承れば紀伊公の御身分にして其方を師範こ仰ぎ、御自身も其方が見臺の前に坐らうこの仰せ。其位を空しふして、士を求めたまふの御志は、尊こい。其方に取つてのお爲ぢや、心を決めて小栗殿、御使者の顏立てるが可い。』

『ではございますれど、この儀は一先づお斷り申しまする。』

『何故に其樣なこと仰せらるゝ某の申したことが、何かお心に障りましたか。なれば、平にお詫する。』

『仕官の途には第一望みはございますが、我等學問こ申し、武藝こ申し、兵學こ申し、唯、十數年の丹誠にて、其牆を覗いた位のこと、中々以つて人の師範などゝは思ひも寄らず、素より衆ねて諸侯の御推薦を蒙り、少年禮を辨へず、高慢な顏して、一知半解の出鱈目を申述べましたること、今更、古聖人に對して、慚愧至極、諸侯方に對して、失禮千萬にムりまする。去れば兎も角こして小栗殿仰せの祖心尼、將軍家緣故深く、其爲め山鹿甚五左衛門、出世の夢を求めたこあつては、某一生の名折にござりまする。』

仁右衛門は、早くも甚五左衛門の意を諒し得たり。さては、我愛想お世辭にて申せしここの、獨立を尊び、自由を欲み力を恃める甚五左衛門の感觸を害したにやあらむ。堂々たる諸侯にして、なほ且つ因緣を求め、手蔓に縋り、汲々こして將軍家の思惑に氣を揉むが多き世の中、伯母御の引立

によりて人に知られしと云はれんことを、一生の名折と心得たる甚五左衛門の巍然たる精神に、仁右衛門は更らに深く感服し、

『これは、我等の粗忽、平に御許し下さい。十歳にして經史を諸侯の前に說き、列座の面々を驚かされた程の御身、出世の渡綱を濟松寺に縋るゝ要はない。その御志承る上はなほ更ら嬉しい。紀伊公のお喜びも申しやらるゝ、是非枉げて御承諾下され、この爺がこの稀有の土產提げて、大手振つて使者の役目立つやうお願ひ申しまする。』

一八、安房守の甚五左評

紀伊家より、懇なる招聘を受けたるに前後して、彼が開運の神は、北條安房守を通じて、阿部豐後守より尾畑勘兵衛が許に、其出藍の高足、山鹿甚五左衛門招聘の事を申込みたり。

安房守は、尾畑勘兵衛の第一弟子なり。彼は純然たる尾畑系の兵學者として、直系に屬すべきものなりき。甚五左衛門が兵學の手ほどきは、この安房が爲せるなり。

『一見婦女にせまほしき顏容ながら、その言語文章の堂々たる、名流大家も及ばぬ。御手許の中より、あれ程の英物出來たとあつては、定めて本懷千萬の事と存ずる。仄に承れば、彼の父立庵、世に稀なるすねもの、天の高きを戴き、地の厚きを踏み、橫行濶步すべき、男一疋が、小祿に囚られて、右へ向つて頭を打ち、左に向つて鼻を撲つ、狹くるしい主取りは子々孫々にさせぬと云ひ居るよし。立庵の申分は、强て其能を求め、其才を惜しむ諸大名の中に、世に物數奇のものありて、千石以上に愚息の裸一貫文其儘の望み手あらば、兎も角とは、甚だ高い止り方。この世上の毀譽はあれど、それ程の氣位が好ましい。御許より、尾畑殿へ可然申し入つて、是非に我等の望み叶ふ樣お取做願はしい。』

と阿部豐後は、辭を卑ふし、禮を厚ふして、甚五左を膝下に招かんと欲するの念は切なりき。

安房守は、聞終りて

『その御厚意、我等一門の爲めに喜ばしく殊に山鹿甚五左も出世の事、立庵貧乏世帶に花も咲く譯、千石以上の何のと、それは身の程知らぬ僭上、高が、やつと二十才を越したばかりの若侠、何を云つても未だ嘴は黃い。と申すものゝ御許の仰せの如く、其才藝侮るべからざる俊才。唯々、齟齬

の道が第一、尚、我儘は持前の野育ちの悍馬、手綱を弛めてはなりませぬ。」

と安房守の推薦は、頗る底氣味惡き褒め誹りの譏り褒なり。

『其悍馬望み。野育ちが結構。』

と豐後守は膝を進め

『これは碁打の話ぢやが、初段以上に上るべき碁打は、小器用の碁を打たず、素人碁のヘボ指南を受けたものは、何處かに賤しくひねくれて、面白味が無い。野馬は矢張野馬であれかし。我等は山鹿甚五左衛門をいつまでも野馬で買ふ。』

と案外の意氣込みなり。

安房もこれには返す詞なかりき。

『世間の評判は盲千人、案外のカス摑んで、羊頭狗肉なごゝ、嚙んで吐出されては迷惑、また甚五左の聖學と申すもの、林先生家法とは段々遠ざかり、將に異端異說を唱道する。兵學も尾畑流兵學の骨法、甲州一流の精直無垢、一氣正純の氣象を規矩とせず、自流の一派を樹てゝ、虛名を貪ほらうといふ底意地も見える。少年より世間に煽てられ已は〳〵で、高慢が高じたとの噂もある。所

謂、禪ならば野狐、碁は笊、お許の仰せある共大碁手の器では無い。加之にあの父玄庵。」

廊下を人の足音。安房ははッと口を噤ぎ、

『誰ぢや。』

答もあらで、小厠の、ばた〳〵と駈去りたり。人を誹るものゝ、憚かり多き、安房の眼の色は、人の足音にも變る也。

「玄庵と申すは、今は世を避けて町醫者としての穩れ名、蒲生氏郷が臣町野左近將監が客禮を以つて厚遇した一代の奇傑山鹿高道某よく存知居る。其高殿の玄庵如何いたしたと仰せある?。」

『申すまでも無いこと、その玄庵も今は浪人、素々氣隨で、仕祿なごは出來ぬ疵だらけの男、甚五左の母といふが則ち將監の侍女、その腹の子を以て玄庵に嫁いだとか何とか面白からぬ噂も聞いた。其父の分らぬ子が今お許が、七百石の高祿で買つて行かうといふ野馬、伯樂のお名前にも拘はりますまいか。』

『何と仰せらるゝ其許の話は、某いかにも腑に落ちぬ。甚五左衛門は申さば、其許の敎子、その門下を、我等が懇望するは、卽ち、尾畑流兵學隨喜の一人と申しても好い。取りも做さず、尾畑流

の光が出る譯。その光を蔽ふ雲あらば拂ふが當然。甚五左の腹が何であらうと、それは要ない。假令足輕風情の子でも、甚五左衛門は立派な學者ではござらぬか。」

と機鋒甚だ鋭ごし。

「甚五左の才氣は、御許申さるゝ通り、我等が其才能を蔑にする法は無いけれど、彼が第一氣にかゝると申すは、其才能がやゝもすれば危ない。謀逆の種を蒔きはせぬかと、我等は又我等で氣にかゝる、其れで二つ返事で推擧は出來ぬ。何しろ、十才で諸侯の前で經書の講讀をして、一世を驚かした程の男。其才智を善用すれば善いが、もし誤つたとすれば……。」

「あハ、、、それは杞憂、大を善用して其能を盡さしむるは、之を用ゆるものゝ如何に依る事、我等不敏ながら、山鹿甚五左衛門用法位は心得居る、お身の好意は好意で受けるがそれ程の男を、牡馬のやうに使つて見るも一興。」

と豐後守は却つて、甚五左衛門を自已の藥籠中に入れんことを望みぬ。

老中阿部豐後が、今かくまでに熱心に之を聘用せんことを望めるとは夢にも知る由なき山鹿甚五左衛門は、紀伊侯の望みに任せ、千石ならでは腰を屈せじと決したる心を狂けて、其御近習たらんこと諾ひたる折なり。

豐後は、使者田中一郎左衛門を召されたり。一郎左衛門は、豐後が相談相手とせる老武者なり。召に應じて、其白髮頭を、豐後の前に平伏させたる一郎左の鬢は雪よりも白し。

「一郎左、夜半に召出して、其迷惑察し入る。實は、急に其方に語りたいことがあつての。いや遠慮はいらぬ。火鉢の傍に進め。」

とつく〴〵一郎左衛門の顏を見戍りしが、

「其方今年は幾歳の春を迎へたの。」

「七十八歳にござりまする。」

「オ、目出度い、頗る健勝、今日は其方に一つ喜んで貰ひたい事がある。」

と豐後は身をのり出し

「外でも無い。我等、正月早々、よい夢を見た。」

「はてな、好い夢。いかな吉夢でござりまする。」

「當てゝ見るが可い。」

『一富士、二鷹、三茄子、これは甚だ月並ながら、古來新春の吉夢に數へられて居りまする。』

『その一富士の、同じく山ぢや。山鹿甚五左といふ玉を拾ふ夢見た。』

『山鹿甚五左衛門?。』

『さうぢや、その玉、諸侯よりの招きを辭して、千石ならでは、聘に應ぜぬといふ今日も安房守に面會、是非な我等邸に召抱へ、諸侯方に鼻を明して見せやうとの相談、安房も格別異議は無い。其方は奈何ぢや。』

『その玉、疵付かぬ中、家寶といたしたうござりまする。』

『うむ。之れで安心。後とは云はず其方直ちに山鹿甚五左衛門父女庵が許に使者となり、この玉味よく奪つて參れ!。』

『畏まりましてござりまする。』

一郎左は立上りぬ、初春の風淅瀝として雪を交え、滿戸閑として人の往來だになし。

一九、阿部豐後守の失望

初雪は、下駄の齒を埋めんばかりに降りつもりぬ。性急の阿部豐後が使者田中一郎左衛門は、家人一人召伴れ、いと忍びやかに、深夜山鹿の門を叩きぬ。

枯木寒林一夜にして華を飾りたる山鹿家の中に、埋火を搔起して、まだ眠らぬ甚五左衛門の心の華は、今や咲き初むべき新らしき運命一傘のかげにつゝみて一郎左の、老の足踏たしかに

『讀む!。』

といふ聲も力あり。

『オ。』

と聲して、表の木戸細めに開けたるは甚五左の母なりき。

『何方にて在します。?』

『これは夜更けて、御住居を驚かし參らせたる不躾、何とも早や申譯ござらぬ。我等事は老中阿部豐後家のもの、田中一郎左衛門と申すもの、是非に御意得たいことのござつて、夜中をも顧みず

祖忽申上げた譯にござりまする。」

『何用かは存じませねど、この寒空に、態々の御越。さ、入らせられませ。』

繋燈片手に、案内する。なほ殘んの色も香もあり。

一郎左は、書齋に通されて待つこと少許にして、凛然たる甚五左の姿は、一郎左と正面して坐しぬ。

初對面の挨拶濟むや、一郎左は甚五左衛門に向ひ

『夜更けて高門を驚かしまゐらせたる罪は平にお許し下されい。我等推參の義は、餘の儀に非ず其許、雷名天下に轟き、我等主人豐後守、夙に英風を欣慕され特に今宵、我等差遣され、其許御安眠を驚かしまゐらせ、是非望みの趣聞屆けられたい。と申すは外でない。諸侯の御厚聘もある事ながら特に枉げられて豐後守が左右に、賢者の師たる名を許されたい。こればかり我等の望みにございまする。』

『これは近頃御多忙を煩はして相濟みませぬ。今宵は別て雪天。途中御難儀、御召あらば、此方より參るべきでござりまする。』

『否、否。』

と一郎左は大なる手を打振り

『豐後直々參上仕るべきの處、兎も角其方參つて御意得來よとの事、略儀の段御咎めなく……。』

と、二十餘歳の青年の前に、幾たびか白髪頭を春かしめぬ。

賢を求め才を招くにつとむる阿部豐後守の使者、田中一郎左衛門は心ひそかに劉備玄德が、孔明出廬三顧の故事にも似通ひつるこの度の使命を中心頗る興味を感じぬ。孔明出廬は二十七歳、甚五左も略相肖たり。それとこれとは事異れど、籟々として寒風枯林の吹雪の中を、夜陰ひそかに山鹿家の門を叩きて、其昔、鎌倉の執權職が、佐野の瘦侍を訪ひ行きし一夜の夢も思ひ出されて、何とも知れぬ心の愉快は包まんとして能はざるなりき。

甚五左は、あまりに一郎左衛門の謹み約しやかなるに恐縮しながら

『かくまでの仰せ、某にとりましては、冥加至極の義にござりまする。なれども實は、我等の身今は。我が儘になり兼ねまする。』

『其許の御身、繋ぐ綱ありとも覺えず。如何な、大きな力も、豐後殿、執着には叶ひますまい。』

『その御思召、それ丈け承る丈にて我等は重頂、一門の譽にてござりまする。我等の氣儘を因へましたるもの、人情こいふ大きな綱にござりまする。』

『その綱?。誰の手に持たれある?。』

一郎左は首を傾けぬ。

『紀州公、御家人小栗仁右衛門こ申す方を差遣され。菲才淺學の某を御召抱下さるこの事。父玄庵の志にもなく、某もまだ中々其御望み副へまする身にもござりませねど、強ての事、身の程の辨へもなく、御召に應ずるここに心を決めましてござりまする。』

『これは、殘念。早や心翻さるゝ折はござりますまいの。』

『心の決しました上は!!。』

屹こ云ひ放ちぬ。

一郎左の面には、失望の色滿ちたり。豐後の落膽もさこそこ思ひやられたり。

數刻の雜談に時を移して、門を出でたる一郎左の足の重さは、下駄の齒に積む雪の石に似たりき

地は一面の銀世界、朧ろに照らす月光蒼く、ふりかへれば稀代の兵學者、山鹿甚五左衛門が家の軒は靄にかくれて淡こして夢よりも淡し。

一郎左の返事如何にこ豐後守は、なほ床に入らで待構へ居たりき。

一郎左歸館の趣。

『通せ。〳〵。』

こ電よりも急なる仰言に、一郎左は今更恐縮し、重き足を引摺り澄ぬ顏して平伏したり。

『如何ぢや。甚五左衛門に我等の意中解つたか。』

『その儀まここに殘念至極にござりまする。』

『甚五左の頭は縱に動かなんだか?。』

『御仰せの趣、一々述べましたる處、御芳志の段、甚五左衛門一生の譽にござりますれど、紀伊公御先約、義理人情の柵、如何にも絆し難く、七十人扶持、御近習。心に進まぬ乍ら承引ましたこ明白に云ひ放ち、中々心動かすべき術ござりませぬ。』

『それは致方がない。雪中夜寒。其方老體殊に御苦勞。炬燵でも命じて休むが可い。』

『使命を辱しめましたる儀、全く一郎左衛門不德にござります。』

『否々。左樣ではない。一郎左、其方の眼に山鹿甚五左、奈何映つたか。』
『天晴の人格、器量辯才、得難いものゝ存じまする。』
『紀伊公より待抱えられたの。』
『羨ましき限りにござりまする。』
『承れば、山鹿玄庵の申すには、主取りは命を預けるゝ同然の儀、誤つて暗君庸主を主人ゝ持たば、利器却つて身を毀つける。又逸まつて小祿に迷つて、仕途を急がば、左右の妨げに依つて大成を邪魔される。士自から、天分を守り、才能を樹てん人には首途の最初が第一、一歩の差は千里ゝかけ違ひを生ずるものぢや。千石取りの兵學者。二十餘歳の若者には過たりゝこの評判もある氣。なれども、我等の目より見れば、その望みはなほ遠慮に過ぐ。諸侯競つて國を護り、武備を怠らず、一朝の變に、後れを取らぬ心掛あらば其平生無事の時、名臣大器を養ふは畢竟、東照公百年の御知遇に酬ひ奉る譯ぢや。それに高が千石、それが高いの低いのゝ太平に狃れて、食祿を惜み、馬痩せ兵衰へ、武癈り、德墮す、百萬石の大名、柱梁の虫に一朝の風雨を知らぬ抔は餘りに近眼に過ぎるの、一郎左。何より惜しいの。』

豐後のみならず、甚五左に對する諸侯の熱望はいづれ劣るゝも見へざる也。
山鹿甚五左衛門、招聘の使者は立かはり入かはり、その淋しき門に出入しぬ。綻びそめたる紅梅の枝もたわゝに雪の降重りたるを、甚五左は、只眺めてありき。
『甚五左々々。』
ゝ呼かくるは父玄庵の聲なり。
『花を壓する新春の雪、まことに畫の樣ぢやの。』
『これは父上。』
ゝ甚五左は席を正して
『この景色何ゝも申されぬ面白味でありまする。』
『其方喜びの歌でも出來たかの。』
『歌はこの頃、確乎ゝ止めましてござりまする。』
『歌を止めた?。これは奇怪。歌は本朝の詩、廣田坦齋先生より授かつた和學殊に其方好みゝあつて、伊勢、大和の物語、百人一首三部抄、三代集なゞ暗に呑み込み、源語秘訣迄讀み習つた其方

歌は一年に千首の詠、人を驚かし、中には古人も及ばぬ名吟もあるに、その道捨てゝ顧みぬ心が解らぬ。」

と立庵は不機嫌なり。

『別にこれと申して仔細はござりませねど、吟咏は、心の底より出でゝ、手先の器用などには出來ませぬ。心の底に千萬首の歌まづ成りて、たま〳〵筆を下せば水の流るゝ如く、自づから調句を成すものでなくつてはなりませぬ。本源の志未だ定まらずして、徒らに文詞の上にのみ小才を用ゆることは慎みたいとの心の外ござりませぬ。』

『これは〳〵。歌學の講釋聞かされた。おかげで酒が醒めて、花も雪もなくなつた。』

と立庵は朝より、御酒の醉の眉間に染めたる茜色を拂ひ去る折はなきなり。

『御興を醒してまことに申譯はござりませぬ。』

『いや。其の方の說敎聞いて酒が醒る位の事は構はん。時に甚五左、今年其方の運勢は、この庭前の花のやうに多年の辛苦を凌ぎ來つて、蕾を發する折が來たと申して可い。』

と軒の梅ヶ枝を指し

『その梅花、芳芬を放つ春は來ながら、なほ、之を苛む雪は、枝もたわゝに重く降かゝつてゐるその雪の下より放つ美しき匂は、高く山鹿家を飾る。我等武士はたとへばこの梅の花。雪と戰ひ、風と戰ひ、淸く高き匂と香がなくてはならぬ。』

と今度は甚五左に酒が云はする大講義、一家の春は洋々として盡くることと無し。

二〇、紀州侯の要望拒絕

紀州公が甚五左衛門召抱の評判は一般の風說となり、羨望の的となりき。

豊後守もこの先約を如何ともする能はざりき。甚五左が自由なる生涯も、今やその藝を抱いて、

攀大籠の中に閉籠められんとする也。

立庵は、醒めたる如き、醉へるが如き渾沌たる間を夢むる如き調子にて、

『我等其方を飽まで一本立の山鹿甚五左衛門であらしたい。大名の腰巾着、五斗米に屈して、伸ぶべき筆頭草を、土足に蹂躙らしたくはないが何も浮世ぢや、窮屈な仕祿も假令ば雪を破る梅花の

句、いよ〳〵高いに比ぶべしぢや。世間の味も分つて可からう。なれど甚五左。』

と改たまりて

『人間大切なのは節義ぢや。その節義も糸瓜も、慾の爲めに悉く枉るのはこれ世の小人の事武士たるものゝ作法は、何時にてもこの腹十文字、言を立つること及の如く、道を行ふこと齎けるが如くでなくてはならぬ。紀伊侯は世に聞ゆる大藩賢主の譽もあらるゝ、その名主を、見臺の前に控えて、其方の舌先の孔孟の道に跪かしめるのは、學問の德。その前に額づいて、浮世がらの權柄を抛つ紀伊侯の人德も尊い、其方は紀伊侯の人物を奉つれば、其方學問の光は出る。廉恥を尊び、士道を立て、起居一切、古人の道を離れてはならぬ。あは、、、。又しても醉ふて管を卷た。立庵も年を取たの。時に甚五左。一寸相談がある。其方も立派な侍。これからは、親の膝下離れて堂々たる男一疋、そこで一つ此相談も大切ぢやが、尾畑先生御恩を山岳に比べ、其申さるゝこと何にても背くまいの。』

『これはきつい念入。何事かは存じませねど、先生の事、何にでも背きませぬ。』

『其相談な。親の口からは可笑いが、實は尾畑の娘御、其方に内儀にと周旋する人がある。』

と彼は云ひ憎げに、また盞を嘗めて

『その相談ぢや。一方紀州家の御近習、兵學の指南、儒學の先生。世に持囃される其方の身の固め、其の媒介役は又、其方の退引ならぬ男、右へ向ても左へ向いても其方無碍に斷り云へぬぞ！。』

と眼を光らして眞劍の顏付也。斯く云へる折しも、

尾畑勘兵衛に伴はれて來れるは、紀伊侯御家人布施左五右衛門なり。立庵と初對面の挨拶終るや甚五左に向つていと慇懃に、

『初めて御意得まする。御高名は夙に承はり敬慕此事にござりまする。我等推參の趣、尾畑殿より仔細申上げらるゝ筈、これなる品、大納言より御許への御土產の印、御收め下さらうなれば、幸福にござりまする。』

甚五左は、丁寧に應對し、

『紀伊侯御令名豫て敬慕に堪えず。一旦の志、御家中に加へらるゝこの事、身に取り、光榮至極にござりまする。』

『其事、實は其儀で參つた。』

と勘兵衛は膝を進め

『其許、今回紀伊侯の御悃誠により、大納言殿御家中と定つたところ、豐後守殿達ての御所望、然るに、紀伊公御先約の義を重んじ、豐後守殿折角の御志、遂げられず、いと御落膽の趣聞召され斯程迄の御熱望を無碍に御斷り申すこと、本意に非ず、武士は相身互なり。此方の望む球は、また人の望むところ、其大切さは同じ事、千石ならでは、膝を屈すまじき山鹿甚五左衛門を手中に收め天晴の先驅せんと思付いた紀伊侯の御熱心は、則ち天下の英材を家中にして阿部家の譽を立てやうとせらるゝのも、同じ譯、我等が先約の爲めとあつて、豐後殿御熱望を斥くること、いかにも不本意、山鹿殿御心中篤と聞取り、改めて豐後守殿御望みに任せ、甚五左衛門直ちに山鹿家よりといふもよし、又は一たび紀伊大納言家中となり、豐後守殿御意に進めらるゝも可し。其途は二つなれど其心は一つ、其許の望に任せよとの儀にござる。その出世の首途を祝ふこの一品は、紀伊侯傳家の御名刀、水も滴る大業物、一點曇ない大納言殿心の底に、其許、清い心を宿し阿部豐後守殿の望みに叶はせらるゝ樣にとの御芳志、忝くお受あつては如何でござるの。』

甚五左は座を滑りて、

『これはまた近頃御挨拶を承はるものかな、我等素より仕官の志、露ほどもなきに拘はらず、小栗仁右衛門殿、參られ、紀伊侯の御知遇の段々、我意も透ほし兼ねる仕誼に立到り、我等不才を盡す覺悟いたしたる丈の事、それが、阿部老中の御望みに代させ、我等を苦衷より救はせ玉ふとの御芳志、いや、我等は紀伊侯家來異存はならぬ、既に御約束申上げたる上は、この軀、紀伊侯の手の中にある。さりながら、某も、右の次第をも申上げ、豐後守殿御所望御斷り申上げたる上は、二心ござりませぬ。』

甚五左は屹然として、紀伊侯の妥協を廢したり、素より其贈り物を受くべき筈はなかりき。唯、紀伊侯當時の苦心は察せざるに非ず。阿部老中に對する謙讓の美德を損せざらんと思はゞ、甚五左は、快く豐後守の要請を容れざるべからず、豐後の熱き手は、彼の來りて投ぜんことを待てるなり

默然として聞き居たる佐五右衛門は

『一諾を重んぜらるゝ御志、今更感服の外ござりませぬ。もと〳〵紀伊侯御所望、恐れ乍ら、御許、その御一言にござりまする。阿部殿の望ませらるゝところも、其移さるゝ御志に外ならぬこと天晴の御心懸。勿論、紀伊侯御手中のものに在せらるれども、差圖がましく、豐後に行けとの仰せ

は萬々ございませぬ。まして、御許、紀伊公に許されたと申せど未だ主從と申すではございぬ。申さば自由の御身の上、今の場合紀伊侯の達ての御願ひとあつて、豐後殿御望み叶はせらるゝ樣偏に願上まする。」

「紀伊侯御謙讓、物に拘はらせられぬ御美德、恐多き儀にございまする。これに拘らず、彼是申上ぐるは相濟まざる儀ながら、實は少しく仔細ございまして、老中家仕官の事は假令紀伊侯御招きあらせずとも、私、心進みませねば進退は私の心任せにお許し願はしう存じまする。」

彼の心は既に決したり。甚五左の望むところは、唯、自由にありき。その翼を無限際の大空に伸べて、飽まで江湖の氣を呼吸せんとするにありき。

紀州藩の招聘にも、豐後守の懇囑をも共に斥けて、悠々處士の生涯に入れる山鹿甚五左衛門を麾下に招かんとの望みは諸侯の間に再び大なる好奇心を挑發せしめたり。

又しても、尾畑勘兵衛は、其秀拔なる舊門下生にして今は、一派の頭領、先生たる山鹿甚五左衛門の爲めに、仕官の途を拓らくべき使命を帶ぶることゝなれり。之を求むるものは誰ぞ、百萬石の大封侯北陸の雄鎭、野には穰々たる萬項の田、海には限なき魚介食塩、山海の厚祿を控えて富力比ひなき前田家なり。渺たる一書生にして、天下の權威を掌中に弄し、稀代の英主を膝下に蹲かさんとする甚五左とは如何なるものぞと、未だ前田侯の相談野のものとも山のものとも判ぜざる先よりして、甚五左の評判は、藩中士女の噂に上れるなり。

「……、少々御懇談の儀候間、直樣御越相待入る……。」

旨の手書は勘兵衛の手より發せられ、朝まだ早き甚五左が靜かなる夢を驚がしたり。

甚五左衛門は、その文句のあまりに呆氣なく、簡單なるより、勘兵衛の招きの何の意味なるやを知るに苦しみたれど、兎も角師の召なり、背くべからず、早速參上の旨使のものを返して、衣裳を整へ殊に大事の大小を撰み佩き、袴の股立高く凛たる姿を見惚る母に一禮して勘兵衛宅へ赴きぬ。

案内を乞へば、

「はい。」

と優しき聲して玄關に出迎たるは、しばらく相逢はぬ間に、いと大人びて、萬長たる尾畑家の名璧とも愛でらるゝ靜枝なり。

この刹那、甚五左衛門は、はつと胸を打たれき。さては我を招き寄せて、靜枝君のことをや說か

んとするにやあらむ。思ひ做しにや殊更らに、その粧すら常より心ある狀も可笑しく、取次ぐ人もなきに非るに態と娘を用ゐたるにあらむ。されど〳〵、我意は既に決せり。いつかなこと、大磐石いかなることありても、わが首は横の外振る術を知らず。

奥の間には、勘兵衛、いと待遠しげなり。甚五左の姿を見るや、

『これは〳〵、速刻御運び下され忝ない。實は此方より參上の筈なれども、今日は緩々打解けて話したい義もあり、旁々席を清め、室を拂つてお待した譯ぢや。』

と例に似ぬ愛嬌に、甚五左は小氣味惡く感じ乍ら、

『何御用歟は存じませねど、私こそお目に懸り、久々振に、御意見伺ひたいと存じ居りました折柄御使藏きましたる次第、何より喜ばしう存じまする。實は近頃雜學多岐、益不審の儀多く、一々先生御指圖相受度ことのみ重りまする。』

『いや、我等こそ、年と共に、氣根も衰へ果てゝ、一向物の役には立たぬ。其方築城圖面數多く丹誠あるこの事、特志唯々感じ入る、聖學に就ての新論、大部の御著述、出來上らばそれも拜見したい。』

『中々、お目に懸る程のものにはござりませねど、儒學の本末亂れて、後人附會の說多く、時務に曲解して、便佞の器具と相成りまするこそ、學問の爲めに、誠に悲しむべき事と存じまする。』

『さうぢや、全く御說の通ぢや、孔孟の道を弄ぶ外道の輩の殖るには、困つたものぢや。』

と勘兵衛は頻りに頷き、手づから茶菓を勸めて、良久くして、

『時に山鹿殿、其方頓と慾無う見ゆるが、又茲に一つ其方の心聞かねばならぬ儀出來した。遠慮なう申出られたい。』

さてこそ！と甚五左は心の中に思ひながら、

『何なりとも仰せられたうござりまする。』

『實は豫ねて屢々、我等が許の松平越前守殿より其方望みの祿高を以て聘したいことある。我等も其方なり、玄庵殿なりの志望をよく知つて、斷つたが、たつての御依賴最早や默し難く、今日御出懸け願つた譯で御座る。どうぢやの、一つ可い加減に身極めをしては何うかの』

と甚五左の顏の表情如何と見やりながらいへば、甚五左は、言下に之を拒否すべき決心をなしたれども、流石に物言ふことは靜かにて

『何時もながら、親身に優る御芳情、不束の身に餘る光榮にござりまするが、私一身、父と相談せねば何等のお答もいたし兼ねまする。』

二、由井正雪との會談

さま〴〵の浮世話に打興じたる甚五左、黄昏の頃、御茶の水橋にさしかゝりぬ。

大勢の伴打つれたる侍の、輿に打乘つて、いと揚々と此方に來蒐るに逢ひぬ

諸侯にはあらず。而かもかゝる大業なる態度は果して何者?。

甚五左は我にもあらで、佇めり。

『ヤ、山鹿氏!!。』

凛たる聲は、輿籠の中より、伴廻を驚かして響き渡りぬ。

不思議なり。幾年前、われ父に伴はれて、この橋近く來かゝりし頃、馬上の丈夫の、父に會釋せるを見たるが、父は、我に教えて彼こそ、名ある兵學の先生、由井正雪なり、と後にて我に教示せり。その人なり。その顏。その樣子。年と共に老たれば、今は見違ふばかりなれど、何處となく精悍の氣は、眉宇の間に漂ひぬ。

『かく申さるゝは何方にござりまする。』

『はて、御許。深覆染のもの。いざ。』

と麾きて

『途中突然にお姓名呼びまるらせ、申樣なき御無禮、なれども、今仔細ござつて寸刻も大事。實は高門に馳せ參じたき途中圖らず、お目にかゝつたのは、天の與へ。これより何處へお出掛でござるかの。』

『尾畑先生許お招きに預り、御酒頂戴、酩酊仕り、寒風に面を吹かし乍ら、ぶら〴〵と歸路、我等よりこそ、實は一度高門に御伺候申上ぐる筈の處を、性來の疎懶、門外の花をも月をも無頓着。それゆへ心ならずも……。』

『いや。その御無音はお互の事。この後共御心易う思召れたい。時に御許、少時我等に耳藉れたい。否、御許は天下の名儒、兵學の大家。御腹藏なく、我等の心の惑を解下されたい儀のござつての。』

と暫らく首を傾けて居たりしが、はたと膝を打ち、

『幸ひ旅籠町に、我等身寄のものござる。御迷惑ながら、一寸お伴願ひたい。』

と彼の言には是非勸兵衛を要する色あり〳〵と見えき。

正雪と輿籠を共にしたる山鹿甚五左衛門は、

『その御用と仰あるは如何樣の儀にござりまする。』

『天下の亂鎭まりて、大平打つゞきて、士風地に墮ち、風流者は邪路に走り、かくては、德川家百年の基は搖たりと申すべきである。治に居つて亂を忘れざること治世の大本。其本を正さんとするのが某の望。今、廣き江戸中を見渡し、共に大事を談ずるものは、實に晨天の星の如し。何れかよく物の明暗を辨まへ候ものぞ。かく申さば、御許に詠びたりとの誹も候はんなれど、我等、あらゆる江戸の人物を探りて此大節を語り合んものは御身の外にない。林、山崎の輩、學問はこれ漢唐輝渡る我日の本の國威を知らずして、唐人の本の虫。かゝる腐儒が活學に差出口を申し、又は、今殿中、我物顏に振舞ふ權臣共、其昔、刀槍で取つた天下の事を夢るも忌はず、酒臭い肉蒲團にくるまつて、利を是事とする徒。かゝるものが上御法度を司り、下々を誅求するは、以ての外の儀ぢ

や。』

と彼の聲は、稍高く、秀だる獄骨をつゝむ、蒼白き頰も、熱し來つて、やゝ紅味を帶びたり。

『その德川治世の長し短かしは、御身等にとりては、何等の係はござるまい。學問は上下天地に亘り、自由の翼を張て、上三千歲の人の法ではござりませぬか。』

『うむ。その事。御許も其處にお氣付きか。知己の一言、正雪、身に泌み〴〵て嬉しい。實の處上に良政あれば、良政を輔け、下に惡聲あれば、惡聲を除き、結局、人の道の坦々たる正路を歩みて、何者の權勢にも怯ず恐れず行くが我等學人の生命、然るに、今の儒者と申すもの、多くは、これ勢家の狗。學問を曲て、當路に媚る外、何の能もござらぬ。かゝる腐れ學者を千萬人養ふとも日の本六十餘州の民率に一滴の惠の露もかゝらぬ。』

と彼の聲は、俄かに、深淵に入る雨よりも細く低く沈みて、ほとんど聞取り得ざらんとす。

手眞似して

『その我等の胸の火、燃ゆる火！、それを世間が何と見る。君子危きに近よらず、すべてを御許の胸の中に。な。』

甚五左は默然として、唯首肯くのみ。その玻璃の如き鋭ごき眼の光は、烱々として輝きて正雪の心を射んばかりなり。

二二、松平越中守に面謁

山鹿殿御着邸この前觸は松平越中守屋敷の隅より隅に傳はりたりき。

正面玄關に家老の面々、額を疊に擦を倒にして迎へぬ。主人越中守も恭々しくお出迎あり。

甚五左は、まだ廿五歳の若侫ながら、諸侯の禮遇は、いづれも兵學の師としての敬意を盡されたり。就中越中守は、深く山鹿流兵法を篤信し、甚五左に對しては、ほとんど末弟子の、大先生として歡待到らざる處なき也。

甚五左は、導びかれて、大廣間の上座に請ぜられ、屢々辭退したれども、師弟の道昔より嚴として一糸の紊を許さずして、松平越中は遙かに末座に坐し、近侍をも近づけしめず、謹んで、甚五左衛門の說に耳を傾けらるゝが例なり。

甚五左衛門はまづ

『過日は小生、學問兵學の義に對、御遠慮なく申上げましたる處、御得心遊ばされ、何より大慶に存じまする、平生よりの深き御心懸けに依り、直ちに兵學の堂奥に到られ、御腹笥十分の御糧養相叶ましたる儀、小生面目次第もございませぬ。則ち誓狀遂げさせられ甲州の兵法、活殺の道、死生の要、一氣相傳の法則、天稟を待て、光輝を發し、山鹿流兵法の外なる山鹿流兵法、御心の底に達きましたること申すもの、人は活物、法は死物、わづかに人に依つて、活躍飛動いたしまする。されば小器は小用し、大器は大用し、その容るゝ器の大小廣狹に依り、活く働く道にも高下深淺が出來まする。我等誓狀御許申上げたる諸侯數あれど、一擧手の力にて、此難答飛び越え、其諦に到られたる御前の靈活力は、深く感服いたしまする。』

『これはまた意外の御褒詞を承るものかな。我等の鈍根、もし、幾千か兵學の微雲を覗き得たりとすれば、其眼炬の如く其心海の如く、其學問山より高き御許の悟入顯脫の一言一句、悉く我等心扉を披く力の外はございませぬ。』

と其言語さへあらゆる敬詞を用ゐられたるさへあるに、不圖見れば、床間の一幅は、曾つて、初

めて越中守殿、對面の折、差出されし扉面に記したる、「正く浩瀚」と記されたる四文字也。

甚五左衛門の面には、謙遜の色滿ち

「小生共、下賤の儒生が、走り事を、かく美くしく御表具なされ、其事すら過分の事と存じますわけて、我等御優遇の思召より、この惡筆、御床を穢しまいらせ只管公兆の義に御座ります。」

「否、これ等何の仔細ない事、平生尊信する師の面影を偲ぶ其水莖の跡を、今日は殊更その人と共に、掲げて、この心の誠を致すことは我等の所望。」

「その師と仰がるゝには、小生なごは、中々の義大江戸の廣き、人材を求むれば林のやうにございますする。」

「時に御事、學問文章、殊には兵學の師範、門下三千の多きに及び、諸侯の尊敬淺からざるものに由井正雪と申す仁ございて、頻りに、孔孟の道を論じ、天下の法度にも嘴を容れ、江戸學儒の學說を罵り、山崎派の學問を腐儒の偏見と申し斥け、德川治世太平の風に生れて、世は今にも、又戰國の狀に返らん抔と風說すると申す事、諸侯の中には、彼の巧辯、異說に耳を傾け、心を動かすものも少なからざる由、これ等の邪說起るは兎も角學界の不祥事なりと思召されませぬか。」

「その由井正雪と申すもの、甚五左衛門一面の識もございまする。」

「はて、では、由井正雪の門生共が、申し囃す噂のこりゞゝ、全く影も火もないことではござらぬか。」

と越中守は獨語ちたまひしが、その面にはやゝ不安の色の漂ひて見へき。

「何とか世上の取沙汰ばしお耳になされましてござりまするか。」

「さればこそ、正雪が學問は、深淵の底よりも深く、その滄々たる千尋の水底には人を呪ふ蛟龍の蟠り居る樣ぢやと、人も云ふ。その正雪が近頃、甲州流の達人、山鹿甚五左衛門と頻りに深夜往來なし居る由洩承り、心痛いたし居つた。何を人の浮草物語、心にかける程の價値も無いが、今承れば、先生、御口づから、正雪と御交も在らるゝとか……。」

「イヤなに、交と申す程の事ではござりませぬ。何時ぞや、尾畑先生訪れての歸路、某を往來にて引止め、仔細ありげの物語、强て輿を共にこの事、辭み兼ねて膝突合はし備さに、其心の底を、粗く短き彼の言葉にて、察し申せし丈の事供廻いかめしく、江戸の學者を一飲にした樣な話煙に捲れました。彼の氣象は、世の人々の申程の鄙げもなく、その目射すところに高き星は輝いて居りま

すれど其足は、薄氷、その脚下には、命を咀ふ巨巖がござりまする。」

『我等も彼の風貌を瞥見に及んだ。眉の迫り、眼の輝き、いかにも、凶相。と申せば、人疑ひの誹もあらんなれど、大御所三代の政治向に、及向ふもの、爪と牙を磨いて、城下に蟠り居ることは彼の額に刻まれて居る。』

と越中守殿の老眼は、少しく潤みたり。

越中守は當年六十二歳。双鬢既に蒲白。蓬々として、枯野の薄に似たりと云はんよりは、銀絲鼎かに、滋味に富める頬は豊にして、言語鮮かに、物いひに愛嬌あり。

彼の眞面目なる氣風は、將軍家光の深く信頼する處なり。夙に山鹿甚五左衛門の學德を慕ひ、孫にも似たらん少年を慕ふこと師父に似たり。

その甚五左衛門が、幕府の蛇蝎視せる由井正雪と相識れるのみか、やゝもすれば危險視せられた る彼と結托して、何事をか密議を凝せると聞きては、甚だ心痛に堪ざらん風あり。

『その深淵の蛟龍も、いかなる働をいたしまするか、小生の見たるは片鱗乍ら左程のものとも思はれませぬ、風の音にも驚かれぬることは恐れながら、お上の杞憂でござりまする。』

『唯、彼の落付かぬ風の目付、其尖つた頤、あの眉、我等の刀の鍔は鳴る。』

と不安の色は彼の頬の上に溢れて見えき。

甚五左は態と左あらぬ體に

『その儀小生、刀にかけて、目的外れはござりませぬ。大盤を打つ石は蓼々の響を爲せども、濁流に沈む石は、姿も見えませぬ。彼を掀ぐるも彼一時、風を起すも彼一時、水澄めば月は同じく水の面に宿る、徳川家御大徳上に在せば、大月雲を拂つて直ちに、千草の露にも輝きまする。』

甚五左は、正雪を濁流に投ぜられたる小石に比べたり、彼の打たんとする鼓は破れたる革なり、假令之を鞭つとも其響は、戸外にも洩れまじと悠々たる態に、北陸道一の大名、尾畑流の高足、山鹿甚五左の崇拜者たる老侯松平越中の眉ははじめて暢びたり。

二三、師北條安房守來訪

春も闌はに、尾畑家の庭に自慢の枝垂櫻は、今日を盛に咲きほこりぬ。其花を見んとにもあらで

閉籠たる一間に、勘兵衛と相對せるは、北條安房なり。

『その儀……何とか……外に……。』

『外に良い法はござるまい。甚五左衛門築城圖を多く取集め、自から一家の說もある。彼を呼寄せ、相談いたすこと何よりの得策に思はれる。』

安房は、冷然として答も澁り

『唯少年輩の山鹿に相談する事、いかにも我々一門の名折かと存じまする。』

『なれども、今度築城圖の御下名は、天下の學者中より、特に我等を見抽れての御仰せなれば、若し、その圖面、世間の物共より彼是の批難を蒙ることあらば、獨り、我等の耻辱では無く、かく思ひ立たせられた將軍家の御名も出る。山鹿甚五左は、申さば內々、彼が丹誠して集めた圖取書により、額を鳩めて、一機軸を出さん工夫を第一と存ずる。』

勘兵衛は、虛心平氣なり。築城術に精しき山鹿甚五左衛門を招きて、其意見を徵することは、決して恥しからざる事なるのみならず、精細巧妙を極めたる圖面の製作を、其高足なる安房と甚五左この手に成し上げんことは最も其望む處なりし也。

さりながら、安房は流石に、之に躊躇の色なきに非ざりき。彼は其初め、甚五左の爲めには兵學指南の先輩なり。然るに、彼の名は、森々たる老木の茂に比ぶべき尾畑先生の影に隱れて、何の顯はる處無きに比し、山鹿甚五左衛門は、何時しか、江戸中に肩を比ぶべきもの無く師父たる尾畑勘兵衛を超えて、諸侯の其門に弟子の禮を取るもの幾十人、門下既に千餘、出づるに輿籠あり、入るに茵あり、堂々として、兵學の大家となりしなれば、平生安房の心は平かならざりき。

その後進生たる山鹿甚五左衛門の許に屈し辭を卑してこれに築城圖の指敎を受けんことは、いかに心苦しく感じたる事なりけむ。彼の面には、熱湯を呑むに似たる苦痛の色の滿たり。

甚五左衛門は、昨日來、病みて床にありき。枕頭には、堆積せる書類の亂次なく取散らせるを、彼は、手を伸て讀み耽り居たるに、母の聲に、はつと起き上らんとするを

『無理せぬが可い、加減は少し宜しいかの。』

『はい、お蔭で頭痛も餘程輕うなりました。風邪の氣味と覺えまする。』

甚五左は母が憂を慮りて態と左もなき狀を裝へども、額には、悶の色見えたり。

『唯今珍らしいお來客。其方打臥つて居りますれば、却つて失禮と存じ、その旨申上げたれども

是非達つてお目に懸りたいこの仰せぢや。」

「珍客こは何方でござります。」

「北條樣、珍らしくお伴も召されず、唯一人、お忍び姿ぢや。」

「北條殿？。」

こ甚五左は、首を傾けしが

「書齋へお通し申して下さいまし。」

「其方、病氣に障りはあるまいか。」

「いゑ、病は氣のものでござりまする。この精神にて打勝まする。」

こ彼は立上り、自づから衣裳を整へ、離れの書齋に入れば、安房守は端然こして早や在り。下手に座りて、手を叉きて正面の額を眺め居たりき。

「これはお珍らしい、よくこそ茅屋にお越し下さいました。」

「承れば御加減勝れられざるよし。遠つてお面會願上げ、不躾の段、平に御許を願ひたい。」

「これは又他人行儀、假令いかな重病にござりましても、先生の御越を喜んでお迎ひ申上げます

る。」

こ甚五左は笑ひながら

「先生には近來殊にお肥の樣に見えまする。」

「いや、これで仲々身を削るやうな心配事もござつて、段々痩衰へる。年よりいへば、まだ〳〵尾畑先生の足許へも届かねど、心は早や墳墓の土の樣でな。」

「併し過日、越中樣御邸にて仕合ひの御飛入、壯快に感じましてござりまする。莊子御講義の新說、山崎先生以後の大儒說この評判にござりまする。」

「これは手厳い。兵學こそ多少の覺はあれ、儒學に至つては、我等のはほんの人眞似、新說なこゝは、冗談にも程がある……。」

こ彼は澁茶に咽喉を潤ほして

「時に本日、態々貴邸を煩はしたるは餘の儀に非ず、御許の智慧を拜借いたしたい儀のござりまする。」

こ彼は、膝を進ませ、凝乎こ甚五左の顔をまじ〳〵眺め入りぬ。

安房は、其不平に堪えざらん心外の心持を忍びて、徐ろに口を開き、將軍家より安房を召され、攻城野戰の事さま〴〵の質問の後、彼をして、築城圖の調製を命ぜられたるより、安房はこの面目ある依托に負くべくもあらねば、謹んでお受して御座を下り、これを尾畑勘兵衛に謀りたるに、勘兵衛は再び彼をして、山鹿甚五左衛門に謀るべしと主張せしことを以つて、今日態々甚五左の邸を訪ひたることを申出でたり。

安房も當時既に甲州流兵學の大家を以て許されたる人也。後輩にして先生たる甚五左衛門の前に膝を屈するは彼の忍びざるところなりしやもとよりいふを待たざるべし。

「これは又何かと存じますれば、身に餘る大事、到底も我等の及ぶところにはござりませぬ。」

「いや、其の遠慮こそ却つて迷惑。智者に下り、賢者に敎を請ふは武道の習ひ、決して、御辭退なく、御許、御精勵籠められたる築城の御思案承りたいものでござる。」

「ではござりますれど、一代の軍學者、殊には我等の先生に對ひまして、我等が彼是と申上ぐる事は、甚以つて潛越至極其儀は平に御許を願ひまする。」

「その師弟は昔の事、今は、御許も立派な山鹿流法兵の先生、わけて築城工學の事は、日本廣しといへども御許に及ぶものは無い。日本一の斯道の先生に對し一兵學の手引を申上げたばかりの安房が、いつまでも、先生振りは、人が聽ても可笑しい。我等こそ、御許の謙遜に對して彼是と高慢を申して面恥かしい至ぢや。それは左樣として、特に、我等の望を入れられ、其こと申すも如何なれども、是非、我等をお助け下され、安房守が、君前の手柄とも相成るやうお取計ひ願上まする。」

「左樣の儀にござりますれば、我等淺學屹度、何かのお役に立ちまする心懸もござりまする。」

「早速御承諾下されて忝ない。さて其方法と申すは如何樣に仕るが至當で御座らうか。」

「天下の形勢、昨日は今日に非ず、今日又きのふにも非ねば、城を築き、砦を置も自づから作法の相違がござりまする。我等の存じまするは、地の利、人の和を得るの方法が第一。さてその雛形もさま〴〵ござりまする。」

と、さし出せし書類は山の如く、安房守の前に堆く積れたるに、彼は目を圓ふして、甚五左の面を見戍りぬ。

安房守の驕慢なる心持も、山鹿甚五左衛門がこの研究的態度に對しては、何の加ふべき言葉も知らざるなりき。今はたゞいたづらに甚五左衛門が城砦の智識のいと深く且廣きに呆れたるが、彼は懇々、製圖の事を甚五左に頼みながら、其門を出づるや、彼の心の底には、早くも大なる恐怖は、蛇の如き邪推を伴ふて來りぬ。

『甚五左の奴。何時の間にか、攻城野戰の術を研き、建城保壘の法を究め居る、その心の中には何事かを畜き居るに相違無い。はて扨、油斷のならぬ曲學者！。』

と獨語ちつゝ、路傍の石に躓きて、はッと顔色を變じぬ。流石に、其良心に咎むる處はありけむ

甚五左衛門は安房守を送り出せし後、書齋に入りぬ。近頃、入門の弟子夥しくして、父の玄庵と別居せり。

『先生、まだお寢でごりざりませぬか。』

『オ、田宮其方こそまだ眠らずに居たのか。』

『先生のお居間に煌々と燈火の射してある間は私は決して床には入りませぬ』

『あハ……。其方。隨分究屈なことをいふな。左樣いふ形ばかりの事を我等は咎め立てはせぬ、早く寢るが可い。』

甚五左衛門は、云ひ放ちて、その眼はまた書物の上を廻りぬ。

その座をめぐりて、散亂したるは、築圖面なり。山に凭りたるものは塀を高ふし川に臨めるものは濠を深ふし、攻むるは難く、守るには易き、さま〴〵の圖面を、彼や是やと手に取上げ一心不亂なる其姿を朧ろに射す庭の月、櫻花の雲に搖ぎて、藹として眠らんとするなり。

『甚五左！。』

其聲は、甚五左をして襟を正しうせしめぬ。

『は、は。』

『まだ寢らいでか、疲れもせしに、早く眠るが可い。』

『はい。直に寢みまする。』

と彼は、母の延べんとする布團を、手繰るやうにして、自から之を展べ、

『ではお先に御免蒙りまする。』

母の姿の室の外に出づるを見るや、むつくと起上りて、再び彼の手は、座右に散亂せる城砦見取圖の上に落ちぬ。やがて彼が其頭を擡げて、天井を仰ぎ見、眼を閉ぢて

『ふッ。』

と深き息を吹ける時は、彼の全身の、活氣は、其身體をめぐりて、圖取の算段、悉く成竹を成せる時なりき。

『面白い〳〵。天下の堅城を、胸中に構え、百萬の兵を、眼前に描いて、手は自つから動き、心は自づから進む。渺たるこの浪宅に、浩然の大氣象、我の外に誰か我を知るべき、この紙上の城廓殿として現れ來る時、我等の本望はこの上無い。』

と莞爾として、夢中になれる時こそ。實に甚五左門にとりては南面百城に代ゆべき價ある境涯なりき。

夜は丑滿の更けたる書樓に、甚五左がこの得意の微笑を浮べたる時、安房守の夢は頻りに襲はれ幾たびか輾轉として寢返りを打ちたり、悶々たる其胸底に、實に恐るべき大なる詭計は畫かれたるなりき。

甚五左衛門が、心を籠めて作り上げたる築城見取圖は之を陰陽に分ち、山砦、土壘、さま〴〵の方法をもて、いと完全なるものなりき。

安房は之を一閲するや、中心の欣び禁じ得ざるものあり。

『これは見事の出來、我等お耻しながらこの年まで、群書に目をさらしたれど、これ程細やかに立派に出來た築城見取圖見たことは無い、お上に於かせられても定めて御滿足、山鹿氏、これ偏に御許研學の花、果を結んだと申すものぢや。これ獨り我等の手柄にはせぬ。』

『御褒詞に預り、唯々、赧顏の至りに御座りまする。未熟の私、ほんの其場の考へつき、疵だらけにござりまする。』

『否々、思ひも付かぬ細かい點にまで心つけられ、何處を見ても一點の抜目も無い、これこそ、完全無缺と申すものぢや。』

と、年若き甚五左の前に額をつけんばかりの喜びなり。

安房も決して、無能の軍學者にはあらざりき。尾畑流兵法の達人として、相當の地位を有するも

のなれども、彼は山鹿甚五左衛門に對しては、ほとんど、何の權威なきまでに、其心中の誇りは亡びたるぞ氣の毒なる。

『それでは、私はこれにて御暇いたしまする。』

と立上らんとする甚五左の袂を押へて

『それでは餘り愛想が無い。偶のお越ぢや。一献さし上げたい。』

と酒肴を命じて、

『さ、この盞これ大御所より直々の賜、我家武運唯一の守護ぢや。これにて一献過されい。』

『有難く頂戴いたしまする。なれども、私、この方は全くの無頂法、この大盞では過ぎまする。』

『今日は、我等無上に嬉しい日出度い日、存分醉ふて下されば、介抱は我等がする。』

と早、安房守は醉へるが如き狀にて、又もや、圖面取擴げ

『全く上出來、一點の隙も無い。これでこそ、日本一の兵學者の考案たるに恥ぬ。』

と獨語ちつゝ、フト甚五左の面を見れば端然たる貌して、彼は床の畫幅を眺め居たりき。

心憎きまで取澄したる甚五左の面にはあらゆる事に安心の樣見えたり。彼にはほとんど何等內心の疑惧、不滿、不足なきが如く見ゆ。學問の自信、品性の輝き立派なる心掛は、彼の身邊をめぐりて、千丈の巖の上に立てるが如かりき。

安房は自づから、其威嚴に蹴落さるゝを感じたりき。正にこれ恐ろしき一大敵國なりとの猜忌の心は、彼を襲ひたりしも、彼もさるものなり。左あらぬ體に、笑顏に自らをかくして

『山鹿ぞの、も一献如何でござる。』

『さて酒の上と思はれんも心苦しいが、御許程の腕前ありながら、徒らに糟櫪に伏して、處士の生活に逐はるゝも、これこそ、寶の持ち腐れと申すもの、これぞといふ雄藩にて、晴れの大業を試みらるゝ道は無いか。御許に其志あれば、不肖ながら、我等、如何樣の儀も、身の力及ぶ限りは！』

『その思召は、千萬忝うござりますれど、仕緣乏しい身。敢へてこの上の望みを過分と心得まする。』

『それは又謙遜至極。』

と安房は、盞を更らに干して、甚五左衛門に酌し

『今世の中を見渡すに、まことに、群盲象を撫するの形、戰國の氣風漸く熄んで、太平の酒に醉

ふものは、長刀を化下に舞すをも辭せず。この狀態、大御所の御遺訓にも背き戻る事のみ多い。太閤御治世僅かに二世。群臣覇を爭ひ、功を競ふて關ヶ原の一戰、いまなほ血腥い心地がする、中には、ひそかに、關白家に心を寄するもの無しとも申されず、大切の場合に方り、目前の事にのみ心を奪はれ、蝶花の戯れに、士丈夫の氣風全く地に墮ちたと申すもの、御許いかゞ感ぜらる。』

『武士道の光輝は、全く地を拂つて、世は常闇にござりまする。』

『その常闇を照す眞の光に成る心在さば御許、まづ四方遊說、劍舌兩道、文武の花を咲かす誠がある筈。唯、世の中を面倒う思ふて、世棄人同然の境界に一身の樂地をのみ心掛けあるのが我等には解し難い。』

『一身の樂地?。あハ……。それ程の呑氣は、我等夢にもござりませぬ。全く齷齪?生涯。及を渡るやうな暮しにござりまする。仰せの如く、士風地に墮ちたとも思はれる。なれども、其士風の弛頽は、誰の罪にござりませうか。』

と甚五左は膝を進め

『岡山藩の熊澤某。學を江州の中江先生に受けたるもの、近頃、其著書に、士分のことを論じてござりまする。』

『うむ、其中江先生は陽明派の碩學、熊澤了介と申すもの、其高足。その了介が何と申しましたな、何れ奇を好む輩への人氣取りに、偏頗の儒論學說などは我等の耳を傾くることすら好まぬ儀でござらぬか。』

『學問にも死活兩面ござりまする。』

甚五左は、熊澤了介を蔑まれて、自から輕侮されたる如く感じたりき。

『大方の學問は、朱儒の死法を死守する丈の事、其人愈出でゝ愈亂雜、偏狹孔孟の志を俗人の心持にいたし了まする。たま/〵活眼の士出でゝ、活學を傳へますれば、こゝにはじめて、活きたる學問が出來まする假令ば、其中江先生……。』

と大に論ぜんとする矢先、

『一寸!。』

と安房は手もて之を制し、

『その論法面白い。なれども……。』

と彼は聲を潜めて

『一概に奇論として、世の間に通用せぬ議論と見られんは、學者志を當世に行ふものゝ道では無い。時が悪い。時機が悪い！。』

と彼は、只管に甚五左の舌鋒を避けんとしながら、ひそかに甚五左衛門が、學問の危徑に赴き行かんとする氣色を見んとせり。

北條安房守、城取圖面、陰陽兩圖の製作を山鹿甚五左に托せりこの噂は、忽ち擴まりたれば、安房守も面目を失ふこと少なからざりき。素々共案に成れるものを、山鹿獨が我物顔に、吹聽すること、いかにも心憎き仕打かなと、安房守の心は平かならざりしも、焉んぞ知らん。その噂の火元は山鹿門生の田宮一之進が、師匠自慢の到る處にて吹き立てるなりき。

かくと知りたる甚五左の迷惑は、立腹を伴なつて、烈火の如き怒は、田宮一之進の頭上に落ちかゝりぬ。

『田宮！田宮！。』

と甚五左の、高き聲は絶えてなき恐ろしの權幕なりき。

『はい。』

と跪きたる田宮の顔は、血の氣も失せてわな〳〵と慄へる手は、膝にも安んぜず。

『其方、怪からぬ事、傳え廻る。口の輕い奴ぢや。安房殿、城取作法は、忝くも將軍家の御指圖に依らせ、我等は、ホンの下意見申述たる丈の事、然るに、其方かの圖面、我等が、安房殿の功名を奪ひたる樣申觸らし、師匠を小人下郎に誹らせ、安房殿を卑怯の輩と嗤はせ、天にも地にも、身の容れ場無いまでに迷惑させたとあつては、山鹿甚五左衛門の一分は相立たぬ。其方有の儘、我等に申して見るが可い。』

『まことに畏入りましてござりまする。』

『畏入つたでは解らぬ。あの作法圖寫し持ち歩いて、何か高慢を申散らしたと聞く眞か。』

『實は、先生の御丹誠を、安房殿、獨りの功名のやうに、世間では取沙汰、あまりの悔しさに、あれは我等師匠、山鹿先生の御立案ぢやと、尾畑殿、御門弟子の中で一度饒舌つて、やつ失敗と存じましたれど、最後、矢は弦を放れてござります。』

『それが不可ぬ。左樣いふ了見では、到底立派な武士にはなれぬ。そも〳〵あの城取作法圖、我

等、極々の内證にて、家人にも猥りに書齋へ入つてはならぬと申付けたるに、其方、どうしてあれを窃み見た？。」

『誠に恐入りましてござりまする。』

『又恐入ましてゞは困る、そも〳〵諸侯の城砦は、軍の秘密、その築城圖は、取も直さず、秘中の秘物、かゝる秘事を、窃見て、寫取るなど申すことが、第一武士の作法ではない。又人の爲めに頼まれて爲したる事は、一生の秘密、然るに、それを何人かの口より洩るれば、洩らせるものゝ罪は素より、かゝる由なき流言を出せし、本人も不德、その不德は、我等士人の最も耻る所ぢや。』

『爾後吃度心得まする。』

『前事は逐ふべからず、この後は心得るが可い。』

と突と座を立ちて、

『では退れ。』

とその言葉も平生にかへりて、面上一點の雲もなく大小取て出で行かんとす。

『お出ましでござりまするか。』

『あ。一寸、安房殿へお詫に參る。其方は氣に懸んでも可い。唯、謹めよ。』

二五、赤穗侯に抱へらるる

『山鹿甚五左衛門殿、御越しでござりまする。』

『これはよい處へ、直ぐお通しするが可い。』

尾畑勘兵衛は、甚五左衛門をその書齋に通し、人を遠ざけて

『しばらく見えられなんだ、何處もお障りはなかつたかの。』

『過日來、少々風邪の氣味にて打臥せつて居りましたれど、昨今頓と全快、二三日お尋ね怠りましたる故、本日は越中樣お見舞の歸途にござりまする。』

『安房守懇囑の城取作法圖、御許の助力に依り見事の出來、安房守の喜びは申す迄も無い、將軍家に於かせられても殊の外の祝着、我等もお蔭で鼻が高い。』

『その儀にござりまする、實は其等家人粗忽者でござつて、種々の風聞を撒き、安房守殿の御身

分を損じまるらす樣の儀ござあつては、申譯が無いと存じ、これより御邸に伺ひお詫び申入れんと存じて居りまする。」

『これは又、無用事、安房も左樣の儀氣にかける程の漢では無い、その儀ならば某が呑込み居る時に山鹿殿、又々仕官の事ぢやが、處士一生を貫ぬくと申すも結構、今や御許門人衆に對しても、急に御許江戸を立去られたらば、迷惑のもの數ござらうなれど、こゝに祿を厚うし聘用せんとする諸侯中、屢々我等に向はせられ、客分として招聘いたしたいとて殊更らの懇望我等も御許の氣象を知れる故に、よい加減の挨拶を致し置いたが、いつかな承引れぬ。其人、器量ありて、士に下り、學問を好み、仁義に敦く、わけて御許の師導を仰ぎたいといふ一心。申せば知己、それならば萬節を屈しての宮仕へも亦風流ではござらぬか。」

『唯、御言葉の儘にござりまする。』

『では、其伯樂、名を申さう、播州赤穗の城主、淺野內匠殿、斯人、平生、我等の書物を嗜まれ甲州流兵法を心得、世にも稀なる賢君、御許の評判、世に優れあるを夙に御敬慕あらせられ、遠て我等より貴意を得くれとの事。祿は千石。江戸に大帷を張つて、日の本に名ある御許の抱え高としては、ホンの印ばかりなれども諸侯の規、軍學の師匠を千石の高祿にて抱えた例は無い。赤穗は小藩、素より千石は少なからぬ心持、其志を如何に買はるゝか、これ御許の心の儘、强るてとは申さぬ。』

甚五左衛門は、その返答に困しまざるを得ざりき、千石ならでは聘に應ぜずと揭言せしが、千石にても惜からじ、否、五千石、一萬石、何のそのとの熱望に對して、彼は、平生の我意を主張する能はざるなり。暫らくは、默然たりしが、良久しくして、決心は眉宇の間に現はれたり。

『その淺野殿、お目通り叶ひますまいか。』

處は麻布新屋敷、このあたりは、木立茂く、人の往來も稀なり。楓樹の籬には秋の色淺せて、世に住み詫びたる人の哀を添ゆる種なり。

『頼む！。』

と高き聲して、訪れたるは、身の丈五尺七八寸、朱鞘の大小を挾みたる見るからに、豪快の氣溢れたる侍なりき。

『は』と答えて、取次に出でしは、年の頃十二三、磨かざれど、自づから玉の光ある垂髪の少女、庭

に突立ちたる武士の面を見るより

『オ、秋庭樣。』

『これはお千代殿、父上、御鹽梅はちと宜しいかの。』

『はい、有難うござりまする。お蔭で、二三日以來、大分樂にござりまする。』

『それは結構。では一寸お目にかゝりたいが……。』

と顏に似合はぬ柔和なる物の言ひ振なり。

お千代は奥に驅け入りしが、暫くして

『ごうぞお通り遊ばされませ。』

秋庭は、つか〳〵と進み入り、襖を開けば、中には病み耄けたる老人、枕を杖に起き上らんとするを

『其儘、其儘。』

と制して

『菅野氏、今日は吉報齎して參つた。御許に喜んで貰ひたき事ぢや。』

『御子息勘彌殿、緣談纏りましたかの。』

『あハ、、。これは御推量なれども、そんな私事ではござらぬ。我等藩中の大慶事で、江戸一の軍學者山鹿甚五左衛門殿召抱の一義、今度、主君、御滯留の次、尾畑先生に御相談あり、愈々千石にて甚五左衛門の硬い首を縱に振らした。紀州侯の御執心でも叶はず、加賀殿の高祿にも動かず、天下の處士に高く留つた甚五左衛門の體を、淺野家に召抱えたるは、我等平生の望、一念天に通じたと申すもの。彼は甲州流兵學の唯一人、孔孟、老莊の學に深く、辯舌爽かに、議論冴えたる一代の大儒、年は未だ三十に滿たざるも、學識、今古を空うするこの評判、この大學者を召抱へられた赤穗の殿樣は、また器量者ぢやの。これ皆御許の推擧の力に依る。その事知らしたうて、驅付けた。』

『では、山鹿殿が、愈、赤穗へ？。これは又夢の樣ぢや。江戸の門弟子二千人、其れを振捨てゝ赤穗へな。』

『全く江戸の學塾をヒタと閉ぢて、赤穗へ引越さるゝ。』

『これは又目出度い。』

と老人は

『千代よ。千代！。其徳利熱うして來よ。』

『いや、御振舞は無用にせられい。藥こそ御許に要ある。病人は酒の香も毒ぢや。』

『いや、氣旺んなれば、病魔降服ぢや。淺野家此賢君あり、今又名士を得た心祝ひに一献な、我等お酌いたさう。』

二六、案行の西下と門弟

甚五左衞門は、赤穗の城主淺野内匠頭の聘に應じて、江戸を出で、大阪に罷下りぬ。

曾我丹波守は、山鹿流兵學の門弟なれば喜び迎へて歡待したり。

『久々の御面會、今宵は夜を籠めて、種々の御物語承りたいものにござりまする。』

丹後守は靜かなる調子にて、温かき限の言葉を盡しぬ。

『今度、淺野内匠頭殿、御懇望のお志に絆され、不肖を顧みず、暫らく、山水の間に放浪すること我等平生の望。されば、江戸を離れて賢君の側に無爲の生を寄すこゝに相成ました。』

『赤穗は、山水明媚の地、四季順を得て人の心も自づから義に堅く、内匠頭殿は世にも稀なる英主その家中に、先生如き一代の軍學者を迎へましたる上は、座して天下を制するに足るものゝ存じまする。』

『これは又、過褒。なれども我等の爲め、繁雜なる江戸を離れて、靜かなる波打際に、天地の理法を究むることは、又なき境遇の變。何事も總てが學問、我等もこの度の事、いかにも心の喜禁じませぬ。』

『第一、我等、御許を離れて、究學問題の師に遠く、自然、心の驕り物の疎忽。萬、修身の道を欠きたる事懲み深うござりまする。されば、我等に取りては、先生と咫尺の間に、相住居いたしまするこゝ、何よりの仕合、天未だ丹後を見捨てたまはぬ事と存じまする。』

『浪華は由來、英雄、豪傑、候出の地、覇者の材、王佐の器、皆この曠漠たる五畿の原野より起つた。つら〳〵此地に來つて、山水地勢を見るに、北に山を負へば、山陰の亟裏、烈風、この翠嶂に遮られて、雪霙は來ず、南、海に面して、千里の波、那邊よりか、春潮を傳へ來る。温潤和平の

中、敦厚順朴の風を爲す。太閤の創業、地を撰ぶの理はたしかに在る。』

と甚五左の唇は太しく熱を帶び來れり

『時に、松平越中殿、御最期、まことに殘惜しうござりまする。』

丹後守は愁然として

『越中殿は、稀世の人稍、壽齢六旬を越えて、鑠鑠壯者を凌ぎ、殊に學問武藝を好まれ、才を愛し、賢を招き、長者の風人をして自づから心服せしむるものがあつた。』

『オ。その事、越中樣、御臨終、我等を枕頭に引寄せられ、百世の偉業は三代に定まる、甚五左衛門殿、我等は御許の眼の輝やく間は、安睹すると仰せあつて、手を伸べられ。さ、この手を、確乎握つて下されと。その儘の御往生夢より果敢い御最期にござりました。』

と甚五左の聲は顫へり。

『越中樣こそ、心生の緣、我等若年の折より、早くもお目かけられ、當代兵學者多岐に亘り、一代を指導する大業は全く地を拂つてゐる。其許、志濟世に存じ、文を講ずるも、敢えて、古儒の鑄型に入らず、武を談ずるにも、必ずしも野戰攻城のみ偏せず。平時にありては文能く武を進め、武

能く文を修め、文武双翼、相扶けて、千里鵬翼すその心を心とせる達人、天下果して幾人、今、大御所、治政復、幾十年、德川家多年の基は立ちたりとは申すものゝ、士道の頽廢、今にして防がずんば、蟻柱風を待たずして倒れん。學風の基、今日にして定めずんば、朽木、雨にも折れん。と我等淺學をも捨てさせず、始終の御情誼、身に泌々と忘れ難い。』

と甚五左衛門の眼には早や涙の滿たりき。

『今度の御西下、御兩親は如何召されましたか。』

と丹後は、まづ、元氣よき父女庵、及び、この不出世の大兵學者を生める母人の安否を問はんとするなり。

『おゝ御意かけられて、有難い。父は、近來兎角、枕に親み、一向昔の元氣もなく、日頃好みし酒も、一向進みませぬなれども、性來の勝氣、每朝、我等より早く床を離れ、竹刀を打振り、『曳』『曳』と空折三百。その聲を聞きまして、まづ安心。母こそ、多年窮居、やつと近頃、氣も暢々したと申し居りまする。旅は好き、菜の花盛りを、菅笠着て颯々と歩いて見たやなど、夢の樣な樂に耽り居りますれど、さて、臆劫、殊に父の事も氣にかゝり、此度は、强て旅には連れ來ざつた次第に

ございまする。」

『それは太い殘念。久振に拜顏を得たいと樂んで居りましたに……。』

『御北堂は御健勝に入らせられまするかな。』

『その事。假のいたづき、日に〳〵重りて、去ぬる師走の八日、彼世の人となりました。』

丹後守は愁然として首を俯垂たり。あゝ、相對せる師弟は、かゝる物語を爲して、互ひに打萎れたり。

折柄、書院深く、春の光射して、軒に掛けたる朱籠より、物懷ゆなる鳥の聲。甚五左は耳を傾け

『お。あの聲、玉を轉ばす樣な美い中に物の哀を含んだ……、高野の奥に高き木に巢ふ佛法鳥な。』

『仰せにございまする。』

鳥は興に乘じて、又一聲二聲高く連りに啼けり。

承應二年、素行山鹿甚五左衛門は三十二歳を以つて、赤穗に下り、淺野内匠頭の客師となりぬ淺野侯領地僅かに五萬三千石、曾つて諸大名の招聘をも弊履の如く捨てゝ顧みざりし彼は、西藩の一隅なる淺野家の家來となりぬ。

淺野内匠頭長直は、素行に向ひ、

『先生は天下の大才、諸侯爭ふて御招聘申上んと競ふものあるに拘らず、此小藩に來つて我等の志を助けらるゝ御芳志の段は、重々忝なしと存じ居まする。』

『いや、これは御挨拶、恐れ入まする。我等もこ〳〵浪人を生命といたしましたる上は、何等他に望はなき身、然るに、この方何の爲すところありこの思召か、厚禮を以つて御聘用下さいましたる儀、所謂、士は己を知るものゝ爲めに死するの覺悟にございまする。』

『是は〳〵山鹿先生の異數の御覺悟、我等何と御禮の申樣もなき次第、返す〴〵も限ある小藩の事、十分の志を盡す能はざるは、我等不本意千萬とする處、且つは、西邊の遍僻に先生の如き有爲の大器を迎へて、その御懷抱の萬一も盡くすことのなきは、頗る遺憾の儀にございまする。』

と内匠頭の謙讓、慇懃なるに素行は、いかにも氣の毒といふ風にて

『粗衣を耻ぢ、美食を念とするものは、到底士の志を語るに足らず、我等は少年より浪士の宅に生長し、あらゆる辛酸を嘗め來り、身邊の不自由は何等心に關するところはございらぬ。この上は、

御側に侍りて、我等力の及ぶ限り、精力の續かん限り、忠節を勵む本志にござりまする。」

『その御芳志、承るごとに、感涙の外ござりませぬ。唯、江戸の門弟子の失望はいかばかり、先生を失ひましては、其身の振方に困るものも尠くないかと存じまする。それ等の弟子達の行先も定めて先生の心掛にござりませうの。』

『いや。その事いづれは、何とか自立の途も立まするも。この赤穗藩は、天下の要地、西國諸侯の通路、南海、中國の學權を集めんことは、いかにも一生の快事にござりまする。』

二七、天下の權威赤穗學堂

素行先生赤穗に聘せられたりとの噂は、忽ち江戸一ぱいとなりぬ。諸侯は皆淺野家が世にも得難き兵學の大家を得られたるを喜び且つ祝はざるはなかりき。其浪華を發し、播州路指して行程三十里、多くの出迎人の中に挾まれ輿に搖られて窓外の松風、波の音、夢の如き平和の天地を腕を拱ぬき、默然として赤穗の町に入りける當夜の感は、いかに素行の深き感情を搖がしけむ。

一人、二人、三人、五人、楫を絶たる江戸の門生は、素行の後を趁ふて來りぬ。寂寞なる西播の土地は俄かに人才の巢となりぬ。山鹿先生の名は、三歳の童子も傳誦するなり。素行先生の門には江戸の舊門弟子と、赤穗の新弟子とを以て滿されぬ。

素行は當時に於ける青年の大宗師となりき。されど、彼が淺野家より受くるところの祿は、僅かに千石、これを以つて數百の子弟を養ふに足らざるは論なし。彼は涙を揮つて、門弟子が彼を慕つて、山河を越えて此地に來れる熱情を感謝し、さて語を更めて

『諸子が、我等の後を慕ひ、此地に來られたるは、我等にとりては、何より嬉しき處なれども、我等の受くるところの小祿にては、到底諸子を養ふこと難し、いかにせんと思ひ煩らひたれど、別に名策あるにあらねば、我等如き不才をも捨てざる諸子の情誼に背くの苦しさを忍び、こゝにしばらく諸子とお別れせざるべからざる境涯なれば、諸子は、忍び江戸に歸られよ。其内我等も、また再び諸子と江戸表にて會合することあるべし、いかに。』

と聲を勵まして說諭すれども、中々に聽入るべくもあらず。

『先生の御高敎に背きまゐらすることは恐入るとも何とも言葉なけれど、我等は先生を父とも母

とも思ひまゐらせ、この身を抛ちて、先生の御薫陶に浴せんと發心せる者共、餓ゆることもやあらむ。されど我等の決心は堅く、心金鐵に比ぶべくば、病魔も飢餓も犯す折はなからむ。三飯を減じて一飯とし、米を代えて水を飲み候はんとも、斷じて先生の御傍を離れじ、切に此儀は許させたまへ。」

と年長なるが哀願すれば、いづれも

「然り天下に先生を措いて、師事すべき人はなし。御庫の隅、御書齋の縁にても席を席とし、石を枕とする決心に御座りまする。」

といつかな動く色は見えざりき。

素行は熱心なる弟子達の懇願を聞き終り

「熱情にのみ趨り、理義を辨へざれば、匹夫の誹を免れがたし。諸子は行末有爲の軀を抱いて、武士の手本とも成るべき人々なり、然るに一時の短氣に逸り、眼前の事にのみ喜憂することあらばこれ却つて諸子の一身を誤るのみならず、我等も迷惑に思ふところなり。」

「先生に御迷惑を及ぼすことは門弟輩にとりては、其罪萬死に當るとなすところに御座りますれば、今後の身の振方に付きましては、夫々工夫いたしますれど、扨俄かに如何ともいたしがたきは素と〳〵我等先生を慕ふの餘り、江戸を飛出し、今先生に見放されては、最早や楫なき船、風のまに〳〵漂浪ふ外はござりませぬ。」

「その歎きは理、さりながら、見らるゝ如く我等小祿、見す〳〵諸子の困厄を眼前に眺め居ることは、我等の忍び難きところなれば、諸子は篤と協議して、前後を錯らぬ樣用心せられよ。今後の諸子の身の上に就ては不及ながら、如何樣の取計ひもいたすべし。」

ここゝに情誼深き師弟の懇情は東西に別れ〳〵の悲しき別離を見ては叶はぬことなりき。素行はその後を慕ひ來れる舊弟子を集め、今宵しも別離の小宴を、屋後の小丘に開かんとす。月の光天地に滿ち、赤穗城下の燈火は螢に似たり。

宴闌はにして、盃飛ぶこと早く、素行は起つて

「今宵のこの宴こそ、げに思ひ出多き限なり。諸子は、この別離を悲しと感ぜらるゝあらむなれど、我等又ひそかに考ふるに諸子が、其研學の力をもて。文武兩道の達人とならんには、この猫額程の赤穗にありては、到底叶はぬ儀、江戸は碩學鴻儒林の如く、天下人材の集合する處なれば、そ

の德を磨き、才を養ふにも萬事都合よからむ。山鹿甚五左衛門がこの次、江戸へ上る折には、諸子は、その周圍の力に依りて、天晴なる學者となり。我等を指導せらるゝ事と信ず。大丈夫、婦女子の涙を爲す勿れ、我等は諸子のため、その行末を壽ぎ、喜びこそすれ、何の悲しむべきを見ざるなり。』云々

とその語氣は一語一語強きを加へぬ。

『先生の御教訓謹んで拜聽いたしまする。必ず肝に銘じて忘却仕りませぬ。先生も一日も早くこの草深き南播の一偏僻より遁れたまひ、江戸の大儒林に嶄然たる山鹿流の大旗を樹てられんことを只管願ひ上げまする。』

この時、赤穗國家老、大石頼母は、あわたゞはしく駈け來り、

『先生、……山鹿先生に申上げたい儀ございまする。』

一同は盃を留めて、頼母の面を見成りぬ。

大石頼母は息も切れ〳〵驅付けたる用事は如何。

素行は、

『これへ〳〵。』

と頼母を引寄せ

『何か急用でもございるかの。』

頼母は聲を潜め

『實はお上より、直々先生にお目にかゝり、直ちに御招參れとの事にございまする。』

『何用かは存ぜねど、主君のお召なれば何事は扨置き、其許と一緒に、御同伴申上げやう。』

と一統には、決して輕擧あるべからずと戒めて頼母に伴れられて山を下れり。

素行の來邸とありて、待構えられたる内匠頭は、直ぐに〳〵とお膝下近く召されて

『夜中突然の儀ながら、先生の御後を慕ひ、當地に罷越したる門下衆の儀如何取計らはれたるかそれのみ心にかゝつての。』

このことなり。

『江戸より態々先生の高德を慕ひ參りしこといかにも特志、かくありてこそ學問の德は長へにそが尊敬を集め得るなれ、近來、天下漸く太平、人心益々政治武藝に遠かり、士風廢頽いたしたる事

いかにも殘念、流石は山鹿先生ぼごありて、その熱誠よく諸侯の推尊を集め、門下學生の群ひ集るもの幾百人、かゝるは、獨り先生の高德の賜と申すのみならず、赤穗の譽なれば、我等に一つ工夫いたしたる義あり、曲げて御承諾下されたし。」

この仰せなり、素行はたゞ默然として內匠頭の面を見戍り居りしが、

『門下騷しく城下に集り來り、却つて御城下を騷がすこと恐入つたる次第にござりまするなれど實は、これ等のもの共、久しく我等、門下として江戶の學塾に出入いたし、情誼二つながら深き間柄、とは申せ、かく數限りもなく集まり參り、留度なしに城下を驚かしましては、不本意千萬、兎も角一先、江戶表へ退散の事穩當と認めまする。』

『なれど、我等は又それを太く殘念に思ふ。かくまでに先生の御許を慕ひ參りしものを、打捨置かんは、却つて面白からず、工夫と申して別によき智慧はなけれど、こゝに一の大講堂を建設して其處に藩の內外、地の遠近を問はず、苟くも學問を宗旨として集まり來るものどもを集合せば、それこそ、我等の小なる望みも、更らに世に益立ちしと申すもの、其儀先生の御一考を煩はしたいものでござる。』

と、藩侯の慇懃なる申入れありき。

素行先生の名は、江湖に傳はりぬ。中國、九州より、播州街道上下、諸大小名は素より、あらゆる方面の好學の子弟は赤穗の大講堂に研道の聽衆となりぬ。

松吹く濱風は颯々として、秋は殊更らに越深く、嚴然たる學堂は、四邊を壓して、巍々として赤穗城下を鎭め、其門を出入する幾百の學生の中には、鬢髮悉く白、一糸の靑を交えざるものすら、垂髮の甲乙と伍して、いと熱心なる聽講者なりき。

今日は、莊子の講義ありとの事に、門生輩は、競ふて、早朝より學堂さして詰かけた。

時來りて、素行は、廟上下に威儀を正し正面の見臺の前に坐りて、頻りに得意の長廣舌を揮ひ居たりき。唯見る席の一隅に、さし入る朝日の光眩ゆく、銀光面を射るは、何人ぞ、薄の銀髮、丁寧に撫で付けたる髮を戴けりといはんばかり、手づから、小包より册子取出で、一心に紙上を見詰め居たりき。何人も其何人なるや、はたかゝる人の來つて、席末にありと知らねば、誰一人起つて敬意を表するものあらざりき。

素行の眼と此老人の目と礑と合したる時、素行は、輕く眼瞳を動かし、彼方も目禮しぬ。講義は

矢の如く、殿く進めるなりき。

講義果てたる後素行は、室を出で、次の間にありしに、

『今日は殊に、御講義、泌々と有難く心得申した。』

と件の老人は、一禮したり。

『オ、お上には本日も講堂にお出遊ばされ、群生と共に机を並べて在せしこと高坐より拜見いたしたれど、強ゐて御席に就かせられたしと申すもお心に背く譯、態と差控えましてござりまする、素より研學攻義には、上下老若の差別はなしとは申せ、それは同格のもの〻申すこと、お上には、赤穗一城の御主、天下知名の御大名、その御大身を、青書生と御一緒では若輩の某、甚だ恐縮の義にござりまする。』

『否、否、先生の詞とも思はれぬ、我等何の取るところありて、猥りに學堂の威風を損ねやすべき、先生始終の御教え、學問の德は、高きに居つて卑きを忘れず、人を敬して、隔てを築かず、唯々學問の尊きを知つて其他を顧みるに遑もないとの事、我等、肝に銘じて服膺致し居りまする。我等とても同じく先生の門弟、老若の別こそあれ、學壇の地位は、中々他の弟子供に及びも付かぬ事

されば、つとめて講堂に罷出でまする。先生の權威、御遠慮なき樣、豫め一寸申出でまする。』

內匠頭は餘程の老年なり。されど、その研學の情は燃えんばかりなり。

素行の赤穗に留まりしは、承應二年より萬治三年に至る八年間なりき。赤穗城外の學堂は、老若遠近の門生、數百名と註せられたり。彼の聲望は、正に海內第一の稱を得るに至りぬ。

此間に、有名なる四書諺解、七書諺解、武教本論、手鏡要錄など、少なからざる著書の編述に從ひぬ。

素行の、廣汎なる學問は、遂に小講堂に於て、門生の爲に、口授するのみにては、到底滿足し能はざるなりき。彼の學界に於ける革新の火は其筆端に迸りて、顯正破邪、唯一線に、理想へ理想へと行かんとする活氣溢れたりき。

『先生近頃は、何となく物思ひに沈まれ平生の御快闊に似ず、御言葉も少なく、何事か魂打込め居らる〻樣子、一應合點參らず、我等の行爲が何か先生のお氣に觸つたのではなからうかとそれが心配でなりませぬ。』

と一日、淺野內匠頭は、山鹿氏に向つて問ひ懸けぬ。

『オ。これは又思ひも寄らざる御尋ね、御當藩に參りまして以來、我等は從來味はれぬ新らしい面白味を樂しみ、松風の音、濤の聲、天地の色、見るもの觸るもの、いづれも愉快ならぬはござらぬ。殊にはお上に於かせられて、我等の淺學をも捨て給はず、分に超えたる御禮義、何ど御禮申上けて可いか解りませぬ。かく過分の御優待を蒙りながら何不足の候べき。唯、我等、近頃、頓みに政道の衰へたるを感じ、世の中味氣なく、且つは德川百年の世の爲め、少し思ひ感ずるどころもあり、熟々時勢を稽へ、口舌三寸磨し去つて、亦用を爲さゞる死後の爲めいさゝか心に浮ぶことども書き集め、後生に殘して置きたいと存じ、すべての聲色を忘れて、只管、其事にのみ心を奪はれ居りますれば、中々に心にもなき御非禮を致すかも知れませぬ。其儀惡からず思召されたうございまする。』

『その御高著、是非承りたい定めて有益なるもの老生一生の思ひ出に、その御高說を拜讀いたしたいものにございまする。』

『中々以て高家大家の御役に立つことは存じませねど、お上には、常々心を政邊に寄せられ、百姓の安危を念じたまふ。この點、聊かながら、御益に立つかも知れませぬ。』

『その事。我等いかにも懷しい。その本の表題如何ど申さるゝかの。』

赤穗學堂の評判は、諸侯をして、偏に羨望の種どなりぬ。磯吹く松の風習々たる夏の海岸に、素行は其影を繞りて談笑する多くの青年子弟ど、快活なる談論を交換したり。

彼の學術は、ほどんど有ゆる權威なりき。他の頑迷なる朱儒輩が、偏に舊習に拘泥して、才扁の詮鑿に汲々たる樣をいかに熱罵したりけむ。

『この大海の水の量を、升を以て量らんどするものならば、誰か其狂迂を笑はざるものぞ。然るに、今の滔々たる儒者輩は、變轉窮りなき人情を、死して枯渴せる學問の定規をもて定めんどせるに非ずや。一も二もなく、それ唐の某はかく云へり、古の聖人はかく申せりど、日の本の國體をも辨へず、一から十まで、唐を掟どなさんどするは、これ手を擧げて、天日を蔽はんどするの愚ならずや。我等の學問は、拘泥齷齪なく、我朝の風俗人情を基どして立つ。新舊を打ち、古今を合し大機軸を起さんどするに志存す。』

ど彼は、公々然どして、當時江戸の學林が太く訓詁者流の、形式に流れつゝあるを嘲り、

『活けるものゝ爲めに、活ける學派を拓け。死せる學者の迂論ど、路傍の地獄花は、唯、幕府の

露光量違いの為重複撮影

醉興に太平を飾るに過ぎずして、これ學問の粹に非ずして庶

と極論して憚らざりき。

今日しも、承應二年の夏は老けたれど、なほ殘りの炎は、[illegible]なき街の人を蒸殺せしめんばかりなりしが、流石に、夜は凉味、地に溢れ、一天藍青、水の如く澄めり。彼は、今も書樓の下に『四書集註』の校訂の餘念なかりしが、不圖氣づけば早や月の上れりと覺しく、圓窓に映る八手の葉黑々と物の怪の手を擴げ迫れるに似たるに、俄かに手を止めて、窓を開けば煌々と射込む明月、登よりも明なり。

『ヤ、好い月ぢや。垂籠めんあらんは惜しゝ。』

と獨語つゝ、起上りて、裏口より駒下駄引かけ、木戸を押せば、道もせに咲く草花の得も云はれぬ匂ひ、四邊を籠めたり。

素行は、暫し默然としてありしが、頻りに打頷づきぬ。彼や、今この刹那、果して何事をか感得せる?。

地には早や秋知り顔の虫の聲、天には燦々たる星の光。素行の冷やかに理性に富める頭に幽情を與へたるは、この天地の靜寂なりき。

兵學の大家として、當代の尊信を一身に集め、諸侯門生、數千に亘り、學人の面目を一身に擔へる彼は、今はた、何を感ずるところありてか、この靜夜の默聽に天地の氣分を味はんとする。

彼赤穗に來りてより早や八年。齡を加へて不惑に近し。この時彼は不圖その窘束せる生涯の遂に草花に朽ち果つべく、餘りに無意義なるを感じそめたり。江戸儒風の革新は天下の大事なり。民風勃興の氣運は今を措いて他にあらず。急激なる革新黨由井正雪は一蹴して忽ち頓挫しぬ。天草の擾亂も炎の如く燃えて、水の如く消え果てぬ。其爲すところの跡を檢すれば、何事か彼の耳底に囁くものなきに非ざりき。

彼の眼前には、何事か大なる使命の迫りある如く感ぜざるを得ざりき。

彼は平生其門弟子に敎ふるところの古人の覺悟を味へり。急難の地に赴かんとする時、必ず飲食し、或ひは睡眠し、或ひは眼を閉ぢ合掌し、或ひは大小便を通ぜしめ、而る後に其事を辯ずべし（山鹿語類）との意味ある敎へに觸れたり。手を伸べて、流るゝ小川の水を掬へば、玉と碎けて燦爛と閃めく月影を味ひつゝ、彼の曠々たる心は、肅然たりしが、頓がて豁然たる光明界に一到し、

露光量違いの為重複撮影

醉興に太平を飾るに過ぎずして、これ學問の粹に非ずして皮なり。』

と極論して憚らざりき。

今日しも、承應二年の夏は老けたれど、なほ殘りの炎は、風なき街の人を蒸殺せしめんばかりなりしが、流石に、夜は涼味、地に溢れ、一天藍青、水の如く澄めり。彼は、今も書樓の下に『四書集註』の校訂の餘念なかりしが、不圖氣づけば早や月の上れりと覺しく、圓窓に映る八手の葉黑々と物の怪の手を擴げ迫れるに似たるに、俄かに手を止めて、窓を開けば煌々と射込む明月、晝よりも明なり。

『ヤ、好い月ぢや。垂籠めんあらんは惜しゝ。』

と獨語つゝ、起上りて、裏口より駒下駄引かけ、木戸を押せば、道もせに咲く草花の得も云はれぬ匂ひ、四邊を籠めたり。

素行は、暫し默然としてありしが、頻りに打頷づきぬ。彼や、今この刹那、果して何事をか感得せる?。

地には早や秋知り顔の虫の聲、天には瀾々たる星の光。素行の冷やかに理性に富める頭に幽情を

與へたるは、この天地の靜寂なりき。

兵學の大家として、當代の尊信を一身に集め、諸侯門生、數千に亘り、學人の面目を一身に擔へる彼は、今はた、何を感ずるところありてか、この靜夜の默聽に天地の氣分を味はんとする。

彼赤穗に來りてより早や八年。齡を加へて不惑に近し。この時彼は不圖その窘束せる生涯の遂に草花に朽ち果つべく、餘りに無意義なるを感じそめたり。江戸儒風の革新は天下の大事なり。民風勃興の氣運は今を措いて他にあらず。急激なる革新黨由井正雪は一蹴して忽ち頓挫しぬ。天草の擾亂も炎の如く燃えて、水の如く消え果てぬ。其爲すところの跡を檢すれば、何事か彼の耳底に囁くものなきに非ざりき。

彼の眼前には、何事か大なる使命の迫りある如く感ぜざるを得ざりき。

彼は平生其門弟子に敎ふるところの古人の覺悟を味へり。急難の地に赴かんとする時、必ず飲食し、或ひは睡眠し、或ひは眼を閉ぢ合掌し、或ひは大小便を通ぜしめ、而る後に其事を辯ずべし（山鹿語類）との意味ある敎へに觸れたり。手を伸べて、流るゝ小川の水を掬へば、玉と碎けて燦爛と閃めく月影を味ひつゝ、彼の曠々たる心は、肅然たりしが、頓がて豁然たる光明界に一到し、

『あゝ、我去らん乎、去らん乎、手を擧げて、天地、我を招く。我學風は未だ成らずして、其行手は遠し。萬艱を排して我心の動くが儘に……。』

彼の心は天外に飛べり。

この夜淺野内匠頭、病の床にありしが、なほ枕上には素行の『四書集註』は披かれたるまゝ置かれたりき。

素行の志は決しぬ。赤穗滯留八春秋。學堂の威風は四方に振ひ好學の子弟門前市を爲すの有樣となりぬ。されど、彼が其大鵬の羽翼を揮ふの時は、既に近づきぬ。彼は一日突如として、淺野侯に伺候して、江戸歸參の儀を願ひ出でぬ。

淺野侯の驚きは非常なりき。全く寢耳に水なり。かく突然の申出には、何事かお心に觸る儀ありてか。さらば、我等とは主從の間にあらで、師弟の誼深き仲なれば、何事も隱すところ無く仰せられよ、我等不德、先生をして、長くわが藩に止むる能はざらんとは、豫ねては期しつるところなれど、今、學室の子弟、先生を慕ふこと殿父の如く、其温容に接して、教學の本旨を窺知すること無上の樂み、且つは一生の面目と爲せるに拘らず、今、不意に先生を失はんには、その悲歎如何あらむ。我等も、先生に依りて、漸く學問の林に分け入り、僅かに一道の光明を認め得たる折柄、先生と東西相別れんは、まことに終生の遺憾至極。もし先生にして我等の不德、共に爲すに足らずとならば、乞ふ、我等を導き教え、命じたまへ、謹んで其命に從ひまゐらせむ。』

と言葉の限りを盡されたり。

素行は、手を左右に打振り

『否、否、藩公は一世の雄、身中國の一藩に主たれども、心百代の休戚に繫がり、早くより、古人を敬慕し、儒學を尊崇し、殊に我兵學の堂奥を究めたまへり。天ケ下、六十餘州、廣しといへど、公の如き、篤學忠敬の人あらず。某、淺學寡問、知を辱ふすること十幾年、御城下に出でゝより、既に八年、身、儒官として、御召抱へを辱ふすれども、疎懶にして、子弟教育の事も、專らならず山に攀ぢ、川に釣り、悠々自適、我儘千萬、されどもなほ宥させたまへり。その宏量仁慈に對し奉り何條不平、異存の候べき。唯、某、つら〳〵天下の形勢を觀ずるに、今や幕府百年の計を爲すべきの秋、世、太平に狎れて士道漸く微ならんとし、再び江戸に歸りて、少しく横議の處士たらんとの念急にして、男子稀遇の知己の恩にも背きまゐらせんと志しつる次第に候。』

こと決心は面に現はれたり。

淺野内匠頭の老顔には早や涙の浮ぶを見たり。その事に衝り、吶々たる口調は滾るゝばかりの誠意を籠めて

『先生にこりては、經國はその本來の志に候へば、强るてこの小藩に、大鵬の羽翼を收めたまはんことを願ひ奉ることすら、我等にこりては、いかにも口巾つたき儀に侍らんなれど、我が先生を思ふの情の深きは、滄茫たるこの茅渟の浦にも比ぶべき乎。そも〳〵、戰國の世にあらば、先生の器量學問在り、何ぞ一城の主たること難からんや。閑說、先生人に仰せらるゝには、一萬石ならでは、主取はせずこの事、その志を知らざる輩に、これをもて、徒らに貧祿のものこや思ひ候はんなれど、我等を以て之を見れば、一萬石、何ぞ夫れ、一代の學者たる先生の前に眇乎たる、古來戰國の時には、陪臣に高知行取のもの數多く、木村常陸介五萬石の時木村惣左衛門五千石、長谷川藤五郎八萬石の時、島勘左衛門八千石にて聘せられき、丹羽五郎左衛門十二萬石にて江谷二郎右衛門坂井與右衛門一萬石宛を取りたり。個樣の義珍らしからず、結城中納言殿、越前權頭の時分聘せられ候は、御國を拜領され候以前より思召ありしこて久世但馬守に、二萬石を賜りき。我等存じ寄りにても、寺澤志摩殿、天野源右衛門を八千石にて召抱えられ、渡邊睡庵事藤堂泉州公へ浪人五萬石にて無之ば主取り仕らず申し候由、この人々こいへごも、素より大したる武勳あるにもあらず、當時は、學問戰略の士を尊ぶこかくの如くなりしに、今や全く、諸侯の内庫、大事に還りて、目前の事にのみ心を馳せ、學問文章を無用の遊技の如く心得居るもの多きは何等不都合の事に候ぞ。我等小祿の身の上、志茲にありても、思ふ樣なる結果に到らぬは甚だ遺憾の義……。』

こ言葉を盡し、理義を盡して說き立てたるに、素行は只管にその信誼の程に感泣せざるを得ざるなりき。

素行の面には溢るゝばかりの感謝の色を表はし

『御厚誼、今に始めぬ事、何以つて感謝の辭はござりませねご、實に某、思ひ立ちましたる事是非に決行いたし度考へにございまする。數年間、君恩の重きに狃れ、縱まゝに君寵を弄しませし段寧ろ臣禮を缺ぎ、申譯もござりませぬ。』

こ更らに語を繼ぎ

『戰國武士の例に從ひ、某萬石の大祿をも身に取りまして過分ならぬこの仰せ御最の儀にはござ

りますれど、時勢の習ひもござりまする。中々に唯々淺學を恃んで、恣なる振舞ひ天道の罰。冥加の程も恐入ます。殊に御藩上下の一途、某の爲めに盡されし誠の程、感謝の途も無く。その恩誼情愛、双つながら酬ひまゐらせる折も無く。東國を望んで、非分を試みますること、全く以つて赧顏の至りにござりまする。」

『いや、仰せの趣、すべて了解仕りました。不肖の罪をも捨てられず、懇々の御教訓、某一生服膺して忘却仕りませぬ。諸侯の厚聘をも斥け、偏陬の此地に御降幄、子弟の爲めに、大學問の主意を御授け下されしは、これ亦不思議の情緣。今日、また時來つて、先生の御東歸を止めまゐらさぬも、某の本領、この後とも時々は、江戸へ上り、親しく御高訓に接する折を樂しみまする。」

『某こそ、忘れ難き播州のこの山水、山穩かに水平らかに、春暖かく、秋涼しき此景色を一生の紀念といたし、この後とも度々御膝下を騷がすことにござりまする。」

『それは望みても願はしき義なれども、先生の御自由は、直ちに門生の堰止めることにござらう我等も取る年、この後幾度かまた御謦咳に接する事やら、思へば、行先心細き次第。」

と、老藩主の聲さへ曇りて、涙はほろ〳〵膝にせる手の甲に落ちぬ

素行はかくの如く惜まれて赤穗城を出で、其邸に歸り來れば、表玄關には燈火が映す人の影、十幾個の頭は重りて、何事をか密々凝議せる態なり。

『先生のお歸り！。」

と玄關口に叫ぶものあり。一同兩手を支へて、

「お歸りなさいまし。」

『先生のお歸り、お待受け申して居りまする。」

と口々に懷かしげに挨拶するを、

『爾か、爾か。」

と輕く會釋して、

『皆元氣で可いの。」

と春風面を拂ふて吹けり。

素行を迎へたる一人の面を蔽ひその手よりは鮮血流れありき。素行は目敏くこれを認め

『其方額の傷如何いたした。」

『こ、これは。』

と彼は口籠りしが、素行は強いて之を問はんともせず、奥に入り

『田附、田附……。』

と門生の一人を呼び、

『其方、我等留守中、何事か奇變のありし樣子存ぜぬか。』

更らに語を和げ

『何事も隱し立てしてはならぬぞ。』

『は、實はその、先生に申上げまするも恥入つた次第にござりまする。』

『村田源之丞、傷、何事ぞ。』

『その事に就きまして、彼は、直接、先生にお詫び申上げたいと申しまして、お歸りを待ち受け居りまする。』

『血氣の勇に逸りて、喧嘩口論などしてはならぬと我等は日頃より申附けあるに拘らず、あの額の傷は、唯事とは思はれぬ。屹度彼が何事か、他人と爭ひ立てしたに依るとすれば、早く和約をさせねばならぬ。其方事情詳しく存じ居れば、包まず申立つきが可い。』

『あの先生、私がお目かゝり、お詫申上げたうござりまする。』

と襖の蔭より、村田源之丞、繃帶より滴る血を押へながら、闖際に跼りぬ。

素行は、其方を屹と見やり

『其方の申するは、大抵判つている。我等そも〳〵大に學問を勸め、智識を研くの道は何の爲か。其方の天賦德を進め、藝を勵まし、道を明らかにさすより外は無い。然るに如何樣の義あつたにしろ我等門生の一人たりとも、人と無用の爭ひを爲し、面上に傷を負ふが如きは、小勇に逸りて大事を誤ると申すもの、我等は取らぬ。扨こそ傷を與へたるものと、受けたるものと同樣の罪なれば、双方とも天道に對して相濟まぬ。父母より與へられたる身體を傷づくるは、人道の敵と申しても可い傷を負はせたるもの、慣むべきは申すまでもないが、其方は我等の門生、まづその罪を、喧嘩の相手に詫びねばならぬ。其次第を話してくれ。』

と氣にかゝりて堪られぬ狀なり。

『日頃の御敎訓に對し、何共申譯のなき義にござりまする。仰せに從ひ、直に、先方に詫びに上

りまする。」

「其方の柔順なる申樣、流石に經學の神髓を學んだ我等の弟子たるに恥ぢない。傷を負はされたるものより傷を負はせしものに詫び入るなど、一體の道理より申せば、甚だ怪訝の次第なれども、我等の家の掟ぢや、もしお互が、喧嘩の後始末を附けず、其儘にして相別れたとすれば、事の如何に拘らず、甚だ以て不良の種を心の中に殘す。また、我等道學の理論よりいへば、爭ひと申すこと既に面白くない。人をして爭ひの爲めに、其身の面上に痍を負はすほどに激せしめたとすれば、其人に對して、詫る値がある。」

と々諄として說き進みしが、

「なれども、其爭ひ、我等の上に繫つたことであらうの。」

素行の眼は烱然たる光を發しぬ。

「は。」

と源之亟は恐る〳〵

「貴は先刻、我等江戸より先生の御後慕ひ參りしもの〻一群、先生の御邸にまゐる途中向方より

塾生數多相伴れ、我等を見るや、突然、打つてかゝりましたものがござりまする。」

源之亟の眼には、無念と不平を語る淚に滿ちたりき。

この突然の衝突は、別に深き意味ありしにはあらざりしも、赤穗の少壯派を心服せしめ、赤穗藩唯一の誇たる山鹿素行先生をして、長く播州の一角に留め、子弟敎育の任に當らしめ、海內文學の中樞を、淺野家、學堂の中に收めんことを望むの情の切なるより、這次の先生東上を以つて門弟子中、江戸派に屬する人々の慫慂に出づるとなし、この間中より兩派の軋轢、漸次激烈なるに至りしなり。

右の筋道は、村田源之亟の口より審らかに語られぬ。

「されば、私、先生に申譯なき同門中の爭の先頭に立ちて、市中に爭ひを釀しましたる段、何共早や孔聖の大道に背き申せし義にはござりますれど、敵も味方も先生の御上京よりの事、今は唯々我を撲ち、辱めたるものを恨むよりも、却て、かくまでに先生を慕ひくるゝ藩中同窓の厚情、類母しく嬉しく存じまする。」

「その言葉我等にとりては如何にも心强い、其方が爭ひの相手を飽迄も讐敵と心得て、確執する

樣な心、寸毫だにあらば我等は、其方に苦い一言も進ぜねばならぬ處、双方の爭ひ、いづれも人情の昂まりて、情の禁遏難きこころなれば、血氣の勇、事のこゝに至るも、已むを得ざるこゝ今度の事は我等よりその不行屆の段藩公に相談する。かくまでに、我等を思ひくるゝ精神は、千金にも代え難しこいへども、我等には又我等の思惑ありて、赤穗子弟の爲なるが如きものにもあらず。その事、やがては分明する折もある。今はたゞ、双方連が、一時の情に激する樣の事ありては、我等却て大事を誤る、恐もあれば、決して輕舉妄動してはならぬ。互ひに、相戒しめ、我等はこも角、淺野殿、御老體に、御心配御掛申す如きこゝありては、申譯も相立たざる義、分別第一……。」

こ懇々戒しめ、其夜は俄かに學堂に子弟を集め、愈々赤穗別去の挨拶を爲せり。

學堂にては、區々の議論より華さきぬ。山鹿先生の東歸は其志に非ず、全く、江戸浪々の書生輩先生を煩はして名を成すの因緣こもせんこの意にて、かくは、左右よりその決心を搖り動かし、赤穗を後にせしめんこするなりなど、跡形もなき流說を爲すものあり。その結果、江戸派こ赤穗派の軋轢を生ずるに至りたれば原々は、素行に對する厚誼なりこは云へかゝる事實あらんには、いかなる結果を生ずべきや測るべからず。素行はこゝに於て、赤穗こ別離の餘義なき理由を公開せんこせり。

先生の唯一の主張は向上研學の道に就かんが爲なりこいふにありき。赤穗の學風も、八年の刻苦によりて、嶄然こして他藩に宗師するに足るこいふ自信も伴ひき。素行は、蒲堂の諸生に向ひ

「諸子、我れ志ありて不日城下を辭し再び江戸に歸らんこす、藩公も我志の抵ゆかたく、その願ひの切なるを容れたまへり。我の江戸に出でんこするは、別儀には非ず、いさゝか當世の學問を研き一代の用を爲さんこするの念近頃繁きこ、實は江戸表に殘しある我老母の上の氣にかゝれば、一先づ其坐右に侍りて、あらんかぎりの孝養を盡したき考へなり。諸子は年壯にして氣銳有爲の人々なれば、わが數年の敎學に對して、苟くも多少聞くに足り、取るに足るものあれば、宜しく、躬行實踐の人たるべし。われは、われを惜しみて、この赤穗の山水に留らしめんこの諸子の情は感謝に餘りあれこ、諸子の心、それが爲めに熱狂して、遂に不穩の行ひあるに於ては、これ獨り、敎學の本旨に悖るのみならず、藩公に對し奉りて、不臣の咎めを如何にせん。我等は、諸子こ日夕、この敎堂に會して、學得したるこころのものは、果して何ぞや。武を練り、兵を貯ふるは、喧嘩口論の用に立てんこにはあらず、文を講じ、史を誦するは、徒らに、小爭些紛を釀さしめん爲にはあらず

諸子の才は、大用すべく、諸子の德は高大無邊なるべし。われ形は諸子と東西を隔つといへども、心は常に學問を通じて、日夕相貫通すべし。」

と語氣熱し來て人を感かんとす。

二八、聖教要錄の祟り

素行江戸に歸つて後、津輕越中殿は、彼を聘用せんとせる大の熱望者なりき。山口出雲守は、津輕十郎左衛門の申すところなりとて、素行に越中公の意を傳へしめんといふにありき。

其言ふところに依れば、津輕公の知行少しといへども、土地廣く、新田多く、知行は其方望むところなり。されば、其許、越中殿、初入部に際して、津輕家に參られ、厚く其左右に侍せられたしといふにありしが、素行は冷然として之を斥け、淺野因州公の龍遇に背きまつりて、江戸に歸りたるは、他に思ふ仔細ありてには候はず。公は我等が、赤穗を去らんとするに能はざるは、辭を盡して、之を留め、其祿を增し、其俸を加へ自由と、安樂とを以つてしたまひたれど、我等の思ふ仔細は、その厚意を排して、斷乎として、その振り難き袂を分ちたる也。我等は一生浪人の心持をもて短かき一生を終らんとする旨を答えて、靜かに、其書齋に立籠り『聖教要錄』に筆を執りつゝありきと。

當時の素行は、昔の書生たるにてはあらざりき。彼の門下は數千に餘り、前田、津輕、其他諸侯の門に候するもの數十名、士分にして、其教を奉ずるものは、二千を超え、堂々たる一個の大儒にして、其威儀儼として、江戸學材の異觀なりき。

彼は、まづ幕府の專制を破つて、朝廷の光を國民と共に仰ぐべく望みたりき。幕府があらゆる壓制の手段を弄し、上天子を狹むを以つて不臣と感じて已まざりき。彼は民衆が投じたる文學の光輝をして、時の人の眼を開かしむべく、熱心に儒學の正風を樹て、君道、士道の論をなし、殊に『中朝事實』によりて、三種の神器を以つて、天が下を照さんとするに怠りなかりき。

かくの如き處士の運動は、まづ由井正雪を以つて、手をもて企てられたるも、素行は、決して彼の如き手足を動かすの時に利あらざるを知れり、且つや、正雪は叛なり。素行は道に依らんとする念の切なるものある也。

彼は、この一卷の『聖教要錄』によりて庶民に學問を勸め、智識を啓き、以つて朦朧たる德川の高壓政治を倒さんと試みたる也。彼や、進んで之を倒さんとするものに非ざるも、その一生の大學問は、遂に尊皇の大氣象を說くものに非ずして何ぞや。

素行は、今や『聖教要錄』の上篇『立教』に移らんとす。滿庭の楓、落日を浴びて紅流れんとする也

『人教えざれば道を知らず、道を知ざれば、則ち禽獸に等し。民人異端を信じ、邪說を信じて、鬼魅を崇む、竟に君なく父なきは教化行はれざる也、古昔王は國を建て、民を君とし、教學を先とす……。』

建國の德を、君王に歸し、飽まで王覇の公道を宣べよといふは素行の理想なりき。

『君長の下を御するに當りては、人を教ふるの道を以てすれば、則ち臣隷教化す、教の久しきや自から風俗を成し、人々自ら安んず、家に家教ありて國に國教あり、天下に天下の教有るをや、道德を一にして以つて心を同じくす。』

見よ。其曠浩洋々たる彼の主張を、かくの如き自由奔放なる理想と、古學復興に至つては、當時の朱子派の固陋者流の解せざる處なり。

『聖教要錄』は寛文六年三月に至り刊行せられたるは、上下三卷、力を極めて、朱子學を排し、人は自然に歸れ、古學の精神は、儒人の精神也との堅き彼の信仰は、當時數多の敵をして、彼の根本破滅を爲さしめずんば已まざるに至らしめき。彼の周圍には、山崎闇齋に心醉せる幕府の元老保科正之あり。保科は當代第一の權豪、華奢風流一代に冠たりき。彼は『聖教要錄』を取つて、直ち一種の革命思想也と斷言したり。

彼の師兄たる北條安房守は、到底彼と融合一致すべものに非りき。彼は、まづ素行の非行を發いて、事を構えて、其貶謫を欲せざるまでも、人の素行の爲めに謀るに非なるをも强るて咎めざりき。殊に素行が、一生浪人主義は、彼等にとりていかに勁烈なる宣戰なりしとするぞ。

浪人！。この一語は、時の幕府執政官をして震駭せしめたりき。

由井正雪以來、浪人の語は、直ちに叛逆人の意味なりき。今日文明の社會にありても、上司の志低うして、閥族根性なるものは、たま／＼士人の正論に對しても、少しく彼等の政策と相抵觸せるものなれば、直ちに社會主義なりと稱して、注意人物と爲す。況んや當時は、幕府專制橫暴の時代なり。殊に山鹿素行の如き八面玲瓏の才、上下無忌の智、豪放快濶の量、深高雄大の識者を見るこ

こと、今日の政府の主義者を怖るゝ見に似て、更らに無理解なり。殊には、今の政府の如き生溫き養え切らぬ政策を以つて糊塗政治を爲すことを許されざりし一生懸命の幕府にありては、この勁敵の滅亡を計るにいかに苦心したりとするぞ。彼は由井正雪の如き單に直接行動を以て江戸城を狙ふの謀叛人に非ずして、天地の理に依つて、敎育の根本を露し、時の儒者等を精神的に亡ぼさんとするもの也。姑息なる天下は、豈驚かざるを得んや。

果然、北條安房守と保科正之とは密議を一室に凝らすに至りぬ。

素行は之を識らず、老母を伴ふて郊外の秋を探り、疊の目より短き日脚を憾み、人生能く幾干ぞ我は力を盡し、心を盡し、慈母の歡を奉ずるを以つて無上の樂と爲すと門生に語りつゝ、俯仰天地に恥ぢざる愉快なる日を送り居たりき。

二九、奉行所の召命と墓參

北條安房と保科正之との談話の內容は如何なりしか、安房が、保科の邸を出でし時、十月朔日の宵は更けて、襟吹く風は寒かりき。

仰げば、爛々たる星の光、長空を橫ぎる銀河の影、妖星一個、忽ちして長芒曳いて流れぬ。

安房を送り出したる正之は、酒の香殘る奧深き一間に入りて、熱き息をホット吐き乍ら、腹に一物、凄き笑を洩らして同じく嗤々したる面を擧げて「天長地久」と題せる額を見詰め居たりき。

其翌々三日、素行は津輕公の爲めに經書を講じ了り、自づから、庭の池の汀に立ちて、緋鯉に餌を與へ居たるに、門生の一人、

『あの先生、奉行所よりの御手紙にござりまする。』

默せる彼の手は敏く、文箱を受取り、書齋に歸りて靜かに蓋を開けば、見覺れたる文字なり。

その文面に曰く

『可相尋御用之儀に付早々私宅迄可被參候以上　十月三日　北條安房守　山鹿甚五左衞門殿。』

素行の顏色は常の如く靜かなりしが、その眼は異樣に輝きたり。彼は　この刹那、早くも毒手の彼を拉して去らんとするを自覺しぬ。その毒手の力を、彼は毫も怖るゝ　ころに非ず、さりながら

彼を恐るゝこと虎豹の如き幕府當路者は自から虎豹の威を揮はんとするに非るか。彼等が學問の士を忌み、正義の言を憎むは蛇蝎よりも烈しかりき。素行は、其著「聖教要錄」に對する彼等の恐怖猜忌、嫉妬の頂點に上れるを察しき。則ち、これその疑心より暗鬼を生じたるものあらんとの觀測は電の如くその胸に閃きぬ。一時的憤恚は、色に現はれずして、忽ち平常に復しぬ。

彼は、直ちに、硯池に水を盈々と注入れ、新しき筆を染めて

『御手紙被下謹而奉拜見候御尋可被成御用之儀御座候間早々貴宅迄參上可仕旨畏奉存候追付參上可仕候　巳上　十月三日　山鹿甚五左衛門　房州様。』

北條安房の召狀に接したる素行は、使を返し、悠々として食事を謐め、親戚故舊への遺書五六通を物し、嚴封して、懷にし、威儀を正し、沈着なる歩みを外に移さんとしたるが、又立返り、薫香ゆたかなる墨磨り流し、眞書の太きを嚙み下して、字體も鮮かに

蒙、二千歳の今に當つて、大に周公孔子の道を明らかにし、猶吾誤を天下に糺さんと欲し、聖教要錄を開板候處當時俗學腐儒、身を修めず、忠孝を勸めず況んや、天下國家の用をや、聊か之を知らず、故に吾書に於て、一句の論ずべきものなく、一言の糺すべきものなし、或ひは權を借りて、利を貪ぼり或ひは讒を構えて追從す、世皆之を知らず、專ら人々に任せて噓を傳へ、實否を正さず、其事を詳にせず、其理を究めず、强ゐて事を嘲りて、我を罪す、茲に於て我始めて我言の大道疑なきにあらず。天下之を辯ずるものなし、夫れ我を罪するものは周公孔子の道を罪するものなり、我罪すべくして罪すべからず、聖人の道を罪するものは、時世の誤なり。古今天下の公論然るべからず、凡そ道を知るの輩、必ず天災に逢ふ。其先從尤も多し、乾坤倒覆、日月光を失ふ、唯怨む今世に生れて、時世の誤を末代に殘すもの、是臣の罪也。誠惶頓首

十　月　三　日

山鹿甚五左衛門

北條安房守殿

の一文を草して、立ながら點を附し、同じく懷中して、しばらく眼を閉ぢて、默想したりしが、思ひ定むるところやありけむ。再び常に復したる彼の兩眼には生々たる元氣に滿ち、面上一縷の春色冴え渡り、前途に横はる問題の死か、ほとんど何等の夢懼もあらざるなりき。

一代の碩學にして、孤軍大兵に衝り、四圍の勁敵と衝りて、奮鬪せる彼は、今や敵より投ぜられたる爆彈の前に立てるなり。彼は双手を開いて、其正面の敵に當るべく、凛乎たる決心を示し、金

鐵に比すべき其覺悟の力を提げて、幕府の威力と對抗せんとするなり。

温順和平なる道學先生たるべき素行が一たび、其慄悍無双の元氣を發揮し來るや、當るもの悉く粉碎せずんば已まざるなりき。

彼は、再び跨ぐまじと決心せる其廬を出づるに方り、天下の腐儒俗學者を罵倒して、顏色なからしむべきこの宣言書を懷にし、門外既に四面敵なる境界に飛び入らんとす也。彼を載せて、北條邸に到るべき栗毛の駒は蹄を鳴らして、高く一聲の嘶を爲せり。

唯事に非ずと決心したる素行は、若者二人を供に伴れ、態と他の門生なごを遠ざけ、馬上ゆたかに、牛込榎町宗三寺に詣でぬ。

さら〳〵落葉の堆き中に、寂しく立てる一基の小碑あり。これぞ、曩世の人物希代の學者、山鹿素行の父、修立庵が、多恨の生涯を葬りたる處なり。

素行は其の碑前に跪き、生きる人に物云ふがごとく、又父上、甚五左衛門、研學攻理、たま〳〵端なくも幕府の忌憚に觸れ、今日安房殿の御召狀は、この甚五左に切腹仰付けるこの儀かと心得まする。素より我等、天理を闡明し、人道を拓き、上二千載、孔孟の敎を奉じ、和學の神髓を傳へ、本朝の權威を輝かさんとするの外、一念あるなし、五十年來、一日もこの志を離れず。素よりこれ父君の御嚴訓にござりまする。不肖、山鹿家の嗣として、如斯、未熟ながら、彼等に未練なりしの誹を蒙らんことは、某一生の不覺、山鹿家の恥と考へまする、懷中なしたる一封は、愈々天命を自及の及先に縮め、空しく邪道の擒となり、腐儒俗物の爲めに陷られ、一時は世間より全くの疑を拭い得ざる迄も、天下百年一人の知己なきにも候はず。その時、始めて我等の志を知るもの〻爲に、辯ずるものにござりまする、深川に御安居の母上には、態と何事をも申上げませぬ。御老體に御心痛相懸け申すこと我等にとりてはこの上なき心の苦み、餘所ながらの御暇乞も叶はぬ武門の習ひ、父上には、追付け御傍に參り御詫び申上げまする。」

秋風は颯々として、荒凉たる寺内に吹渡り、新佛を葬れる亂塔婆は、風に飜りて、素行の袂を打ちぬ。

富めるも貧しきも、人誰れか免れ得ざるこの佗しき運命の蔭に、我もいづれは行くべきとは知りながらもこの十月三日ぞ其人なりとは、思ひ設けぬ處なりき。

素行は、流石に父の墓前を辭し難なく見えたり。一經の香煙は縷々として、四邊に薫じぬ、合掌

して立上りたる彼は、傍に立てる若者に打向ひ『人生の無常、風前の燈の如し、汝等も亦決してその機に臨んで狼狽すること莫れ』と教訓しやがて宗三寺を出づる頃、日は漸う暮れて、淋しき町外れのこのあたりにも、ちらほらの燈の付ころなりき。素行は、直ちに安房守の邸を指しぬ。安房は奥まりたる一間にて、端然として素行の入來、今や遅しと待ち居たりき『彼、平生、斯程の大言吐き乍ら、矢張命を惜しと思へるか。』と

秋の日の暮れんとしてなほ邸に到着せぬは、いざ、さらば、もし卑怯の振舞あらんには發ねて、彼の邸を取圍み、無理にも引連れ來るべき人數、千に餘り、物の具嚴しく待たせ候ぞ。と心の中に誇と憂と而して一種の羞恥とは交々往來したりき。

素行は悠々として安房守が邸にさしかゝりぬ。門前に群なす家のもの等が物々しき形扮は、いかに彼を驚かしたりしぞ。軍に出立ばかりのその武裝を、彼はいと落付たる樣にて打見やりながら、その寂寥たる二三の供者を引つれ、傍目もふらず、馬蹄靜かに過ぎ行けり。

安房守の召狀に驚ろきて、素行門下の騒わぎ立たば、正に江戸城の大混戰をや引起すべき。浪人の亂暴には、幕府の恐縮する處なれば、いざといへば一擧して素行門を高壓して、其手足を奪はんものは、今の機を置いて、他にあるべからずと安房はかくまでに仰々しく企を爲したるなり。

然るに、案外にも、素行は二三の從者を召伴れしのみ。瓢然として其門を訪へるには、少なからず面喰つて、立腐にありし眞田伊賀は唯其圓なる眼を瞠れる已み。

『さて〳〵門外のお騒がはしきことかな。江戸城内何か大事でも起りましたか。』

と素行は冷やかに問ひながら、ずつとばかり、奥に入りぬ。

安房は起つて故らに、丁寧に。

『これは山鹿氏、早刻のお出で、忝い。』

『いや、某こそ、御召狀に預り、遲參の段平に御許し下されい。何御用かは存じませねど、大袈裟なる門外の光景、いやはや恐縮の義にござりまする。』

『左樣申されては我等却つて痛み入る。』

とばかり安房は繼ぐべき言葉なかりき。

素行は、我等のこの狼狽の狀を快げに打見やりて、既に第一歩の勝利を認めたれば、心憎きまでに泰然たり。

『御尋ねの儀何事にござりまずるか。』

『されば、其儀、其許こは永年の交誼、其許學問の精神も我等能く呑み込み居る。さりながら、世間往々其許の主張のやゝもすれば、正敎の本旨に悖り、天下の公安を妨げるこあつて、非難少うない。殊に聖敎要錄の本旨、我等も合點行かぬ點もあり。旁々、其許の決心を承り度い、其上にて我等の決心を申述ぶる考へ、一に其許の爲め惡しく取計はぬ。』

こ口籠りながら一向要領を得ざる也。されこ、彼の言外既に多少の決心を示して餘ありき。

三〇、淺野內匠頭預り

素行は飽まで澄める清水の如く冷靜なりき。その樣を見詰めながら、安房は、巖に當る礫の如くいかにも落付かぬ狀なりしが、

『其許の著書『聖敎要錄』は、無用の書にして、有害のものこの事、斯の如き無用の書を著はして天下の平安を害するがごときは、學者たる其許こしては甚だ以て怪しからぬ次第。我等も平生の誼

樣々に辯じたれこも、公儀如何こも致難し、上命に依り、其許を淺野內匠頭にお預けする。』

こ云ひ放ち、素行の顏色如何こ打眺めたりき。

彼は相變らず平然たりき。

『されば、これより直ちに、淺野家にお預けの身。若し、何事か申殘さるゝ儀ござらば、某、友誼を以つて、何なりこも申傳へるでござらう。』

北條の家臣福島某、心得たりこばかり筆硯を安房の眼前に差出し、

『何事にもあれ、申殘され、文使ひは、某屹度仕る。御遠慮には及びませぬ。』

素行は安房守の方を打見やり、

『否、今に及んで、何事をも書遺すこはござりませぬ。併し、我等の『聖敎要錄』は天地の理を闡き、人道の自然を說き、君臣の義理を論じ、聖敎の本旨を明らかにする外、餘儀ござらぬ。それが闔らず、幕府の忌憚に觸れ候事いかにも合點參らず。何の條目、何の文字が、かほこまでに、上の御瞋に觸れ、公安平和を害ふものこ認められたか。口を緘んで、法に從ふは、今の世の掟こは存ずれこも、一言一句、もしお尋ねもあらば、お答申するがまた我等學者の面目こ心得まする。』

『その儀は無用にござる。いやしくも上の御命、其許著書の中、今の制度に叶はぬところありと認められたる上は、それを辯明ありたれば迚、其許の罪は消ゆるものにはこれない。今更ら辯明抔は未練がましきことではござらぬか。』

素行はこの安房の無禮なる言辭に對して、憤然として席を蹴つて爭はんとせり。されども、當時幕府の暴力は、到底一時的言論の力を以て反抗せんことは、不可能なるのみならず、却つて學者の面目を損するの結果に終るべしと思慮したれば、

『では、何事も、お上の解釋に任せまする。』

ことばかり、斷じて再び口を開くまじく決心したり。

『重ねて私の友誼上、其許、出立後心殘りのなき樣の儀、いかにしても取計ふべければ……。』

と事は云はせず、素行は儼然として、

『その儀御無用にござりまする。家を出でます時、既に覺悟を極め、大小の事、悉く相濟ましましたれば、何事も心に係ることはござりませぬ。』

素行は、安房の召狀に依りて、生還を期せず。若し直ちに彼等の暴力の中に、切腹仰付らるゝが如きことあらんには、我半生の學問工夫の大精神を如何にして傳ふべきや。彼は、その萬一の事を期し建言書を懷にして、安房の邸に出掛けたれど、安房の口上は案外にして、彼を舊知已たる淺野公の邸に預けんといふにありき。

何事の運命にも抗はぬ素行は默然として彼等の爲すまゝに任せり。

『では、これより直ちに上命に依り、其許赤穗城主淺野內匠方に預ける。』

淺野家よりは、素行受取の役人、早や次の間に控え居りき。內命は淺野家家人に傳へられたりき。素行は、早輿に乘せられて、赤穗に送らるべきが、同人の門下六千、いづれも血氣の者共なれば、只管素行の遠謫を恨みて、一行を途中に擁し、輿籠を奪ひ去らんことを恐れ、神奈川、國府津、小田原、箱根、要所々々には、幾百の護衛物々しきこと云はん方なし。

素行は護衛の士に打向ひ、

我等平生、未熟ながら、天運の定まる所、人生の向ふ所を究めたり。事に臨みて狼狽し又は、一時の感情に激されて理不盡の暴擧なごなすべき筈なし、然るに我等、北條殿、立向ふに方りて、門外幾千の兵、物の具仰々しく、戰の場の有樣は甚だ以て心得ぬ次第、其事安房守殿にも申入れ、爾

後斯る無用の勞役あるべからずと勸告し置きたり。それにも拘らず、江戸城を離れ、東海道にさしかゝりたるに、なほ護衛の者共を除かれず。餘に以つて我等の志を小人匹夫と心得あるに似て快よからず、速かに隊伍を解き一路平安、坦々たる秋の旅、長閑に赤穗に送り屆けらるゝこと我等の望み。又無益の人騷がせもなくて、お互の雜費を省き、要ざる心の妨げを免れる。』

『御尤の儀にござる。先生は、一代の大學者、學識超凡、天下無双の英傑、さりながら、お上の怖るゝ處は、門下が先生を敬慕するの餘り、騷亂を爲さんも計られず、それを心配するの外、別儀なし、其儀不惡思召され度い。』

頑として素行の請を宥さゞりき。

松風は街風に鳴り、素行が寂しき旅の心に響きぬ。碧潮一漸、汐路はるかに、數知れぬ漁夫の釣舟は、天城の雲足を氣づかいながら、風の間を貪ほれり。

箱根の山中にさしかゝれば、幾處の峠は峠を望み、幾處の峰は峰を阻みぬ。

『其駕籠待て！。』

忽ち一團の黑雲、林の間より群り集るかと見れば、ばら〳〵と幾百人、手に手に白刃を閃かして立現はれたるに、驚く伴の衆、我を忘れて蛛蜘の子を散すが如く驅け散ばり、素行を載せたる輿のみ獨り山中に留められたり。

素行は何事の起りしかと輿籠の扉を開き見れば、

『先生、御無事でござりまするか。御安心下さりませ、私共にござりまする。』

三一、函嶺を越えて西下

駕籠の中よりは、悠然たる姿を現はせる素行の顏色は、常の如く爽かなりき。

『我等を呼止めたは誰方かの。』

『これは先生、御無事の御顏を拜し、大慶至極にござりまする、先生今度不慮の御災厄に罹らせられ、赤穗へ御下向の事承り、我等心外に堪えず、かく理不盡の振舞あるに於ては、我等一刻の猶豫も相成らぬ。平生先生の御厚恩を蒙るもの共、一揆して、先生を途中に要し奉り、之を遮る者共は、否應なしに刀の錆、我等の屍は馬前の塵、かく覺悟相極め、東海道は、品川より、要所々々を